

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



2008年3月
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表紙) 津島岡大遺跡の弥生時代早期～前期の土層から検出された
イネのプラント・オバール（写真提供：宇田津徹朗氏）

(裏表紙) 津島岡大遺跡採集の「第十七節（団）」大理石製プレート
(明治時代)

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2006

2008年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2006（平成18）年度においては、鹿田遺跡第17次発掘調査がおこなわれました。まとまった面積の発掘調査としては、2003（平成15）年度に実施した医学部附属病院病棟建設に伴う調査以来のことでした。発掘調査のない年度は、これまでに野外調査を優先させて遅れてきた室内整理作業を大いに回復させ、報告書の刊行へと結びつけることができるのでたいへん貴重な時間のですが、それでも室内作業だけの期間がながく続くと、調査員にとっては野外調査での独特の緊張感が懐かしくなるというものでしょう。本学は2004（平成16）年度から国立大学法人となり、移行時の助走期間を経て新たな施設建設が本格化しつつあるところですが、本センターとしてもこれらに伴う構内遺跡の保護と発掘調査事業の推進にこれまで以上の緊張感をもって取り組んでいきたいと考えています。

さて、鹿田遺跡第17次発掘調査では、1998（平成11）年の基礎研究棟建設地の調査で明らかになっていた中世の屋敷地の西半部を調査することとなりました。屋敷地を囲む溝の位置と方位は鹿田地区全体の地割りと密接に関係しており、鹿田遺跡の成り立ちと性格を考えるうえで重要な手がかりとなる資料が得られました。

また旭川の左岸、東山地区にある教育学部附属小学校校地においては、校舎建て替えに伴い、はじめて本格的な試掘調査を実施することとなりました。当地は操山山塊西麓の好地点にあり、今後とも遺跡の有無に注意していく必要がありそうです。

2006年度の第10回キャンパス発掘成果展は、移築新装なった旧陸軍指令部庁舎（旧事務局棟）で開催され、好評を博しました。この成果が、2007年6月に岡山市デジタルミュージアムで開催された本センター20周年発掘成果展につながった一面もあり、発掘調査の成果をひろく市民に伝えることの大切さがあらためて示されました。

2006年度の本センター事業の実施にあたっては、本学内外の機関から種々ご支援・ご協力を賜りました。末尾ながら、関係各位にあらためて厚くお礼申しあげます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長）

梶 原 憲 次

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

稻 田 孝 司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節	測量調査の概要	(野崎貴博)	1
1.	旧陸軍第十七師団駐屯地外周土塁の測量調査		1
2.	旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門と土塁の測量調査		2
第2節	立会調査の概要	(岩崎志保)	5
1.	調査の実施状況		5
2.	工学部総合研究棟改修工事：PC耐震柱基礎掘削に伴う立会調査		5
3.	公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査		6
4.	プール改修（排水管改修）工事に伴う立会調査		7
第3節	津島岡大遺跡の研究		13
1.	津島岡大遺跡土壤のプラント・オパール分析	(宇田津徹朗)	13
2.	津島岡大遺跡における植物珪酸体分析	(山本悦世)	20

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節	発掘調査の概要		24
1.	鹿田遺跡第17次調査	(光本 順)	24
第2節	立会調査の概要		29
1.	調査の実施状況	(岩崎)	29

第3章 その他の地区の調査

第1節	試掘・確認調査の概要		31
1.	教育学部附属小学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査	(野崎)	31

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節	調査資料の整理	(光本)	35
1.	調査資料の整理		35
2.	調査資料の分析		35
3.	調査資料の保存処理		36
第2節	調査成果の公開・活用	(野崎)	36
1.	公開・展示		36
2.	資料・施設等の利活用		39
第3節	2006年度調査研究員の個別研究活動		40
1.	科学研究費採択状況		40
2.	論文・資料報告		40
3.	研究発表等		40
4.	資料収集・実態調査		41
第5章	2006年度における調査・研究のまとめ	(光本)	42

付 編

1.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程		43
2.	2006年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織		45
3.	岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項		45

挿 図 目 次

第1章

図1	測量地点の位置	1
図2	旧陸軍第十七師団駐屯地外周土塁 周辺測量図	2
図3	土塁の断面	2
図4	旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門 周辺測量図	3
図5	土塁の断面	3
図6	門柱立面図	4
図7	PC耐震柱基礎地点	5
図8	PC耐震柱基礎地点の土層	5
図9	公共下水井接続工事地点	6
図10	公共下水井接続工事地点の土層	6
図11	土壤サンプル採取風景	7
図12	プール改修工事地点の土層と断面の位置	8
図13	津島地区全体図	10
図14	2006年度の調査地点【1】 津島地区	11~12
図15	試料採取トレンチ・試料採取壁の位置	14
図16	管路北壁における分析試料の採取ポイント	14
図17	イネプラント・オパールの検出密度の変化	15

図18	プラント・オパールの検出密度の変化	16
-----	-------------------	----

図19	2層と3層から検出されたイネの 穂殻由来のプラント・オパール	17
図20	7層から検出されたイネプラント・オパール	17
図21	検出された海綿骨針	18
図22	検出されたプラント・オパール	19
図23	津島岡大遺跡における植物珪酸体分析地点	20

第2章

図24	調査地点の位置	25
図25	土層柱状図	25
図26	検出遺構全体図	27
図27	2006年度の調査地点【2】鹿田地区	30

第3章

図28	試掘坑の位置	31
図29	土層柱状図	32
図30	試掘坑 No.4土層断面図	33
図31	2006年度の調査地点【3】東山地区	34

第4章

図32	展示会風景	37
図33	アンケート結果	37
図34	見学会コース	38

表 目 次

表1	2006年度津島地区調査一覧	10
表2	採取土壤のプラント・オパール 定量分析結果	15
表3	調査地点別植物珪酸体密度	22
表4	2006年度鹿田地区調査一覧	29

表5	2006年度東山地区調査一覧	34
表6	2006年度放射性炭素年代測定一覧	35
表7	第7期保存処理工程	36
表8	これまでの保存処理工程	36
表9	2007年度非常勤講師への委嘱依頼内容	39

付表・付図

付表1	1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	47
付表2	2005年度以前の構内主要調査（1983～2005年度）	47
付表3	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要	54
付表4	埋蔵文化財調査室刊行物	55
付表5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	56
付図1	2005年度までの調査地点【1】－津島地区－	59
付図2	2005年度までの調査地点【2】－鹿田地区－	61
付図3	2005年度までの調査地点【3】－三朝地区－	62
付図4	2005年度までの調査地点【4】－東山地区－	62
付図5	2005年度までの調査地点【5】－倉敷地区－	62

例　　言

1. 本紀要是、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2006（平成18）年4月1日から2007（平成19）年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市津島中一丁目1-1、二丁目1-1、三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 本文は、野崎貴博・岩崎志保・山本悦世・宇田津徹朗・光本順が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。
4. 本紀要の作成にあたっては、宮崎大学農学部宇田津徹朗氏より玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。
5. 編集は稻田孝司副センター長の指導のもとに光本が担当した。

凡　　例

1. 大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日より施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
 - 1) 津島地区では、国土座標第V座標系の座標北を基軸とし、(X=-144,156.4617m, Y=-37,246.7496m)を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
 - 2) 鹿田地区では、国土座標第V座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、(X=-149,456.3718m, Y=-37,646.7700m)を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りを用いている。
- 3) 本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、他は磁北を用いている。
2. 岡山大学構内の遺跡名は、周知の遺跡の場合はそのまま名称を踏襲する。三朝地区的発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは「試掘・確認調査」に分類する。
4. 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
5. 付表2に記載した調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて管理している。
6. 本文などで使用している調査番号は表と一致する。
7. 本紀要に掲載の地形図（図13）は、岡山市域図を複写したものである。

第1章 津島岡大遺跡の調査・研究

第1節 測量調査の概要

岡山大学津島地区の敷地は、終戦後2年を経た1947年から旧日本陸軍第十七師団駐屯地の跡地を引き継いで使用しているものである。そのため、地区内には今日でも旧陸軍関係の施設であった建物や土壘、門柱などのがこっている。

これらの施設のうち、土壘は駐屯地の外周や駐屯地内に配置された各部隊の兵営を区画するために設けられたものであり、本来は各部隊の駐留区画や、駐屯地の外周をほぼ全周するものであったことが知られている。しかし、今日では津島北地区の南辺で良好な状態を保っているものの、そのほかではブロック塀やフェンスへの造り替えが進んでおり、部分的に残存するのみとなっている。

津島地区では、近年、門の改修工事が各所で実施されているため、教育学部東通用門周辺、理学部南通用門周辺については現状を記録しておくこととし、測量調査を実施した。

1. 旧陸軍第十七師団駐屯地外周土壘の測量調査

a. 調査の経緯

教育学部南東側の通用門付近において公共下水枠設置とともに工事が施工されることとなり、土壘の一部が掘削されることとなった。そこで、掘削に先立ち、土壘の平面的な位置と形状、等高線を加えた記録の作成を目的とした測量調査を実施することとした。

調査対象とした区域は、津島北地区の南東に位置する教育学部の東通用門をはさむ東西約40m、南北約15mの範囲である。調査地ではすでに施工された門と周辺設備の改修工事によると思われる改変が加えられていたものの、門柱、門扉やフェンス等の構造物が設置されていない部分では旧状をとどめた状態で残存していた。

測量調査は2006年5月25、26日の2日間で実施し、中村大介、野崎貴博の2名が担当した。

b. 調査の成果（図2・3）

測量調査の結果、以下の点を確認できた。

- ①残存している土壘は、東西方向に構築されたものであり、今回の測量調査対象区域外にも連続していることが確認できた。土壘は門等の施設付近以外では直線的に構築されている。

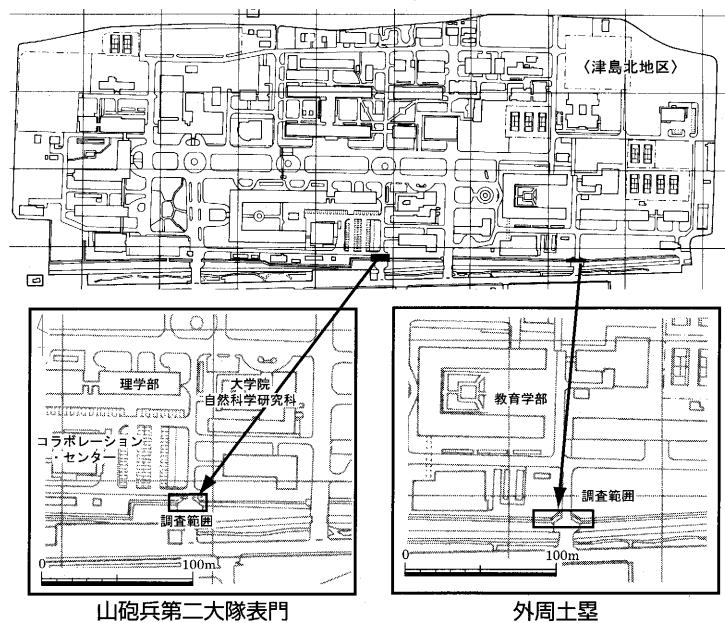


図1 測量地点の位置（縮尺1/10,000、1/5,000）

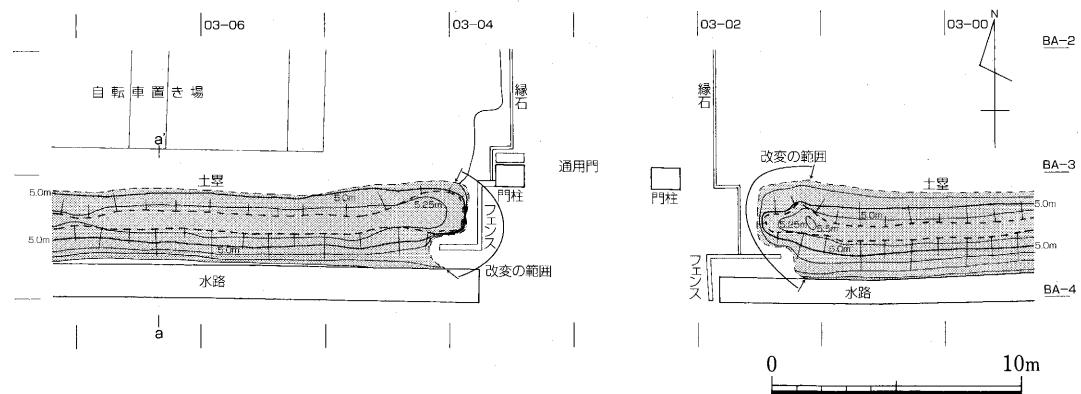


図2 旧陸軍第十七師団駐屯地外周土壘周辺測量図（縮尺1/300）

②土壘の断面は、上辺が狭い台形を呈する。土壘の高さは北側で約0.8m、南側で約1.3mであり、南側の方が高くなっている。これは東西方向にのびる土壘の南（敷地外に面する側）に幅約1m、深さ約0.5～0.6mの水路が並行しており、土壘と水路の法面が一連の斜面を形成しているためである。

③通用口をはさむ東西の土壘の端部（図2、東西の土壘端部の矢印の区間）は、通用門の改修工事によって設置された構造物の形状に沿っており、その際に掘削されたとみられる。

④今回の調査地点では、近年の門扉改修工事にともなう構造物設置のため、土壘端部の本来の形状が失われているものの、門の左右に連なる東西の土壘の端部付近の等高線をみると、いずれも緩く北向きに走行する傾向が認められる。次項で報告する山砲兵第二大隊表門に代表されるように、津島地区にのこる門では、門柱が敷地の内側寄りに設置されている。そのため、直線的に外周を巡っている土壘も門の周辺では門柱に向かって内側に屈曲し、「ハ」の字状になる特徴を有している。本調査地点の土壘についても、等高線が敷地内部（北側）に向かって走行する傾向が認められることから、本来は他の門の土壘と同様、「ハ」の字状を呈していたと推測される。

今日、津島地区の土壘の多くは削られたり、周囲への盛り土などによって埋没し、高さを減じてしたりするなど、本来の姿をとどめていないところが多い。現在の津島地区にのこされている土壘のなかで、もっとも良好にのこっている地区を対象とした今回の測量調査は、陸軍駐屯地における土壘や門の構造をうかがいしことができるデータを得ることができた点で重要である。

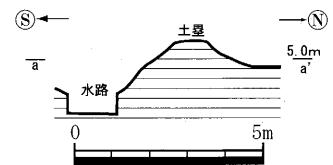


図3 土壘の断面（縮尺1/200）

2. 旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門と土壘の測量調査

a. 調査の経緯

旧日本陸軍第十七師団山砲兵第二大隊が駐留していた区画は、現在の岡山大学理学部の一帯と工学部の西半の範囲にあたる。この山砲兵第二大隊の駐留区画は隣接する輜重兵第十七聯隊や野砲兵第二十三聯隊などの部隊とは土壘によって隔てられており、それぞれの部隊には駐留区内に入るための門が設けられていた。門にはレンガ造りの門柱が建てられていたが、この山砲兵第二大隊表門は、今まで津島地区にのこっているものの中ではもっとも良く旧状をとどめている。

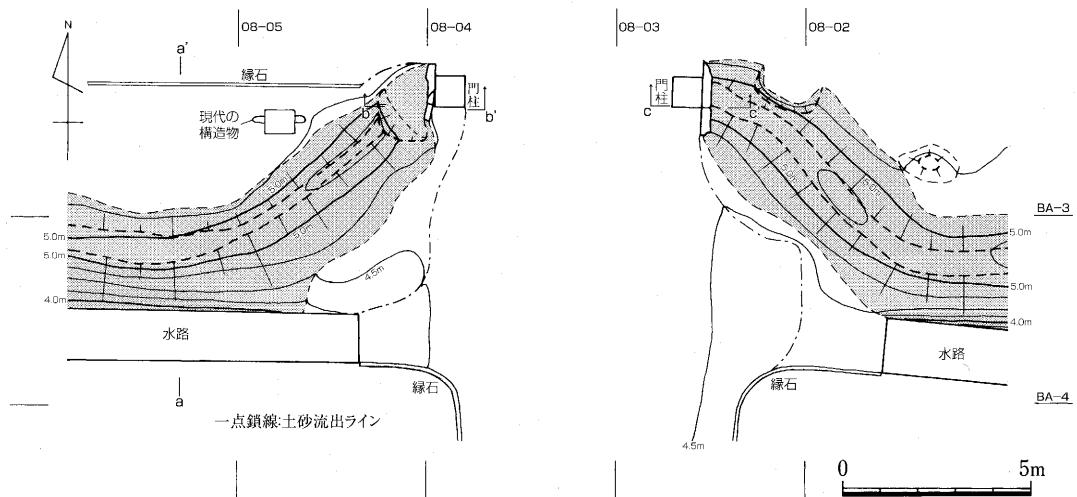


図4 旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門周辺測量図（縮尺1/200）

調査対象地である山砲兵第二大隊表門は、現在の津島地区北半区画の南辺ほぼ中央に位置し、北西には理学部棟、北東には自然科学研究科棟がある。現在は歩行者・自転車等の通用門として利用されている。

測量調査は、この門を中心とし、東西約25m、南北約12mの範囲を対象として実施した。また、門に建てられた2本の門柱については、その位置を記録するとともに、門の正面にあたる南側からみた立面図を作成した。

調査は5月31日、6月2、5日の3日間で実施し、中村、野崎が担当した。

b. 調査の成果（図4～6）

調査の結果、以下の点を明らかにできた。

- ①津島地区北半の南辺（駐屯地南辺）では、東西方向の土壘がほぼ直線的に敷地を画しているが、門に連接する部分では、土壘の延長線上よりも敷地の内側に置かれた門柱に向かって屈曲し、「ハ」字状を呈する。
- ②門（門柱）によって土壘が途切れる部分では、土壘の端部を花崗岩の切石を組み合わせた台形の石組で飾っている。石組には土壘の端部からの崩壊を防ぐ機能もあったものと思われる。
- ③土壘の断面形は上辺が狭い台形で、高さは北側で約0.8m、南側で約1.3mであった。これは土壘の南側に幅約1mの水路が並行しているため、水路の法面に連接する南側の方が高くなっているのである。
- ④門柱は東西ともレンガと花崗岩の切石でつくられており、構造も同一である。門柱の高さは約240cm、一辺約70cmの断面正方形の四角柱である。基部には正方形の花崗岩の礎石を設置し、その上にレンガを29段積み上げる。途中、25段積み上げたところで、ともに掛け金を取り付けている。その後、花崗岩の薄い板石を挟んで、さらにその上にレンガを2段積む。なお、レンガ積みの方法は、小口を6列並べる段、3列の小口の両側に長手を並べる段を交互に積み上げる小口積みとなっている。最上部には数段の凹凸を作り出して装飾を施した花崗岩の切石をのせる。天井部は緩い傾斜の寄棟状の加工を施したものである。
- ⑤東側門柱では、最上部の花崗岩の頂部に金属製のボルト3本がのこっている。また、東西の門柱とも頂部に3ヶ所のねじ穴が穿たれており、本来はこの上に照明装置が取り付けられていたことが推測される。

本調査地点は、津島地区にのこる第十七師団駐屯地当時の門では、門柱、土壘、土壘端部の土留めの状態など、もっとも遺存状態の良いものである。この門の構造や門柱の状態を観察・記録できたことにより、すでに改

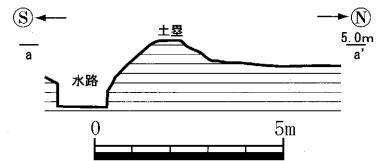


図5 土壘の断面（縮尺1/200）

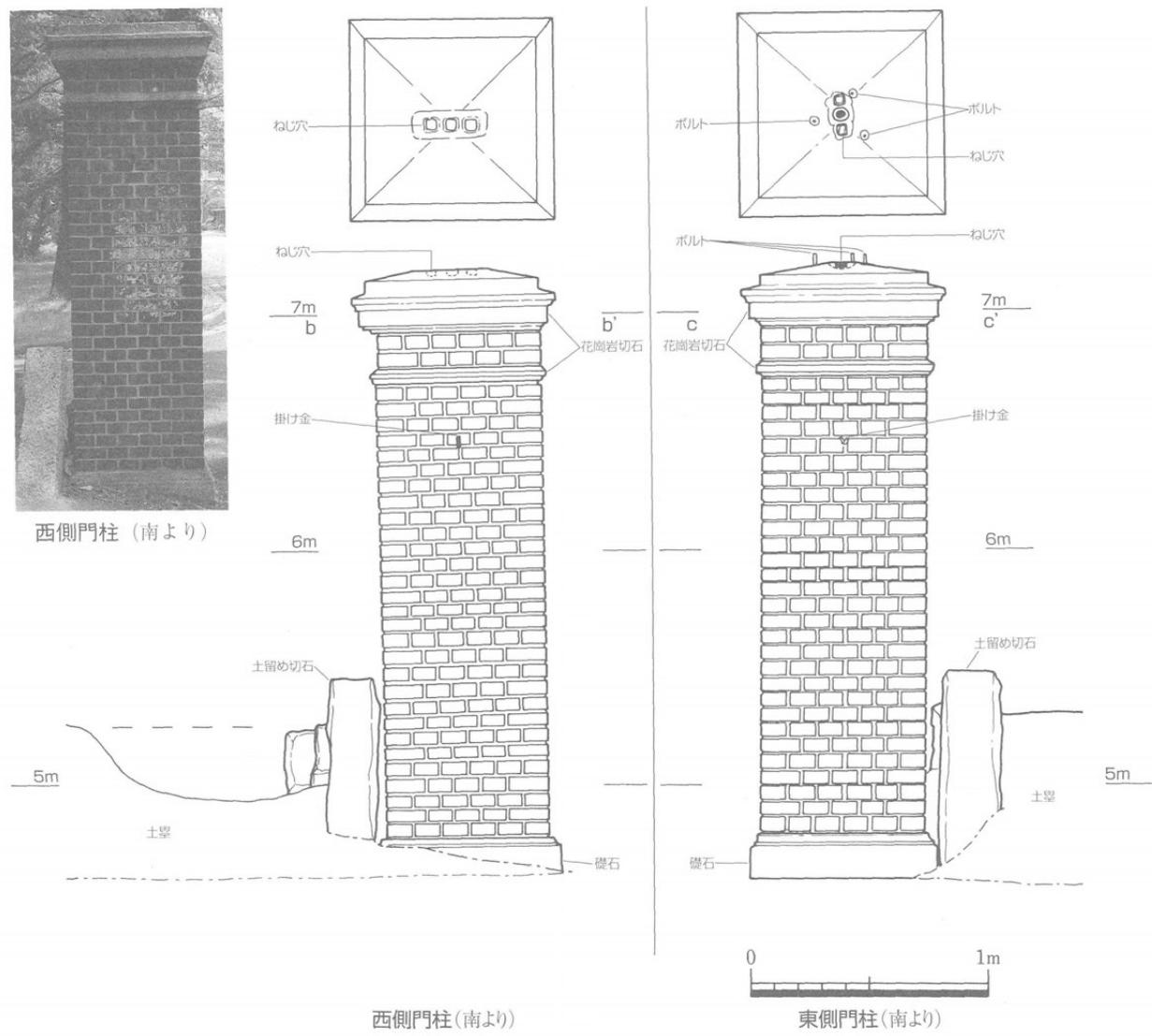


図6 門柱立面図（縮尺1/30）

変が加えられている門柱についても本来の構造を推測するためのデータを得ることができた。また、門柱と土壘の連接の仕方や門の規模など、門全体の構造を把握するための基礎的なデータを整備できたことも成果の一つである。

なお、山砲兵第二大隊表門とは別の旧陸軍第十七師団駐屯地の門を写した、当時の古写真を見ると、門には3本の門柱が立てられており、門に向かって左側の2本の門柱の間隔が狭く、通用口として用いられていたようである。そのこともあわせて考えれば、この山砲兵第二大隊表門にも3本の門柱が立てられていた可能性が高く、現在のこっている門柱の間にあったはずの1本はすでに除去されたものとみられる。

今後、今回の測量・実測調査で得られたデータをもとに、陸軍が使用していた段階の古写真等の資料を併せて検討することで、門扉等の現存しない構造物を含めた全体構造を把握することも可能となると思われる。

(野崎貴博)

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

津島地区で2006年度に実施された立会調査は15件で、うち包含層まで掘削が及んだものは7件である。津島北地区では工学部総合研究棟改修工事に伴う調査9件をはじめ、環境理工学部自転車置き場新設工事に伴う調査、教育学部周辺公共下水道接続工事に伴う調査を実施した。津島南地区では、農学部周辺での工事に伴うものほか、プール改修工事に伴う調査を実施した。

中世以前の包含層まで掘削が及んだ調査の中で、公共下水道接続工事およびプール改修工事に伴う立会調査では津島地区の中でも南東地域での土層堆積状況を確認することができ、貴重な資料の蓄積を得た。また工学部総合研究棟改修工事 PC耐震柱基礎掘削工事では工学部本館付近の調査を実施した。以下に詳細を記述する。

2. 工学部総合研究棟改修工事：PC耐震柱基礎掘削に伴う立会調査

(津島北 AX10区、調査番号2)

a. 調査地点の位置と経過（図7）

調査は工学部総合研究棟改修工事 PC耐震柱基礎掘削に伴うもので、総合研究棟の南側に南北幅3.0m、東西幅27mの範囲を、深さ1.4～1.6mまで掘削するものであった。調査期間は2006年8月18日～21日、および9月8日の3日間である。

本調査地点西端から東10mの地点で、津島岡大遺跡第21次調査が実施されている。第21次調査地点では、縄文時代中期の遺構・遺物および弥生時代前期の溝などが検出されており、全体としてはさらに南に想定される河道へ傾斜していく地点にあたるものと考えられた。本調査地点では弥生時代層までの掘削は想定されないものの、調査範囲が広いことから、土層堆積状況の確認を主眼に、調査・記録を行った。

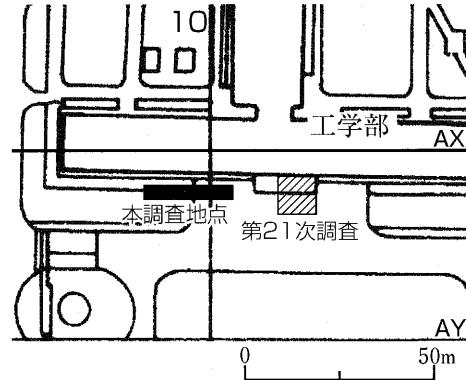


図7 PC耐震柱基礎地点（縮尺1/2,000）

b. 調査の成果（図8）

造成土以下、6枚の土層を確認した。1層は造成土である。2層は青灰色粘質土層、近代の耕作土層と考えられる。3層は暗青灰色粘質土層で、2層よりやや粘質が強まる。近代の耕作土層と考えられる。調査区東端では南北方向の溝を確認した。4層は灰黄色粘質土層で、近世の耕作土層と考えられる。5層は暗黄灰色粘質土層

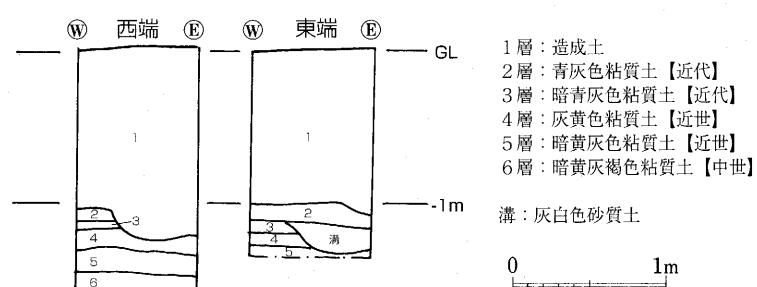


図8 PC耐震柱基礎地点の土層（縮尺1/50）

で、4層よりも粘性強まる。近世耕作土層と考えられる。6層は暗黄灰褐色粘質土層で、中世層かと考えられる。

本調査では、造成土以下中世層までを確認した。2層以下の層は東西方向・南北方向いずれにおいてもほぼ水平堆積であった。中世以降は安定した耕作地として利用されていたことが窺える。調査範囲内では河道へ向かう地形の傾斜は確認されなかった。なお、調査11でも同様の掘削が行われ、土層の確認をおこなっている。

3. 公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査

（津島北 AZ～BA・02～04区、調査番号3）

a. 調査地点の位置と経過（図9）

本調査地点は教育学部の美術工芸棟の南側入り口に設置されている公共下水栓への接続工事で、4カ所の栓の新設工事とそれらを接続する管路部分が調査の対象である。掘削深度は栓部分で1.5～2.3m、管路部分では1.3～2.2mであった。北側の深度が浅く、a断面付近で1.5m、最も深いのが既に設置されている公共下水栓で、その接続管路の深さ2.3mを測る。調査期間は2006年9月4日～21日までである。以下に調査地点全体の土層を総合して記述する。

b. 調査の成果（図10）

①層序

1層は造成土及び土壘である。上面の標高4.2～4.3mである。陸軍駐屯地として利用されていた時の土壘が残っており、c断面に記している。現在、土壘の下端幅は2.4m、高さ約0.8mが残っている（第1章第1節測量調査参照）。2層は青灰色砂質土層で、近代の耕作土層と考えられる。上面の標高は3.8～4.0mである。3層は黄灰色砂質土層で、近世の耕作土層と考えられる。4層は黄灰色粘質土層。近世の耕作土層と考えられる。3・4層はともに鉄分・マンガンを多く含み、沈着する面を複数確認できる。調査範囲の北側では3層を3a・3b

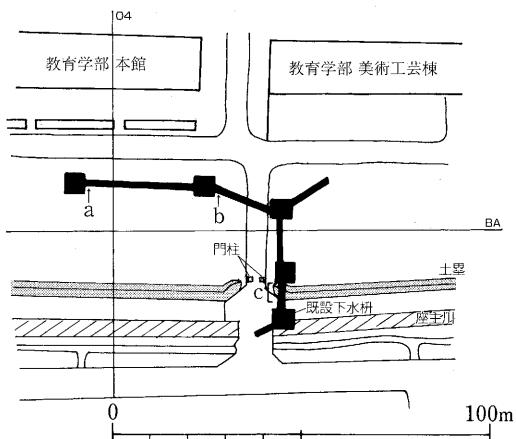


図9 公共下水栓接続工事地点（縮尺1/2,000）

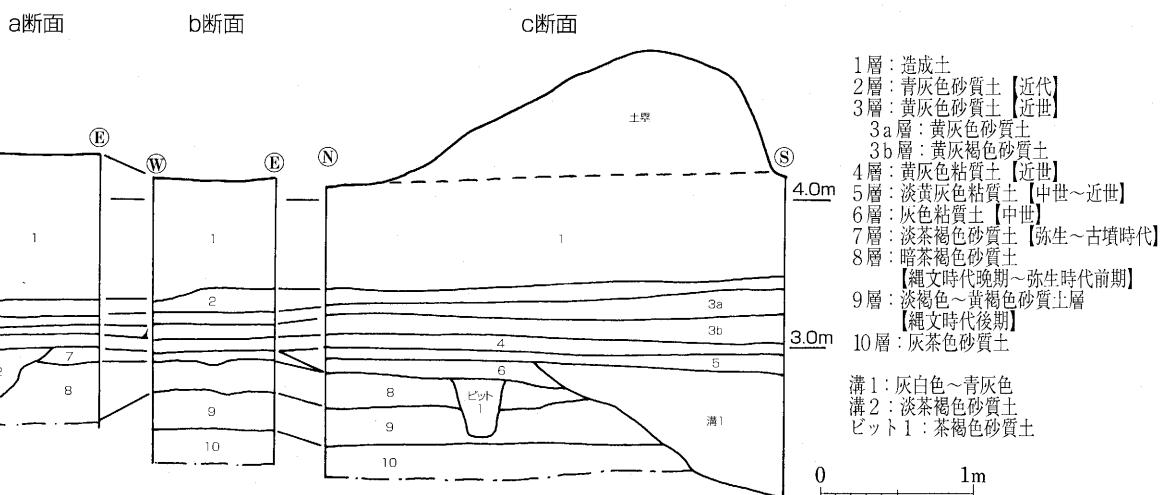


図10 公共下水栓接続工事地点の土層（縮尺1/50）

層の二枚に細分できる。5層は淡黄灰色粘質土層で、中世～近世の耕作土層と考えられる。調査区の南側で認められ、北側では近世層によって削平されているものと思われる。6層は灰色粘質土層で、中世の耕作土層と考えられる。本層の上面から東西方向の溝（溝1）が検出された。南側の立ち上がりは確認できていない。7層は淡茶褐色砂質土層。弥生～古墳時代と考えられる。8層は暗茶褐色砂質土である。津島地区で確認されるいわゆる「黒色土層」にあたる。上面の標高が北側では3.4m（a断面）、南側では3.3m（b断面）と、わずかに南に傾斜するものと考えられる。9層は淡褐色～黄褐色砂質土。10層は灰茶色砂質土。南に向かうにつれ粗砂の比率が増え、青みを増す。

②地形

本調査地点では、造成土以下10枚の土層堆積状況を確認した。9・10層は縄文時代後期の基盤層と考えられる。「黒色土層」にあたる8層上面の標高が3.3～3.4mと比較的高い微高地が拡がっていることがわかった。c断面にみられるように、この地点では中世以降に8層上面の削平を受けていることが確実である。

7～5層の層厚は北側が薄く南側が厚く認められ、北が高く南が低いという地形の傾斜を解消していくように堆積している。4段階からは平坦な地形となり、以後現代まで平坦な地形が続く。

③遺構

溝1（a断面）：6層上面で確認した東西方向の溝である。南側の立ち上がりは調査範囲外であるため、規模は不明である。南の上がりはおそらく現在の座主川の下にあたるものと想定される。埋土は灰白色～青灰色を呈する粘質土を主体とする。遺物は出土していないが、層位から中世のものと考えられる。

溝2（a断面）：7層上面で確認された溝である。埋土は、淡茶褐色砂質土である。一部が確認されたのみで幅は不明である。7層の直上には近世層が堆積していることから、上面は削平を受けているであろうが、確認できた深さは0.3mを測る。北東～南西方向に走行するものと推測される。出土遺物は見られないが、弥生時代～古墳時代初頭の時期と考えられる。

ピット1（c断面）：8層上面で確認した。径0.3m、深さ0.4mを測る。埋土は茶褐色砂質土で、遺物は見られなかった。弥生時代前期以降と考えられる。

出土遺物はいずれの遺構でも確認できなかった。8層の上面にはa～b断面では洪水砂と考えられる7層が覆っていることから畦畔が残っている可能性も考えられる。

以上、教育学部周辺ではこれまでに広範囲の調査ではなく、地形の変遷や土地利用状況について貴重な情報を得ることができた。また、本調査地点では土壤分析のための試料を宮崎大学宇田津徹朗先生に提供した。2006年9月19日にb断面付近において1～5・7～10層の土壤サンプル採取を実施した（図11）。分析報告は第1章第3節を参照されたい。

4. プール改修（排水管改修）工事に伴う立会調査

（津島 BB02区、調査番号5）

a. 調査地点の位置と経過（図12）

2005年度からの継続工事で、津島南地区東側に位置するプールの排水管改修工事に伴う立会調査である。昨年度報告の枠10から既設の公共下水枠までの間で管路と枠1カ所を新設するものである。掘削深度は枠部分で2.3

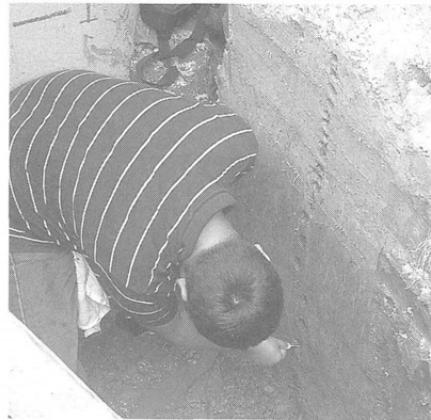


図11 土壤サンプル採取風景

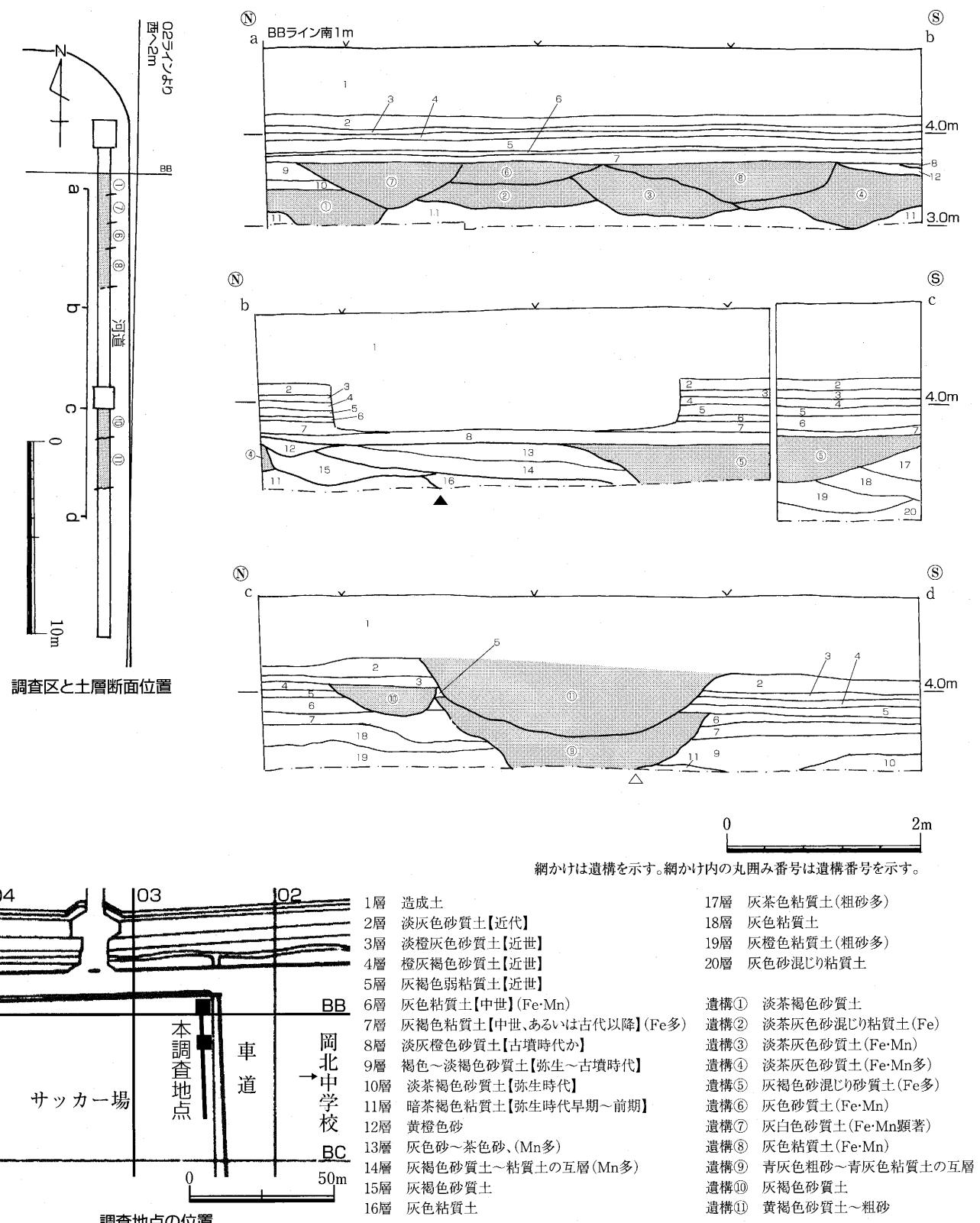


図12 プール改修工事地点の土層と断面の位置 (縮尺 1/60、1/300、1/2,000)

m、管路で1.7~1.95mで、北へ向かって傾斜する。造成土以下、いわゆる「黒色土」層まで掘削が及んだ。調査期間は9月28日~10月3日である。

b. 調査の成果 (図12)

①層序

1層は造成土で上面の標高4.8~4.85mを測る。2層は淡灰色砂質土層で、近代の耕作土層と考えられる。上面の標高4.25mである。3層は淡橙灰色砂質土層、4層は橙灰褐色砂質土層、5層は灰褐色弱粘質土層で、いずれも近世の耕作土層と考えられる。3~5層はともに鉄分・マンガンを多く含み、それらが沈着する面を複数確認できる。6層は灰色粘質土層で、中世の耕作土層と考えられる。上面の標高3.85mを測る。7層は灰褐色粘質土層で、中世あるいは古代の耕作土層と考えられる。上面の標高は調査区南側で3.7m、北側で3.8mを測る。7層上面まではほぼ水平堆積である。8層は淡灰橙色砂質土層である。bc断面でのみ堆積が認められた。出土遺物はなく層位関係から古墳時代と考えられる。9層は褐色~淡褐色砂質土で、出土遺物はなく土質などから弥生時代~古墳時代初頭の可能性が考えられる。上面の標高3.6~3.7mである。10層は淡茶褐色~茶灰色砂質土層である。上面の標高3.4mを測る。出土遺物はなく層位関係から弥生時代と考えられる。9・10層および後述の11層はab断面の北側及びcd断面の南側で堆積が認められる。11層は暗茶褐色粘質土層である。津島地区で確認される「黒色土」層にあたる。上面の標高3.2~3.3mを測る。12~20層は灰色~茶灰色を呈する砂質土、あるいは灰色砂質土と粘土が互層となる土層からなり、粗砂・鉄分を多く含むなど水流を窺わせる特徴をもつことから、これらは河道を埋める埋土にあたるものであろう。

②地形

本調査地点では11層(「黒色土」層)の上面が3.2~3.4mを測る微高地状を呈していたことがわかった。調査地点の中央付近(構内座標BBラインより南約7.5~12.5mの間、図12▲~△印間)では9~11層の堆積はみられず、この間に弥生時代前期以降古墳時代までの時期の河道が流れていたものと思われる。東西方向に近い方向をとるものと考えられる。この河道は12~20層によって古墳時代までに埋没する。8層は河道上位にあたるところが7層に削平されずに残ったものとみられる。また7層下面では遺構⑨・⑪を境として北と南とでは段が認められ、北側が10cm程度高くなっている。7層上面以降、つまり中世以降の土層はほぼ水平堆積をなしている。

③遺構

遺構① ab断面で11層上面から切り込む遺構を確認した。調査区北端にかかるおり、規模・方向を確定できる情報は得られなかった。出土遺物はなく、時期としては弥生時代の範疇と考えられる。

遺構②~⑧ 9層上面で確認される遺構⑥~⑩と、それらの下位に重複する遺構②~⑤を確認した。いずれも断面形状と東壁・西壁の対応関係から溝の可能性が高い。その多くは東西方向に近い方向を取るものとみられるが、狭い調査範囲の中では断定はできなかった。断面で規模を確認できたものは遺構⑦・⑧で、遺構⑦は幅1.7m、深さ0.45m、遺構⑧は幅2.4m、深さ0.4mを測る。遺物は遺構⑦から土師器の小片が出土したのみである。これらの遺構の時期としてはこれまでの調査成果もあわせて、弥生時代~古墳時代前半のものと考えられる。

遺構⑨ 6層上面から掘りこまれた東西方向の溝である。幅2.8mで、深さは確認できていない。出土遺物は見られなかつたが、層位関係から中世と考えられる。

遺構⑩ 4層上面から掘りこまれた東西方向の溝である。幅1.1m、深さ0.3mを測る。近世と考えられる。

遺構⑪ 1層(造成土)で埋まる東西方向の溝で、幅3.2m、深さ0.7mを測る。陸軍による造成直前まで機能していた用水路とみられる。中世の溝(遺構⑨)と重複する位置にあたること、またその地点は弥生時代前期以降とみられる河道の肩にあたることが注意される。中世溝⑨と近代溝⑪との間は不連続とみえる。しかし近代溝による削平のため確認できないものの、この位置に継続的に溝が配置されてきたことは充分に想定される。

c. まとめ

以上のように、本調査地点では「黒色土」層（11層）まで掘削が及び、弥生時代～現代までの土層堆積状況及び旧地形、東西方向の溝を中心とする遺構を確認した。旧地形としては「黒色土」上面の標高3.2～3.4mを測る微高地の拡がりとその間に位置する河道を確認した。河道の肩に複数の溝の掘削が認められ、河道の南側では中世以降主要な用水路がつくられる。また本調査点の東約70mに位置する津島江道遺跡では、弥生時代早期の水田畦畔や、古代の多くの遺構・遺物の検出などの成果が得られている。今回確認された微高地は津島江道遺跡へと続くものとみられる。昨年度から継続された一連の立会調査によって津島南地区のなかでも東端にあたる一画の状況が明らかとなってきたことは大きな成果である。

(岩崎志保)

表1 2006年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内容
1	立会	津島北	AU～AW08	工	工学部総合研究棟II期改修工事：電柱新設	8.7	1.9～2.1	3箇所、基盤とみられる砂層～近世層まで
2	立会	津島北	AX10	工	工学部総合研究棟II期改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去・PC耐震柱基礎掘削	8.18～21, 9.8	1.8	近代耕作土層以下、中世層まで5枚の層を確認。近世面で南北方向の溝を確認。
3	立会	津島北	AZ～BA・02～04	教育	教育学部公共下水桿接続工事	9.4～21	2.3	桿1箇所、深さ2.3m。配管、深さ1.05～1.92m。黒色土層あるいは基盤層まで掘削。東西方向の溝確認。
4	立会	津島北	AW10	工	工学部総合研究棟II期改修工事：機械設備	9.12	0.75	既設工事内
5	立会	津島北	BA・BB02、BC02	事	プール改修配管接続工事	9.28～10.3	1.7	黒色土層あるいは基盤層まで。古墳時代頃の溝状造構を確認。
6	立会	津島南	AV09	工	工学部総合研究棟II期改修工事：外灯新設	11.13	1.2	造成土内
7	立会	津島北	AW10	工	工学部総合研究棟II期改修工事：配水管	12.5	0.8	造成土内
8	立会	津島南	BE15、BF16	農	農学部仮設電気引き込み工事	12.12		オーガー4箇所、造成土内
9	立会	津島北	AX10	工	工学部総合研究棟II期改修工事：接地極・管路	12.18	1.7	管路1.0m、接地極1.7m、近代層まで
10	立会	津島北	AX08	工	工学部総合研究棟II期改修工事：機械設備	12.25	0.6	造成土内
11	立会	津島北	AX08～09	工	工学部総合研究棟II期改修工事：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	12.25～27	1.8	古墳～弥生層まで
12	立会	津島北	AV10、AW10	工	工学部総合研究棟II期改修工事：電気設備工事	12.26	1.2	既設工事内
13	立会	津島南	BF16	農	農学部2号館南電柱移設	07.2.23	2	中世層まで
14	立会	津島南	AX11	事	津島キャンパス環境整備：道路	07.3.13	1	造成土内
15	立会	津島北	AW02～03	環	環境理工学部自転車置き場	07.3.27	0.55	造成土内

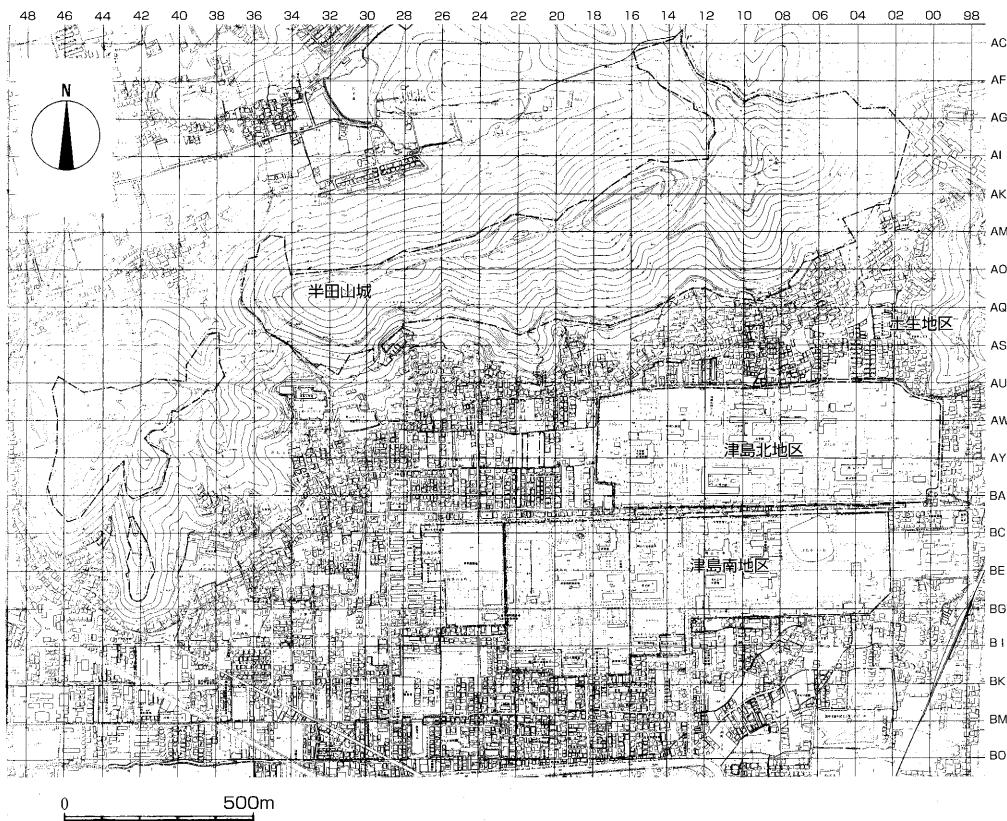


図13 津島地区全体図（縮尺1/20,000）

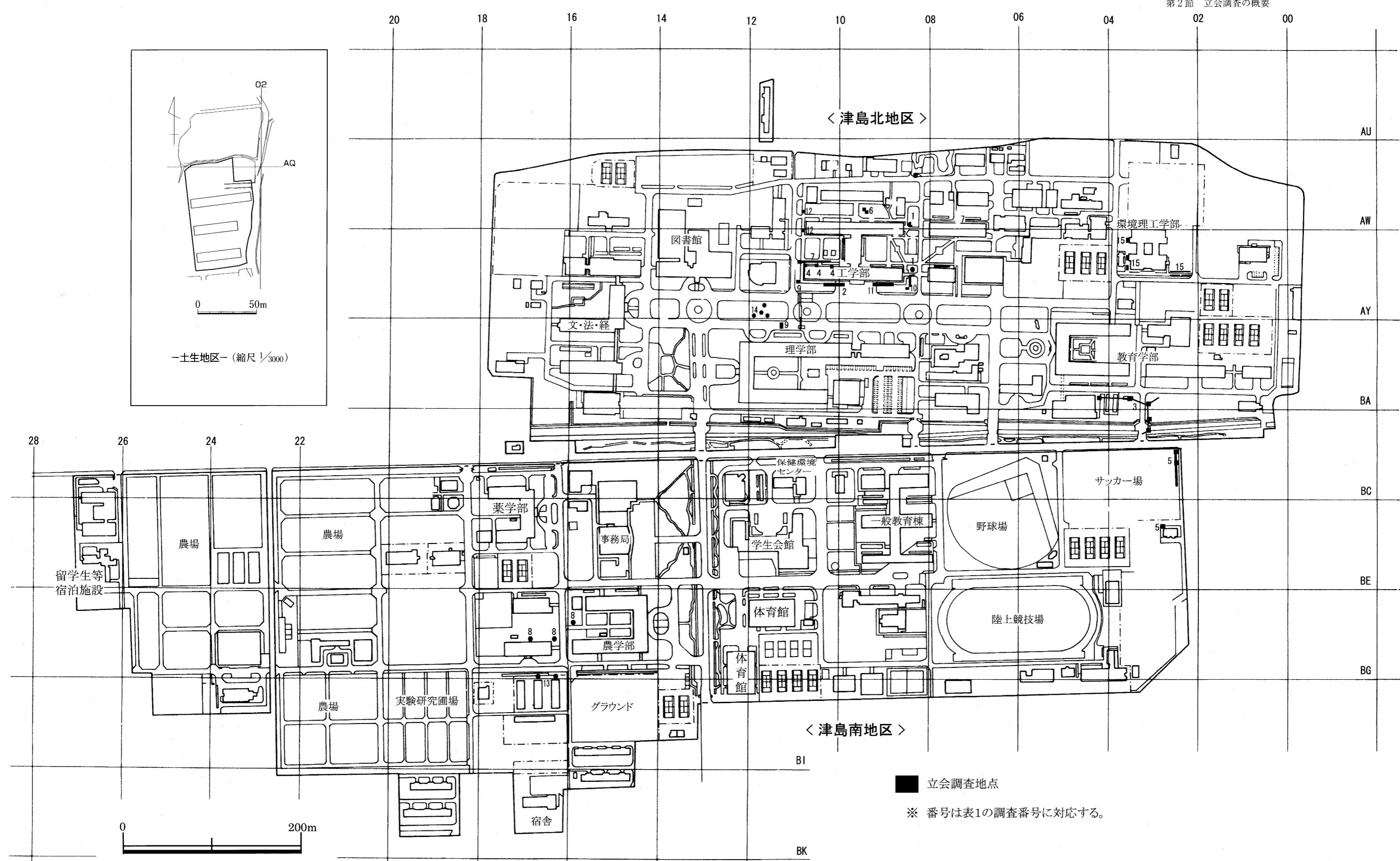


図14 2006年度の調査地点【1】一津島地区一 (縮尺 1/4,000)

第3節 津島岡大遺跡の研究

1. 津島岡大遺跡土壤のプラント・オパール分析

宇田津 徹朗（宮崎大学農学部）

a. はじめに

イネ科などの草本やクスノキ科などの木本の中には、土壤中の珪酸 (SiO_2) を細胞壁内に蓄積する性質をもつものがある。珪酸の蓄積が進むと、植物珪酸体 (silica body) と呼ばれる細胞の形をとどめた珪酸の殻が植物体内に形成される。

植物珪酸体は植物体が枯死し、分解された後も、その形態的な特徴をとどめたまま、土壤中に残留する。これがプラント・オパール (plant opal) である。

プラント・オパールはその組成から化学的、物理的な風化に強く、条件がよければ半永久的に土壤中に残留する。プラント・オパールの形や大きさは、由来する植物や細胞によって違いがあり、遺跡土壤などから検出されたプラント・オパールを調べることで、土壤が堆積した期間に存在した植物（給源植物）を同定することができる。中でも、イネ科植物については、葉身中の機動細胞に由来する植物珪酸体（機動細胞珪酸体）から同定できるものが多く、イネなど農耕に関わる植物の同定も可能である。また、耐熱性に優れていることから、焼成温度が低い土器の胎土中からも抽出・同定が可能である。

このようなプラント・オパールの特性を利用して古代の植生や環境、農耕を推定・復元する方法をプラント・オパール分析法という¹⁾。

ここでは、岡山大学構内遺跡である津島岡大遺跡の土壤について、プラント・オパール分析を行った結果について報告する。

なお、今回の分析は、筆者が代表者である文部科学省科学研究費補助金による研究課題「縄文時代の稻作マップ作成にむけた実証的調査研究」の一環として実施したものである。

b. 試料採取の概要

試料採取は、2006年9月19日に実施した。調査地点は、図15に示す教育学部南側に所在する。今回の立会調査は、同学部の下水接続工事にともなうものである。

以下に、調査の概要を述べる。

1) 試料採取地点の設定

試料採取地点は、掘削がなされた管路の北壁に相当している（図15左上）。岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの調査担当者との検討の結果、当該遺跡の文化層の特徴（Fe や Mn の集積）が確認できる土層の存在や堆積が安定している点などから、調査区北壁の西側の地点から試料採取を行うこととした。

2) 分析試料の採取

分析試料は、図16に示すように、盛土である1層から9層までの各層から2～3試料を採取した。なお、試料採取の際には、土層面および採取土壤塊を十分に観察し、木の根などの上層土壤の影響が懸念される部分が入らないよう行った。

採取した土壤は、盛土を含め23試料である。

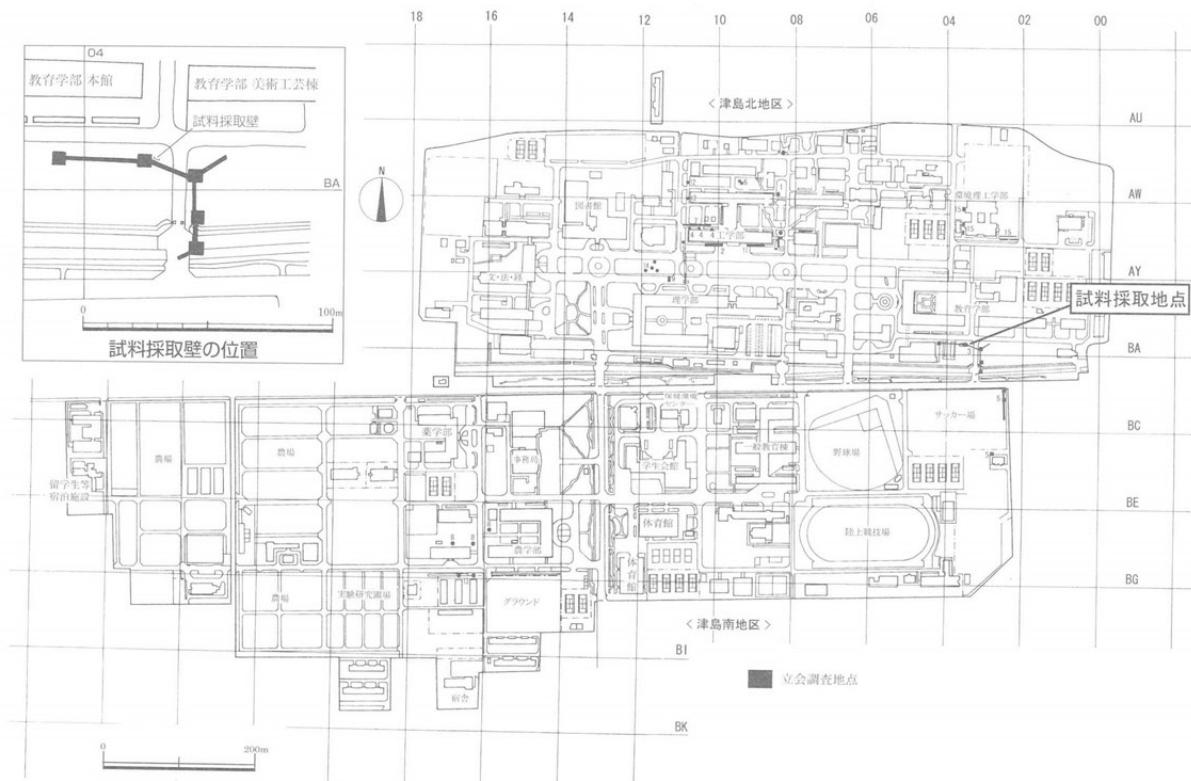


図15 試料採取トレンチ・試料採取壁の位置 (縮尺 1/10,000、1/3,000)

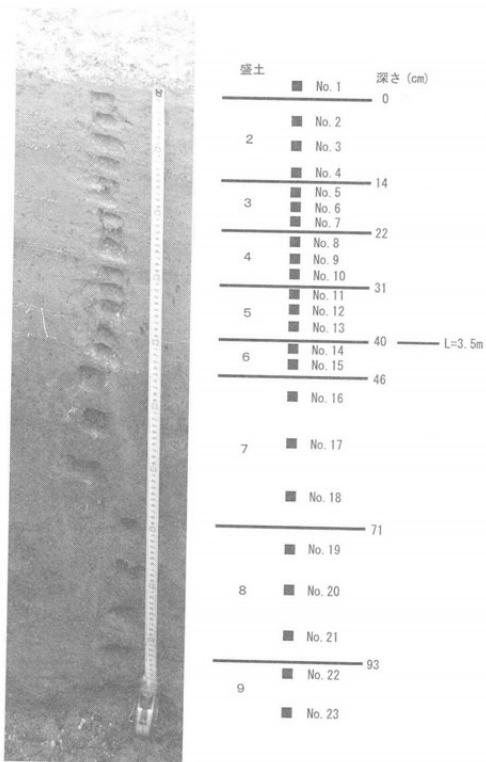


図16 管路北壁における分析試料の採取ポイント
(採取日2006年9月9日)

c. 試料の分析

採取した土壤試料は、以下に述べるプラント・オパール定量分析用試料に調整し、分析を行った。

【プラント・オパール定量分析法】^{1),2),3)}

プラント・オパール定量分析法は、土壤 1 g 当たりに含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの数を求める方法である。

定量法には、ガラスピーブ法を用いる。ガラスピーブ法では、土壤 1 g 当たりに約30万個のガラスピーブを混入する。混入するガラスピーブは、直径が機動細胞由来のプラント・オパールと同じ 30~40 ミクロンであり、組成も同じガラスである。そのため、ガラスピーブは、分析試料の調整作業にともなう物理的・化学的影響をプラント・オパールと同じように受けると考えることができる。したがって、土壤中のガラスピーブとプラント・オパールの数の比は、調整前と調整後で変化しないという仮定が成り立つ。

この仮定から、顕微鏡観察によって計数されたプラント・オパールとガラスピースの数から、土壤に含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの密度を算定することが可能である。

土壤にガラスピースを混入した後は、水と水ガラスを加え、超音波(250W, 38KHZ)を20分程度、照射する。水ガラスを混入するのは粒子を分散させ、超音波処理の効果を高めるためである。また、超音波を照射することにより、プラント・オパールに付着した粘土粒子を除去することができる。超音波を照射した後、ストークス沈底法により、10ミクロン以下の粒子を除去する。その後、試料を乾燥し、定量分析用試料とする。

検鏡用プレパラートは、封入剤に試料を展開し作成する。封入剤には、カナダバルサムなどいろいろなものがあるが、火山ガラスとほぼ同じ屈折率をもつオイキット(EUKITT)を用いる。オイキット中に試料を展開すると、火山ガラスが光学的にマスク(mask)される(見えにくくなる)ため、テフラ(tephra)が多い地域の分析では検鏡効率を高めることができる。

プラント・オパールの給源植物の同定(検出されたプラント・オパールがどの植物に由来するものかを決定する)は、光学顕微鏡を用い、100倍~400倍に拡大したプラント・オパールの大きさ、形状、裏面の模様などを総合して行う。

今回、定量を行ったイネ科植物は、イネ(*Oryza sativa L.*)、ヨシ属(*Phragmites*)、タケ亜科(*Bambusoideae*)、ウシクサ族(*Andropogoneae*)、キビ族(*Paniceae*)である。

d. プラント・オパール定量分析の結果

表2、図17および図18は、プラント・オパール定量分析結果を示したものである。

イネに関しては、2層~7層まで連続してイネプラント・オパールが検出されている。検出密度からみると、少なくとも、2層~6層は、水田またはその近傍の土壤であると推定される。2層、3層は、イネのプラント・オパールの検出密度が非常に高いのに対して、ヨシ属、キビ族の検出がほとんどないことから(図18参照)、かなり安定して営まれた水田である可能性が窺える。これらの層からは、イネの機動細胞由来のプラント・オパールの他にも、糊殻の表皮細胞由来のプラント・オパールも検出されている(図19)。

表2 採取土壤のプラント・オパール定量分析結果

層名	標高(m)	イネ (<i>O. sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
1	3.95	0	0	993	0	0
2-1	3.86	13,144	469	4,225	6,102	469
2-2	3.82	10,466	0	5,814	10,466	1,163
2-3	3.79	10,714	1,128	7,895	3,947	0
3-1	3.75	3,814	1,090	9,807	3,814	1,090
3-2	3.72	6,407	1,165	5,825	5,825	0
3-3	3.69	9,173	612	3,058	5,504	612
4-1	3.66	3,295	0	7,139	2,197	0
4-2	3.63	2,831	566	7,359	3,963	1,132
4-3	3.61	3,871	1,106	2,765	6,636	1,106
5-1	3.58	5,117	0	8,955	6,397	1,279
5-2	3.55	1,913	638	7,653	6,378	0
5-3	3.52	2,315	579	10,420	2,315	579
6-1	3.49	3,934	0	12,926	7,306	1,124
6-2	3.46	2,146	537	15,024	5,902	1,073
7-1	3.42	547	0	19,681	4,373	0
7-2	3.35	0	0	28,125	8,789	2,930
7-3	3.26	653	0	20,908	7,187	0
8-1	3.17	0	531	11,151	5,310	0
8-2	3.10	0	0	12,456	4,745	0
8-3	3.02	0	0	4,094	3,509	0
9-1	2.94	0	532	1,064	2,128	0
9-2	2.88	0	0	4,232	605	0

(単位: 個/g)

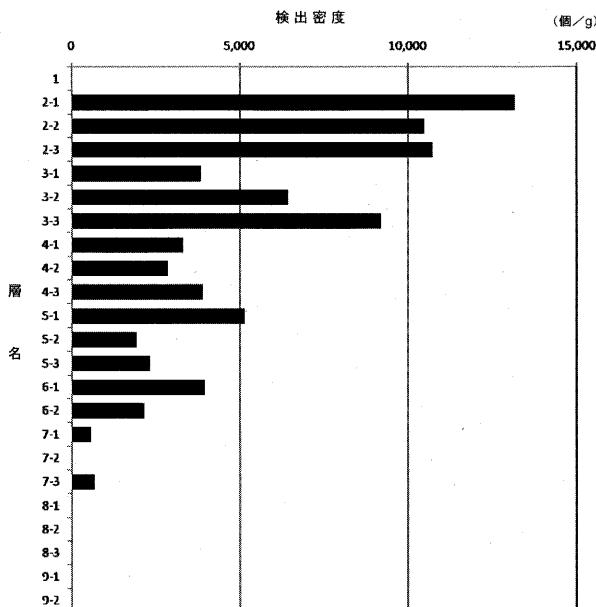


図17 イネプラント・オパールの検出密度の変化

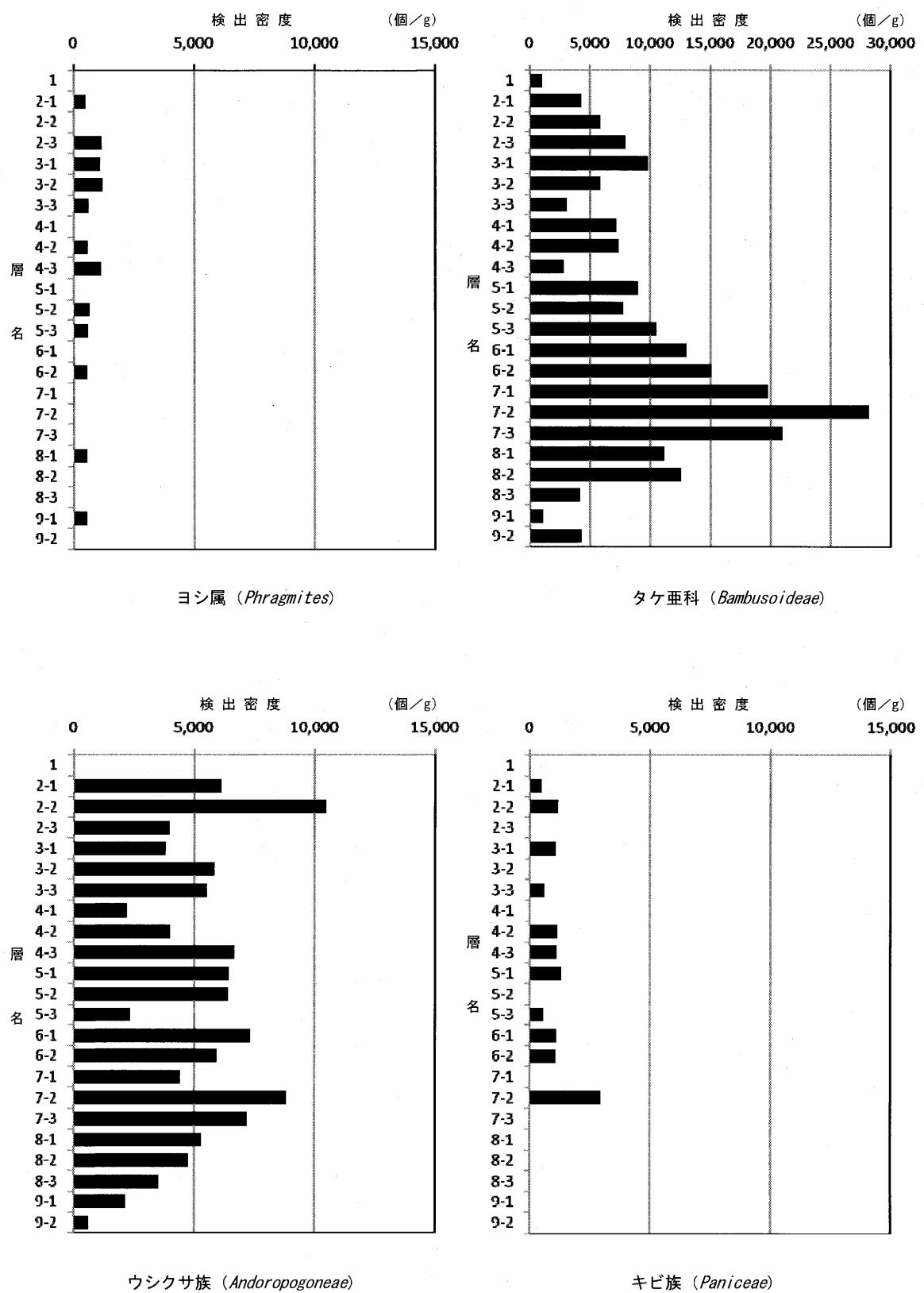


図18 プラント・オパールの検出密度の変化（ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族、キビ族）

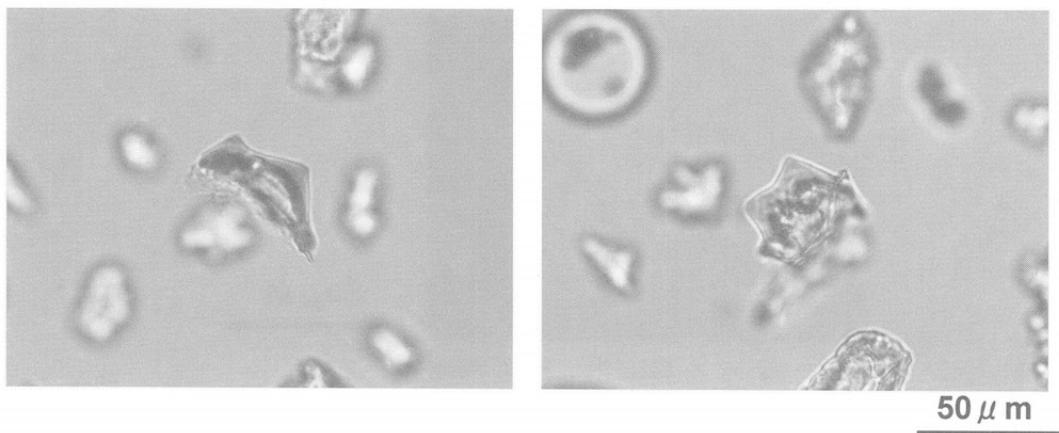


図19 2層と3層から検出されたイネの穀殻由来のプラント・オパール

7層については、イネプラント・オパールが検出されている（図20）が、その密度は低く、特に7-1層は上層の6-2層からの影響（落ち込み）の可能性を視野に入れて評価する必要がある。しかし、7-1層から7-3層の検出密度の変化を見ると、一度、7-2層で未検出となった後、7-3層では、7-1層を超える密度の上昇が見られる。また、タケ亜科やウシクサ族の検出密度は6-2層よりも7層が高く、また7-2層からはキビ族も検出されるなどプラント・オパール組成の点でも違いが認められる。

プラント・オパールはその給源植物にかかわらず大きさが同じであれば土壤中で同様に挙動するはずである。したがって、以上の結果から、7-3層から検出されたイネプラント・オパールが6-2層の影響によるものである可能性は低いと判断され、7層の時代には、イネが存在していたと推定される。

なお、図18に示すように、7層の時代には、タケ亜科やウシクサ族の検出密度がかなり上昇しており、プラント・オパール分析からは、試料採取地点は比較的乾燥した環境であったと考えられる。したがって、検出されたイネプラント・オパールは、近傍に存在した生産遺構の土壤の影響を捉えた可能性が高い。

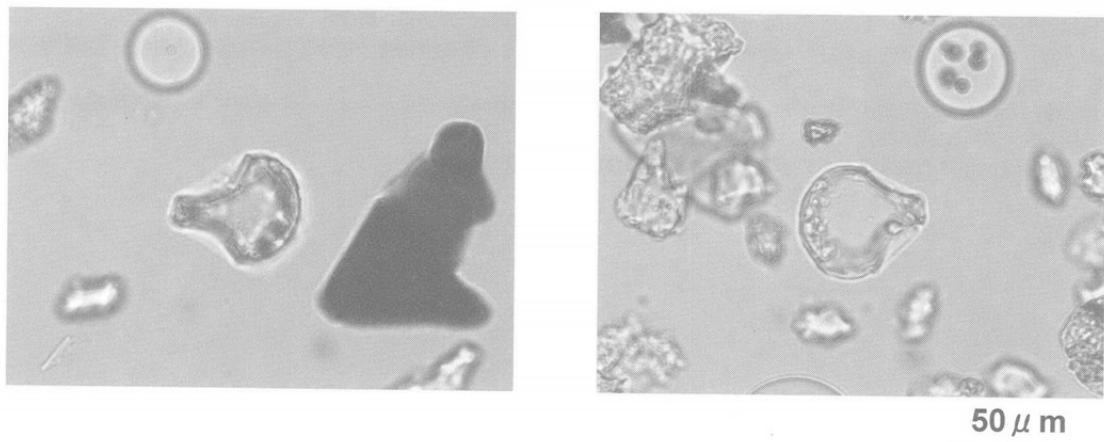


図20 7層から検出されたイネプラント・オパール

その他、4層の土壤からは、海綿骨針が検出されている（図21）。他の土層からは、一定密度の検出がなかつたことから、この時代には、供給の原因は特定できないものの、海綿骨針が供給される環境または人間活動の影響が存在したと考えられる。

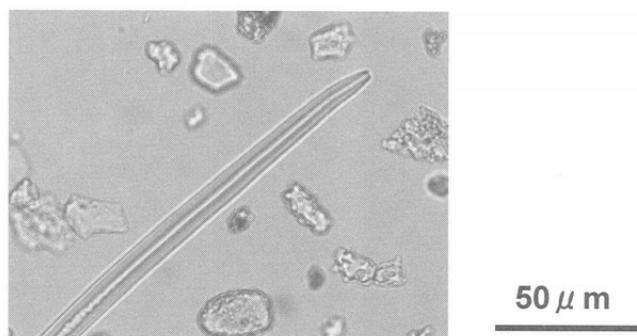


図21 検出された海綿骨針

e.まとめ

津島岡大遺跡の土壤についてプラント・オパール分析を実施した結果、以下のことが推定される。

- ① 2層～6層の時代には、調査地点またはその近傍で稲作が継続的に営まれていたと推定される。特に2層と3層の時代は安定した稲作であったと考えられる。
- ② 7層の時代についても、イネプラント・オパールが検出されており、稲作が存在していたと考えられる。

以上の結果は、当該調査地点の比較的近くで実施された第5次調査^④によって明らかにされた各土層の利用状況と符合する点が多い。特に2層～5層については、2層が近代、3～4層が近世、5層が中世の水田であるという点は、プラント・オパール分析の結果と極めてよく一致している。6層については、弥生から古代の水田あるいはその近傍土壤である可能性が高いと考えられる。

7～3層については、最も古い場合には、縄文時代晩期後半となる可能性もあり、今後、時代の確認も含め検討を進めてゆく必要があろう。

註

- 1) 宇田津徹朗 2003「プラント・オパール分析」松井章編『環境考古学マニュアル』同成社 pp.138-146
- 2) 藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9 pp.15-29
- 3) 藤原宏志・杉山真二 1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の調査-」『考古学と自然科学』17 pp.73-85
- 4) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編 1994『津島岡大遺跡4-第5次調査』

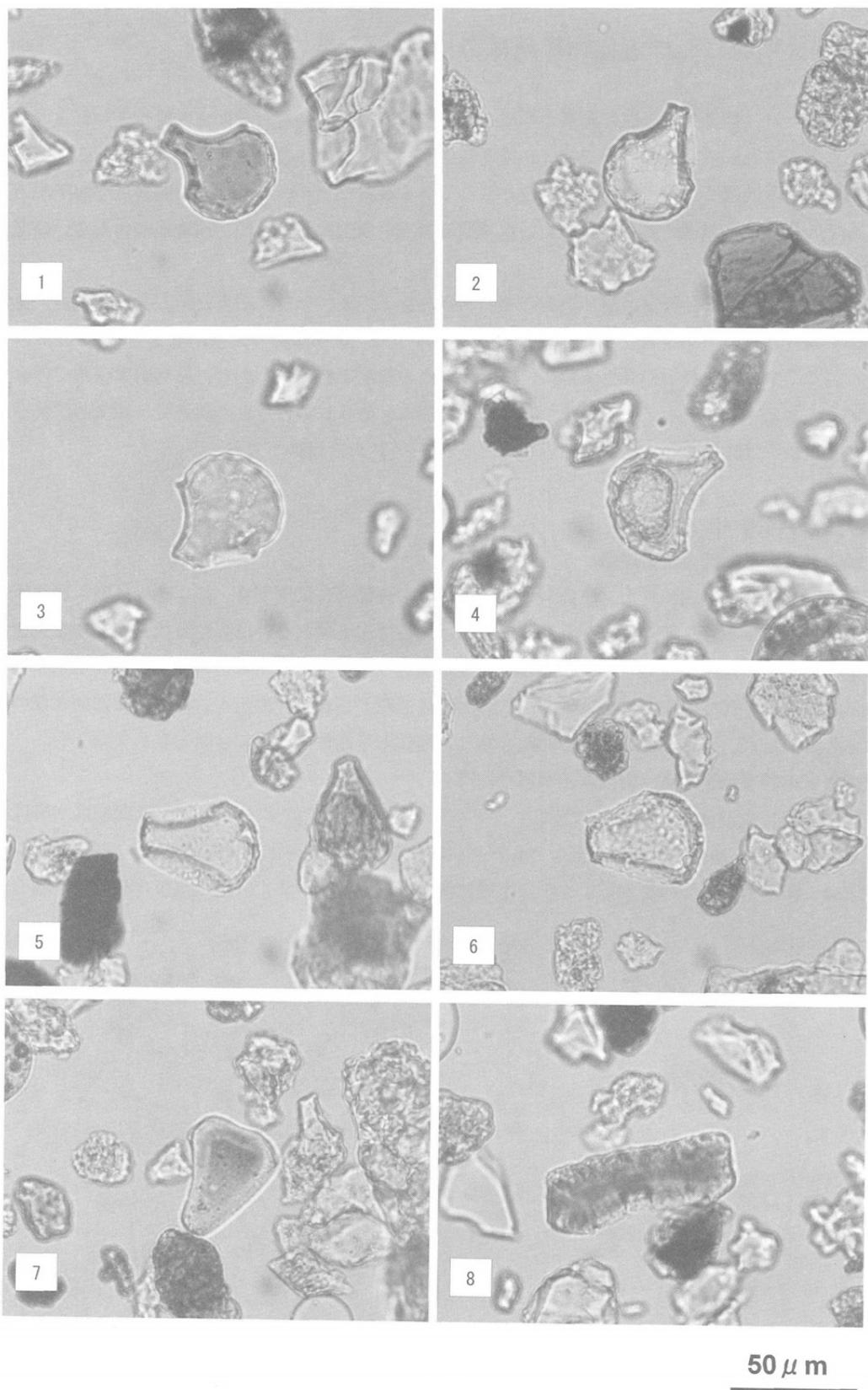


図22 検出されたプラント・オパール

1～4：イネ (*Oryza sativa L.*) 5～6：タケ亜科 (*Bambusoideae*)
7：ウシクサ族 (*Andropogoneae*) 8：キビ族 (*Paniceae*)

2. 津島岡大遺跡における植物珪酸体分析

津島岡大遺跡では、縄文時代後期に集落が形成されて以降、弥生時代から近世まで耕作土が形成されていく過程が継続的に確認されている。その中で特に、縄文時代から弥生時代への生業面の推移を考える上で、同時期の状況は、初期農耕の問題と相まって注目されるところである。本センターでは、この問題点を解明する一つの手がかりとして、耕作土と想定される土層あるいは時期の明らかな土層に対して、植物珪酸体あるいは花粉に関する土壤分析を行っている。

植物珪酸体に対する土壤分析は、第2次調査で試みられ、その後、第17次調査と第22次調査地点、第23次調査地点、第27次調査地点、第28次調査といった発掘調査のほかに、試掘調査や立会調査を含め（図23）、体系的に進めてきた。ここでは、これらの分析試料について各地点の状況を整理した上で、津島岡大遺跡での全体的な特徴をまとめることとする。また、こうした土壤分析とは別に、第5次調査地点の調査では縄文時代後期中葉の土器を試料とした胎土分析において植物珪酸体が報告されている¹⁾点を指摘しておこう。

a. 調査地点の特徴（図23、表3）

①第2次調査地点（農学部合併処理槽）²⁾

1983年度に発掘調査が実施された。津島南キャンパスの中央付近に位置する。縄文時代以降、居住域を構成するような遺構は、特に希薄な地点に当たる。本地点では、突帯文土器あるいは弥生時代前期土器を包含する「黒色土」の上面で人間の足跡が検出され、水田の可能性が想定された。また、弥生時代中期には用水路の可能性が求められる溝が検出されている。土壤分析では、弥生時代前期とされる「黒色土」から、比較的多量の植物珪酸体が検出されているが、サンプリング上の問題もあり、稻作の可能性に関しては断定されていない。

②第17次調査・第22次調査地点（環境理工学部校舎）³⁾

1996・1999年度に発掘調査された。津島北キャンパスの北東部に位置する。南側に微高地部（第17次調査地点）、北側には緩やかな傾斜から谷部を形成され、弥生時代前期の河道が東西方向に走る（22次調査地点）。縄文時代後期では、津島岡大遺跡のなかで中心をなす居住域が形成される。また、両地点では突帯文土器と弥生時代

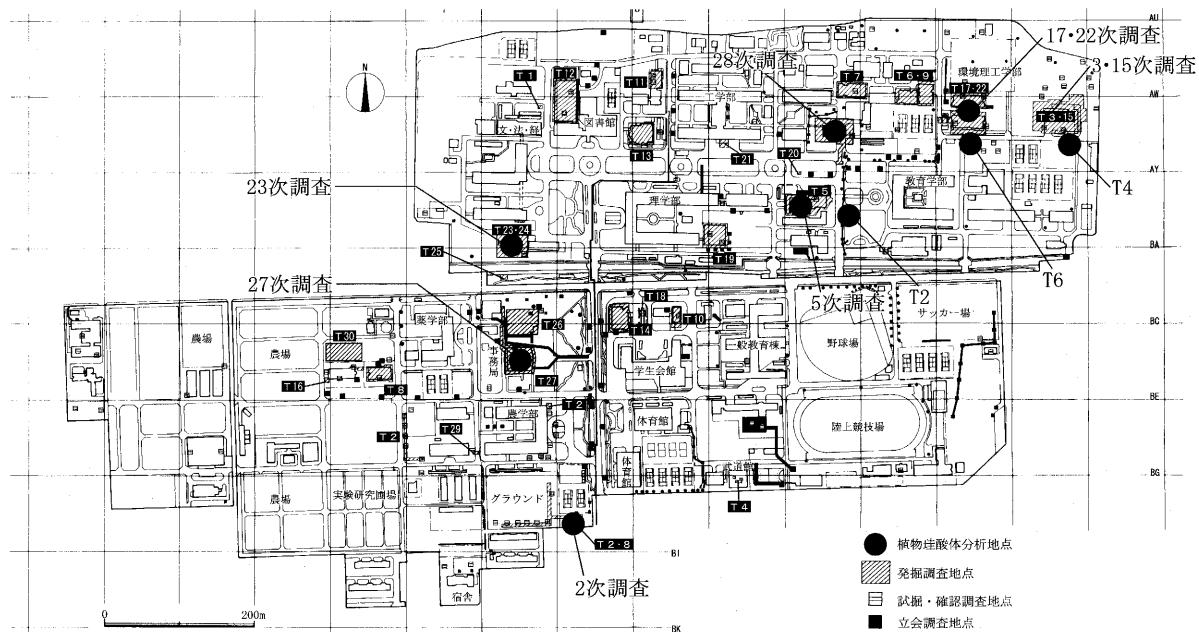


図23 津島岡大遺跡における植物珪酸体分析地点（縮尺 1/10,000）

前期土器を含む「黒色土」上に畦畔が残り、その後、耕作地の継続が確認されている。

サンプリング地点は5カ所である。縄文時代後期～近世の土壤からは、イネの珪酸体の推移が明らかとなった。つまり、縄文時代にはイネが確認されない点、弥生時代早期～前期の「黒色土」では低い数値ではあるが、その存在が認められる点、弥生時代中期～後期あるいは古代～中世の各土層からはイネが多量に検出される点が報告され、弥生時代以降、周辺での稻作の可能性が指摘されている。

また、イネ以外のイネ科栽培植物では、ヒエ属型、ジュズダマ属が検出されるが、ヒエあるいはハトムギの栽培の可能性を残しつつ野草の可能性も否定できないとされる。植生に関しては、縄文時代以前は、開けた日当たりの良い微高地にメダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型などの竹笹類を主体とするイネ科の植生が、そして湿地となる河道周辺ではヨシ属が生育する状態が復元される。一方、弥生時代～古墳時代では、そうしたほとんどの分類属が減少し、イネがそれに変わって増加するとされる。

③第23次調査地点（文化科学系総合研究棟）⁴⁾

1999～2000年度に発掘調査された。津島北キャンパスの南西部に位置する。縄文時代後期～弥生時代前期の河道が調査範囲内の大半を占める。河道内には縄文時代後期の杭列群が、そして弥生時代早期～前期では、井堰・用水路の可能性を有する溝が微高地端部に、河道の緩斜面には弥生時代早期の貯蔵穴が形成される。

イネの珪酸体は、弥生時代前期の河道堆積土層に確認された。その数値は非常に低いが、周辺での稻作の可能性が想定される。また、縄文時代の土層からは全くイネは検出されていない。縄文時代～弥生時代前期の植生は、多量のタケ亜科（ネザサ節、メダケ節など）と、少量のヨシ属が検出されることから、比較的乾燥した環境の周辺に湿地的な部分が分布するという状態が予想されている。

④第27次調査地点（50周年記念館）⁵⁾

2001～2002年度に発掘調査された。津島南キャンパスの中央部付近に位置する。縄文時代後期の炉が散在し、作業空間を形成する。弥生時代早期～前期の「黒色土」上には畦畔がのこり、その後も耕作地として利用される。弥生時代後期～古墳時代前期の溝が構築される。

試料のサンプリング地点は3カ所である。弥生時代の分析数値にややばらつきがあるものの、弥生時代中期～後期以降、イネの珪酸体の数値は増加傾向を示し、それ以前との違いを見せる点は、前述の地点と同様である。その中で、「黒色土」では、イネが上層で700個/g、その下に検出されない間層を挟んで最下層部に再び700個/gが検出されている点が注目され、弥生時代早期～前期における稻作の可能性が積極的に想定されている。つまり、イネの珪酸体が上層から混入しているという理解がこうした状況からは考えにくいからである。また、同調査地点においても縄文時代後期層からイネは確認されていない。

イネ以外の栽培植物ではヒエ属型とキビ属型が検出されているが、いずれも700個/gと低い値であり、栽培の可能性は低いとされる。植生に関しては、縄文時代層では微高地部でネザサ節型が主体でヨシ属・メダケ節型を一部に含むというイネ科植生であり、続く弥生時代早期～前期でも、微高地部でメダケ節型とネザサ節型が大幅に増加し、谷部ではヨシ属が増加する。そして、周辺では稻作が行われた可能性が想定されている。一方、イネの増加が確認される次の段階（弥生時代）からは、こうしたイネ科の野雑草は急速に減少し、イネの珪酸体が増加して優勢へと転じている点から、弥生時代以降、集約的稻作が進行すると推定される。

⑤第28次調査地点（総合研究棟）⁶⁾

2002年度に発掘調査を行った。津島北キャンパスの中央付近に位置する。縄文時代の遺構は非常に希薄である。弥生時代早期～前期の「黒色土」上面に畦畔が一部のこる。その後、弥生時代中期の溝が形成され、耕作地として継続的に利用されている地点である。

イネは前述した地点と同様に、弥生時代早期～前期の「黒色土」では非常に低い数値を示すが、弥生時代前期～中期・古代・中世へと、その数値を上昇させており、稻作の広がりが指摘される。

表3 調査地点別植物珪酸体密度（個/g）

土層の時期	17・22次調査	23次調査	27次調査	28次調査	試掘調査			
					T2	T2	T4	T6
近代	—	—	—	—	—	—	—	6,800~8,200
近世	—	—	—	—	—	3,000~4,500	—	6,800~8,200 3,000~3,800
中世	—	—	5,000 3,000	10,100	—	—	—	—
中世 or 古代	2,700~4,200	—	—	—	—	—	—	3,000~3,800
古代	6,500~8,500	—	—	5,200	—	3,000~4,500	—	—
古墳時代	700~1,800 2,900	—	3,000	—	—	3,000~4,500	4,500 ~ 8,200	—
弥生時代 (中期 or 後期)	5,600	—	—	—	—	—	—	—
弥生時代中期	4,300	—	2,100、3,300、 1,400~2,100	2,100、 3,300	3,700	3,000~4,500	—	—
弥生時代前期	1,400~2,300	—	700、700~2,100 0 700	700	—	2,200~2,300	1,500	1,500~2,000
縄文時代(後期)	0	0	0	0	0	0	0	0
文献	註3) b	註4) b	註5) b	註6) b	—	—	—	—

⑥試掘調査地点⁷⁾

2000年度に、縄文時代の景観復元を目指して、津島北キャンパスで試掘調査を行い、その中の3カ所で試料のサンプリングを実施した。第5次調査地点の東側（T2地点）では、微高地部と谷部の断面から、近世・古代・古墳時代前期～弥生時代後期・弥生時代の各土層でイネについて高い数値が得られた。一方、弥生時代の下層あるいは弥生時代前期以前の土層ではやや低い値を示すが、他の地点の「黒色土」に見られる数値よりは高い。第3次・15次調査地点の南側（T4地点）では、イネの珪酸体は弥生～古墳時代前期で高い数値が得られる一方、弥生時代早期～前期（「黒色土」）でも、やや低い数値はあるが一定量が含まれる。第3・15次調査地点は縄文時代の貯蔵穴・ピット群などの遺構密度の高い地点であり、弥生時代前期の畦畔をはじめ、各時代の畦畔や弥生時代後期の溝が検出されている。前述した第17次・22次調査点の南側（T6地点）では、同調査地点から水田畦畔がのこる微高地が続く。イネの珪酸体は明治・近世・中世あるいは古代において高い数値が、そして弥生時代早期～前期の土層では低い数値となる。また、縄文時代後期～弥生時代ではタケ亜科（メダケ節・ネザサ節）が優勢で、ヨシ属・ススキ属型が含まれるという植生も明らかとなった。

⑦立会調査地点（教育学部）⁸⁾

2006年度に、津島キャンパス北東部において「黒色土」の土壤分析を行った。成果は、本紀要の前項に報告されているので、ここでは省略するが、その特徴は、上述の調査地点の成果と矛盾しない。

b. 各地点の成果の特徴

各地点の分析成果を比較すると、いずれも共通した傾向を示すことは明らかである。以下にまとめよう。

<イネの珪酸体の特徴>

- ・縄文時代の土壤では検出されていない。
- ・弥生時代早期～前期の「黒色土」層からは、低い数値ではあるが、一定量の植物珪酸体が検出される。同土層を上下の位置関係で分層した場合、間層を挟んで最下層からも上層と同様の数値を示す場合がある。
- ・弥生時代前期では、下層よりは数値が高いが、上層と比較するとやや低い数値となる傾向がある。
- ・弥生時代以降は、全体的に高い数値が安定的に確認される。それは中期以降の可能性が高い

<栽培種の有無と植生>

第17・22次調査では弥生前期層・弥生後期層・古代層からヒエ属型、縄文後期層からジュズダマ属型、また、

第27次調査では「黒色土」からヒエ属型、中世層からキビ属型がそれぞれ検出されている。これらの珪酸体の数値は第17・22次調査検出のヒエ属では1000個/g未満、それ以外ではいずれも700個/gと低い値を示す。一部では栽培の可能性を残しつつ、いずれの調査地点でも野草の可能性も否定できないとされる。

植生に関しては、縄文時代以前では、開けた日当たりの良い微高地にメダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型などの竹筐類を主体としたイネ科の植生が、そして湿地となる河道周辺ではヨシ属が生育する状態が復元されるのに対して、弥生時代そして古墳時代にかけては、そうしたほとんどの分類属が減少し、イネがそれに変わって出現・増加しているとされる。

c.まとめ

津島岡大遺跡で行った分析地点は、遺跡範囲のなかでほぼ全域をカバーする。調査地点ごとの内容も、縄文時代後期には、居住域から生活痕跡の希薄な空間までを含み、弥生時代以降は耕作地という共通した内容であることを考えると、これらの分析成果は本遺跡全体の特徴として評価することができよう。

前述した植物珪酸体の実態から農耕の問題を考えると、イネの栽培地（水田）の出現は、本遺跡周辺では弥生時代早期～前期まで遡る可能性は高く、縄文時代では不明であることがいえよう。ただし、その生産性についてはかなり低いことが予想される。そして稻作導入後は、珪酸体の数値が依然としてやや低い弥生時代前期を経て、弥生中期・後期から古墳・古代・中世・近世へと数値があがる傾向が強く示されており、弥生時代中期以降に集約的な稻作へと転じていくことを予想させる。その変化は農法変化にも及んだ可能性があろう。植生が縄文時代～弥生時代前期にはタケアキ科が優勢な状態であったものが、その後急速に衰退してイネに変わっていくことも、こうした変化の傍証となるのではなかろうか。遺構との関係をみても、畠畔が検出されるのが弥生時代前期以降、そして、灌漑用水路の整備が、弥生時代中期以降に本格化していく状態と矛盾しない。

ここでは、植物珪酸体分析のみから稻作の問題を考えた。今後、花粉分析・植物種子など多様な植物遺存体のデータを総合した分析を進めることで、初期農耕の実態解明の一助としたい。
(山本悦世)

註

- 1) a. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1994『津島遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
b. 藤原宏志1994『津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オパール胎土分析』『津島遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.236-239
- 2) a. 岡山大学埋蔵文化財調査室1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査II（農学部構内BH13区）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊
b. 佐々木章1986『BH13区IX・X層土壤のプラント・オパール分析』『岡山大学津島地区遺跡群の調査II（農学部構内BH13区）』岡山大学埋蔵文化財調査室 pp.72-73
- 3) a. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2005『津島遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
b. (株)古環境研究所2005『津島岡大遺跡第17次・22次調査における自然科学的分析』『津島遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.236-242
- 4) a. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2006『津島遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊
b. (株)古環境研究所2006『津島岡大遺跡第23次発掘調査における自然科学的分析』 b. 植物珪酸体』『津島遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.93-95 *本調査における植物珪酸体分析は、平成12年度～13年度科学研究費補助金 基盤研(C)(2)「縄文時代の景観と生業に関する実証的研究」課題番号12610414（研究代表者 山本悦世）によるものである。
- 5) a. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2003『津島遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊
b. (株)古環境研究所2003『第5章自然科学的分析(3)植物珪酸体分析』『津島遺跡13』 pp.70-75
- 6) a. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2008『津島遺跡18』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊
b. (株)古環境研究所2008『植物珪酸体分析』『津島遺跡18』 pp.41-46 *本調査における植物珪酸体分析は、平成14年度～15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」課題番号14510427（研究代表者 山本悦世）によるものである。
- 7) 山本悦世2001『津島岡大遺跡における縄文～弥生時代の景観復元に伴う試掘・確認調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.26-32 *本調査は、平成12年度～13年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)「縄文時代の景観と生業に関する実証的研究」課題番号12610414（研究代表者 山本悦世）によるものである。
- 8) 宇田津徹朗 2008『津島岡大遺跡土壤のプラント・オパール』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.13-19

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第17次調査

(総合研究棟(医学系)新営:鹿田BR~BY60~64区)

a. 調査の成果

鹿田遺跡第6次調査と第7次調査に挟まれる位置にある本調査地点では、近代・近世・中世・古代・古墳時代初頭・弥生時代の各時代に及ぶ遺構・遺物が発見され、新たな知見も得られることとなった。

まず近世・近代については、耕作域として利用されていたことが確認された。近世段階において、土坑が連なるように構築される状況が明らかとなった。

鎌倉時代～室町時代初頭については、溝によって区画された屋敷地の構造とその変遷が、詳細に浮かび上がってきた。13世紀中頃～14世紀前半段階の方形区画となる屋敷地は、輸入陶磁器の多さや、大形溝の構造から考えると、鹿田遺跡における当時の中心的な屋敷地の一つである可能性が考えられる。また今回の調査によって、屋敷地内の空間利用のあり方を具体的に考える情報が得られた。

古代の遺構と遺物が確認されたことも、本調査地点の大きな特徴といえる。碁盤目状の柱穴が並ぶ遺構が検出されたが、その機能については、今後詳細に検討していきたい。

古墳時代初頭については、住居址と焼土遺構が検出された。周辺地点の成果とあわせると、当該期の本調査地点は、集落域に位置する。集落における居住単位や生業活動を考察する際の良好な資料が得られたといえる。

弥生時代については、集落の周辺域であったものと考えられる。

調査期間：2006（平成18）年7月10日～11月14日

調査面積：642m²

調査担当：光本 順（主任）・山本悦世・中村大介

主な遺構・遺物：〈近代〉土坑1基・溝2条・畦畔、〈近世〉土坑16基・溝1条、〈中世〉井戸3基・溝17条・掘立柱建物1棟・柱穴・畦畔、〈古代〉溝1条・溝状遺構1基、〈古墳時代〉竪穴住居2棟・焼土集中7ヶ所・粘土集中1ヶ所・土器集中1ヶ所・溝2条・柱穴、〈弥生時代〉溝1条

b. 調査の経過

岡山大学鹿田地区において、基礎研究棟の西に隣接して、総合研究棟（医学系）を建設する計画が2005（平成17）年度に具体化した。この総合研究棟新営に先立ち、2006（平成18）年度に発掘調査を実施することとなった。

まず、2006年6月21日～7月7日まで、重機による表土掘削を行った。表土掘削は、大正時代以降の建物基礎を除去しながら進めた。表土掘削終了後、発掘調査を7月10日より開始した。調査では、近代・近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代の遺構・遺物を確認し、11月14日に終了した。10月22日（日）には、現地説明会を開催し、中世を中心とする調査成果を公開した。現地説明会には91名の参加者を得た。

なお、調査区の区割りについては、建物基礎による攪乱の入り方を考慮しつつ便宜的に4つに区分しており、北東の区を1区、南東を2区、北西を3区、南西を4区と呼称している。

c. 調査の概要

①位置 (図24)

本調査地点は、鹿田キャンパス内の西側に位置する。調査開始直前には、駐車場として利用されていた。1998年に基礎研究棟の建設を契機に発掘調査を行った第7次調査地点の西隣にあたる。また本調査地点の南東には、1990~91年に発掘調査を行った第6次調査地点（アイソトープ総合センター新営）が位置する。鹿田地区に設定した構内座標では、BR~BY60~64区に位置する。

②層序 (図25)

1層：造成土。岡山医学専門学校が、1921（大正10）年に現在のキャンパスに移築された際のものである。上面の標高は1.9mである。

2層：暗灰色粘質土で、近代の耕作土である。層厚が20cmを測り、厚く堆積する。上面の標高は1.5~1.6m。

3層：青灰色粘質土で、近代の耕作土である。調査区北半では、二層に細分される部分があり、耕作面がつくりかえられたものと考えられる。上面標高については、東西大溝であるSD1より北半が1.3m、南半が1.4mとなる。層の下面レベルも同様に、北半が南半よりも10cm低くなることから、SD1をはさんで北半と南半とで耕作面のレベルが異なっていたものと考えられる。本調査地点では、明確な近世層が広く堆積する状況が認められなかつたが、それは3層段階の耕作域の形成時に近世層が失われたためと考えられる。

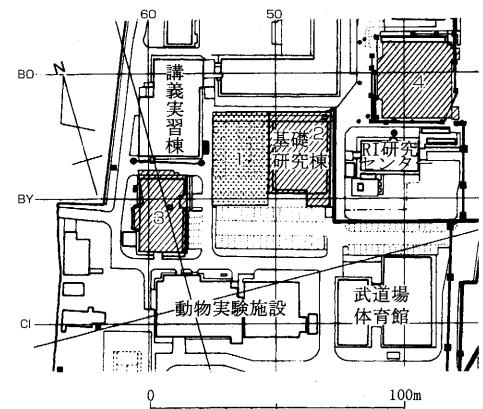
4層：淡緑褐色～淡緑灰の粘質土で、北壁では三層に分層される。畦畔との関係から耕作土と考えられる。本層上面において、中世溝が検出されているため、本層の時期については中世と考えられる。上面標高については、中世の東西大溝であるSD7より北半が1.2m、南半が1.3mとなる。近代の耕作土同様、層の下面レベルも北半が南半よりも10cm低くなることから、北半の方が南半よりも耕作面が低くなっていたものと考えられる。

5層：灰褐色粘質土である。調査区南半に広がる層で、北半においては4層の段階に削平されたものと考えられる。本層上面まで、中世溝

の土層ラインがあがっているため、本層は中世層の可能性が高い。上面標高は、1.1~1.2mである。

6層：暗褐色砂質土で、包含遺物及び上面検出遺構から、古墳時代初頭の土層と考えられる。上面標高は、0.8~1.1mである。

7層：黄灰色砂質土で、基盤層である。上面標高は0.8~1.0mである。上面において、古墳時代初頭の焼土集中や弥生時代と考えられるピットなどが検出さ



1.本調査地点(第17次調査・総合研究棟(医学系))
2.第7次調査地点(基礎研究棟)
3.第6次調査地点(アイソトープ総合センター)
4.第13次調査地点(総合教育研究棟)

図24 調査地点の位置 (縮尺 1/3,000)

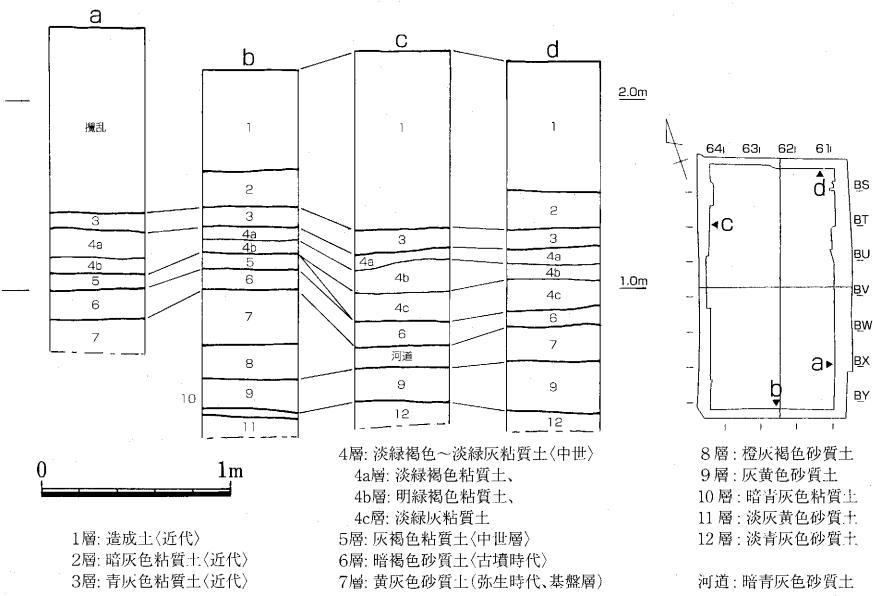


図25 土層柱状図 (縮尺 1/40)

れた。

8層：橙灰褐色砂質土で、無遺物層である。調査区南壁において確認される層である。上面標高は0.7m。

9層：灰黄色砂質土で、無遺物層である。上面標高は0.5~0.6mとなる。

10層：暗青灰色粘質土で、無遺物層である。層厚3~5cmほどの薄い層で、有機質に由来する層とみられる。

11層：淡灰黄色砂質土で、無遺物層である。上面標高は0.3mである。

12層：淡青灰色砂質土で、無遺物層である。上面標高は0.3~0.4mである。

弥生時代後期以前の旧地形については、調査区中央の東西断面（SD 7 の壁面）及び調査区四周の壁面において、東から西に向かって落ちる河道の存在を確認した。河道の肩については、東側のみをみることができる。この河道の内側に、弥生時代後期の土器が出土した河道が位置する。

③遺構と遺物（図26）

〈近代〉

土坑1基、溝2条、畦畔を検出した。医学校による造成の直前の時期まで、耕作地がひろがっていたことが確認された。

SD 1は、調査区中央に東西方向へのびる。この溝は、もとは中世にまでさかのぼる溝が、近代に改修されたものであり、主要な溝のひとつと考えられる。SD 1の両縁には、幅広の畦畔がつくられる。この畦畔には、2ヶ所の水口が設けられている。SD 1より北半には、調査区中央に比較的大形の畦畔が1条、南北方向にのびる。この畦畔の脇には、小形の溝と野壺と考えられる土坑（SK 1）が1基つくられており、耕作地の景観を作成している。SK 1内には、大形の樽が設置されていた。調査区南半には、小形の畦畔が南北に2条のびる。

〈近世〉

土坑16基、溝1条を検出した。検出面は、中世層と考えられる4層である。この段階の包含層は、近代における耕作によって失われている。

溝（SD 3）は、近代のSD 1の前段階と考えられる東西大溝である。北側の肩は確認されたが、南側の肩については、SD 1によって切られている。したがって、溝全体がSD 1よりも北側に位置していたものと考えられる。

土坑は、SD 3の南側を中心に築かれる。SD 3南側には、14基の土坑が切り合い関係を有しながら東西に群をなす。その中には、近代の畦畔の下層に築かれたものがある。一方、東西大溝より北半にも2基の土坑（SK 2・3）がみられる。SK 2は近代の南北畦畔部分の西側、SK 3は東西大溝の北辺に築かれる。こうした土坑には、曲物が設置されたものがあるほか、形状にバリエーションが認められる。機能としては、水溜めや野壺、あるいは墓などが想定されるが、形態的特徴を含め、今後検討する必要がある。

土坑や溝の存在、およびそれらの位置関係から、近世段階にも本調査地点は耕作域として利用されたものと考えられる。この段階の畦畔も存在していたことが推定されるが、包含層同様に近代の耕作や東西大溝の改修等によって削平されたものと考えられる。

〈中世〉

井戸3基、溝17条、掘立柱建物1棟、柱穴、畦畔を確認した。出土遺物から、いずれも鎌倉時代～室町時代初頭のものと考えられる。東西大溝は、14世紀前半にもっとも大形化する。青磁・白磁などの輸入陶磁器が、他の地点よりも比較的多く出土していることも、本調査地点の特徴といえる。当該期に屋敷地が形成されていたことは、以下で略述する遺構の種類や配置から明らかであるが、層位的関係からみると、中世のある段階（4層段階）で耕作域が形成されたものと考えられる。調査区北壁では、近代の南北畦畔の下に畦畔が作られている状況

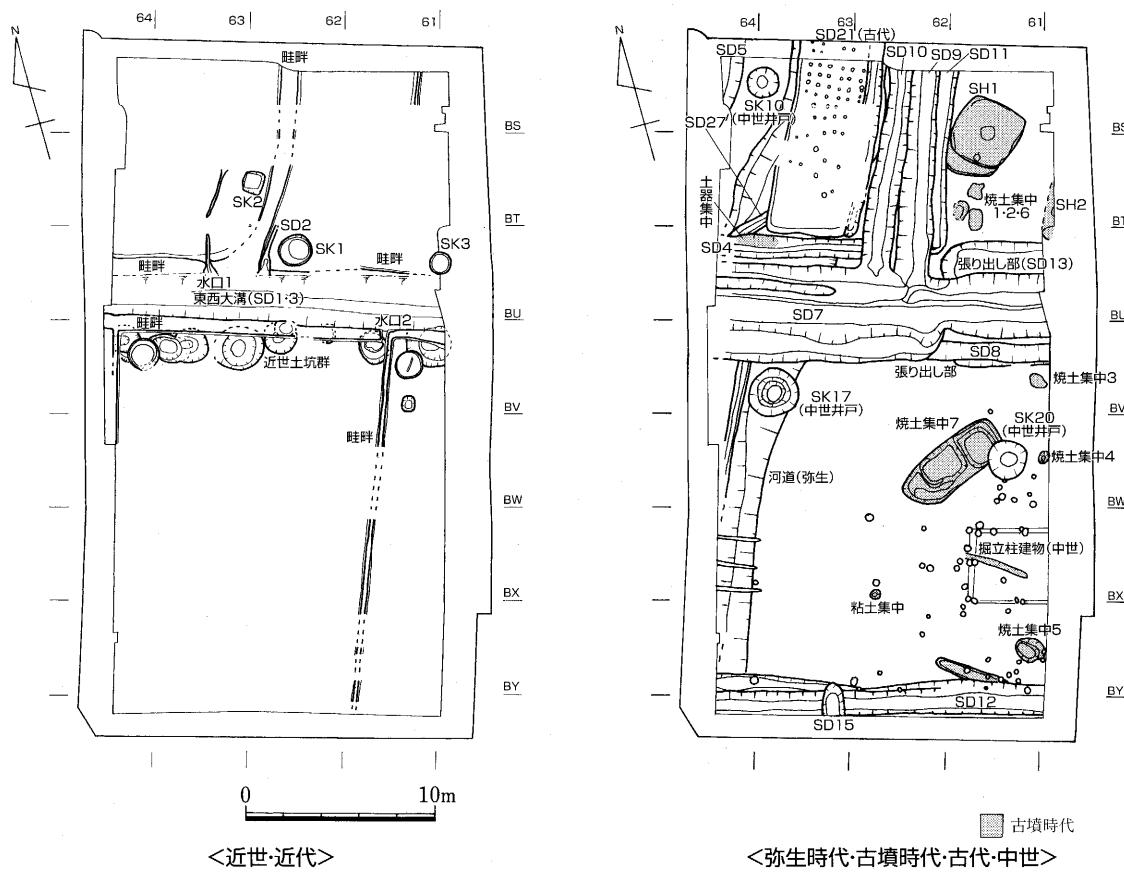


図26 検出遺構全体図（縮尺 1/400）

が確認されたが、中世土器を含むSD 4は、その耕作土の上面において検出されている。

調査区南半からは、2基の井戸（SK17・SK20）が検出された。SK17は14世紀前半、SK20は13世紀末の時期が考えられる。SK17の底面近くからは、備前焼の甕片の上に、小形の土師質土器椀がのせられた状態で出土した。この井戸から出土した備前焼が、東西大溝（SD 7）出土の破片と接合したため、SK17とSD 7の廃絶時期が重なることが推測される。SK20からは、10個体前後の土師質土器椀・小皿がまとまって出土した。

屋敷地の区画の変遷 出土遺物から、溝の時期には、大きく分けて以下の2つの段階があるものと考えられる。

第一段階（12世紀後半～13世紀初頭）南北方向のSD 5と東西方向のSD12による区画

第二段階（13世紀前半～14世紀前半）南北方向のSD 9～11と東西方向のSD 7・8・13による区画

第一段階には、調査区南辺と西辺にのびる溝によって区画が形成される。SD12は、6次・7次調査でも検出されている。

つぎの第二段階には、東西の大形溝と、それに取り付く南北溝によって、「T」字形の溝がつくられた段階である。層位的関係からみると、SD10・11→SD 9の順序となり、SD 9がSD 7に直接取り付く溝となる。東西大形溝は、6次・7次調査で検出された溝と一体となって、遅くとも13世紀の中頃以降には、方形の屋敷地の区画を形成している。区画は一辺が約70mとなる。本調査地点は、この方形区画内の中央北辺に位置するものといえる。方形の屋敷地に伴う遺構としては、井戸（SK17・SK20）と掘立柱建物・柱穴群がある。建物・柱穴群は、本調査区では南辺で検出されたSD15を境に東側に偏って分布し、7次調査地点の柱穴群と一連のものになるものと考えられる。SK20とSD 7・8との間には、柱穴はみられないが、この状況も7次調査地点と同様である。また、柱穴が分布しない本調査区西側の範囲は、6次調査地点の柱穴群との間に空白地を生み出している。

柱穴が分布しない、あるいはその密度の薄い範囲は、屋敷地内での何らかの作業スペースや通路等として機能していたことが想定される。

東西大溝のつくりと機能 第二段階を特徴付ける遺構として東西の大形溝（7・8）がある。全体形がわかるSD7の規模は、幅約5m、深さ約1.4mを測る。SD7については、その形状が通常の溝とは異なる点が注目される。第一に、溝の中位に平坦なテラス面が設けられている点が挙げられる。テラス面は、溝の南面にとくに顕著である。北側のテラス面については、南側ほど顕著なものではない。第二に、SD7の東半部分において確認された、溝の外側へ張り出す部分（以下、張り出し部）の存在である。溝の北側への張り出し部は、SD13として認識したもので、これは第7次調査の西壁付近で検出された遺構と一体となる。溝の南側への張り出し部は、SD9・11の南方につくられる。

こうしたテラス面と張り出し部を有する溝の形状は、岡山市百間川米田遺跡でみつかっている、溝幅7.8m・深さ1.3mとなる大形溝（10世紀中頃～15・16世紀）などでもみられる。この百間川米田遺跡の大形溝の機能については、舟の運行を想定した運河的機能が報告書の中で考察されている¹⁾。本調査地点で明らかとなった大形溝は、百間川米田遺跡のそれと比べれば規模こそ小さいが、形状の類似性から、屋敷地の区画としての機能や水路としてのたらきとともに、舟の運行にも利用された可能性が考えられる。

〈古代〉

古代の遺構は、調査区北西部（3区）のみで確認され、4層の下面において検出された。遺構埋土より、古代の須恵器や丹塗り土師器が多く出土したことと、土質（白色がかった粘土質）から、当該期の遺構の存在が判明した。本調査地点において、古代の包含層は確認されていない。周辺に位置する第6次・第7次調査地点では、当該期の遺構も包含層も確認されていない。

検出された遺構としては、通常の水路状の形をなす溝（SD19）と、機能は判然としないが、幅広で浅い溝状遺構（SD21）内に柱穴が規則的に配置された遺構がある。両者とも、南の4区へのはのびない一方、北壁の矢板際まで連続しているため、調査区外へと続くものである。

SD21は、南端が直線的な辺をなす。SD21内の柱穴は、径20cm前後を測り、約50cm間隔で碁盤目状に並ぶ。東西に6列、南北については現状で10列以上となる。

〈古墳時代〉

6層上面及び基盤層である7層上面において、古墳時代初頭の遺構を検出した。竪穴住居2棟、焼土集中7ヶ所、粘土集中1ヶ所、土器集中1ヶ所、溝2条、柱穴がある。調査区西半に南北にのびる河道の上層からは、古墳時代初頭の土師器が出土しており、また上層に土器集中もみられることから、当該期にも窪地をなしていたものと考えられる。

竪穴住居のうちSH2は、第7次調査地点で検出された住居の一部であり、また当該期の遺構全体が、調査区東半に偏っており、第7次調査地点で検出された集落と一連のものと考えられる。

竪穴住居1は、近代の基礎工事によって多くが失われており、床面付近のみが残存していたものである。一度建て替えがなされたことが平面形・断面の観察によって明らかとなった。

焼土遺構は、竪穴住居1の南側に3ヶ所（焼土集中1・2・6）と、中世の東西大溝より南側において4ヶ所（焼土集中3～5、7）が確認された。竪穴住居1南側には、掘り込みを伴わない焼土集中（1・2）と、掘り込みがみられるもの(6)がみられる。焼土集中2からは、ミニチュア土器が複数個体出土している。

焼土集中3は、地床炉と考えられる被熱痕跡である。焼土集中4は、土坑の形状を呈する。焼土集中7は、焼土が多量に出土した浅い溝状遺構である。焼土は溝内の2ヶ所に集中しており、それに対応するよう方形の浅い掘り窪みが両者に伴う。さらに溝内の縁には、浅い溝が作られている。こうした方形の窪みや溝内をめぐる浅い溝は、火を伴う何らかの作業にかかるものと考えられる。焼土集中5からは、炭がまとまって出土してい

る。

溝は、2区において2条が検出されている。いずれも小形のもので、グリッドに対して斜めにのびることに特徴がある。溝は焼土集中や粘土集中の南側に位置しており、それら遺構と関連する可能性がある。

〈弥生時代〉

溝1条を検出した。検出面は7層である。また調査区西半部には、河道がやや湾曲しながら南北方向にのびている。河道の底面は、断面V形を呈する溝状に窪んでおり、底面付近から弥生時代後期の土器が出土している。3区では河道底面において、北東から南西方向にのびる小形の溝(SD27)がつくられている。このように遺構が希薄な状況から、当該期は集落の周辺域の様相を呈するものと考えられる。

以上の内容についてはいずれも現段階の暫定的な報告であり、正式報告は今後の詳細な整理・分析の後とする。

(光本 順)

註

- 1) 平井 勝 1989「大溝」『百間川米田遺跡(旧当麻遺跡)3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 pp.341-342

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

鹿田地区において今年度実施した立会調査は5件である(図27、表4)。前節で述べた総合研究棟(医学系)新営に伴う発掘調査に関わるもののが2件、同新営工事に伴うものが1件、エネルギーセンター棟新営に関わるもののが2件の内訳である。このうち4件が造成土内、あるいは既設工事内におさまるものであった。調査6のエネルギーセンター棟新営工事に伴う立会調査では、鹿田遺跡第12次調査の調査範囲にその多くが重複する部分での掘削となった。基盤層まで掘削は及んだが、遺構・遺物の確認はされず、堆積状況も第12次調査地点と同様であることを確認した。

(岩崎)

表4 2006年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(GL-m)	内 容
1	発掘	BR~BY・60 ~64	医	総合研究棟(医学系)新営に伴う発掘調査	7.10~11.14	2.0	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井戸・溝・建物、近世土坑・溝
2	立会	CQ~CU・54 ~65	医	総合研究棟(医学系)新営に伴う発掘調査に関する排水管移設	6.8	1.2	多くは既設工事内、一部樹部分で近世層まで
3	立会	CG 74・CG 77・CQ77	医	総合研究棟(医学系)新営に伴う発掘調査に関する電柱掘削	6.8	1.05~1.1	造成土内
4	立会	CC64・CD69	医	総合研究棟(医学系)新営に伴う電柱新設	12.18	1.1	2箇所、造成土内
5	立会	CR35・36、 CS35・36	医病	エネルギーセンター棟新営に伴う機械設備	12.26	0.9	造成土内
6	立会	CT~CU45	医病	エネルギーセンター棟新営に伴う	07.1.23	2.5	鹿田12次調査地点に一部重複、基盤層まで

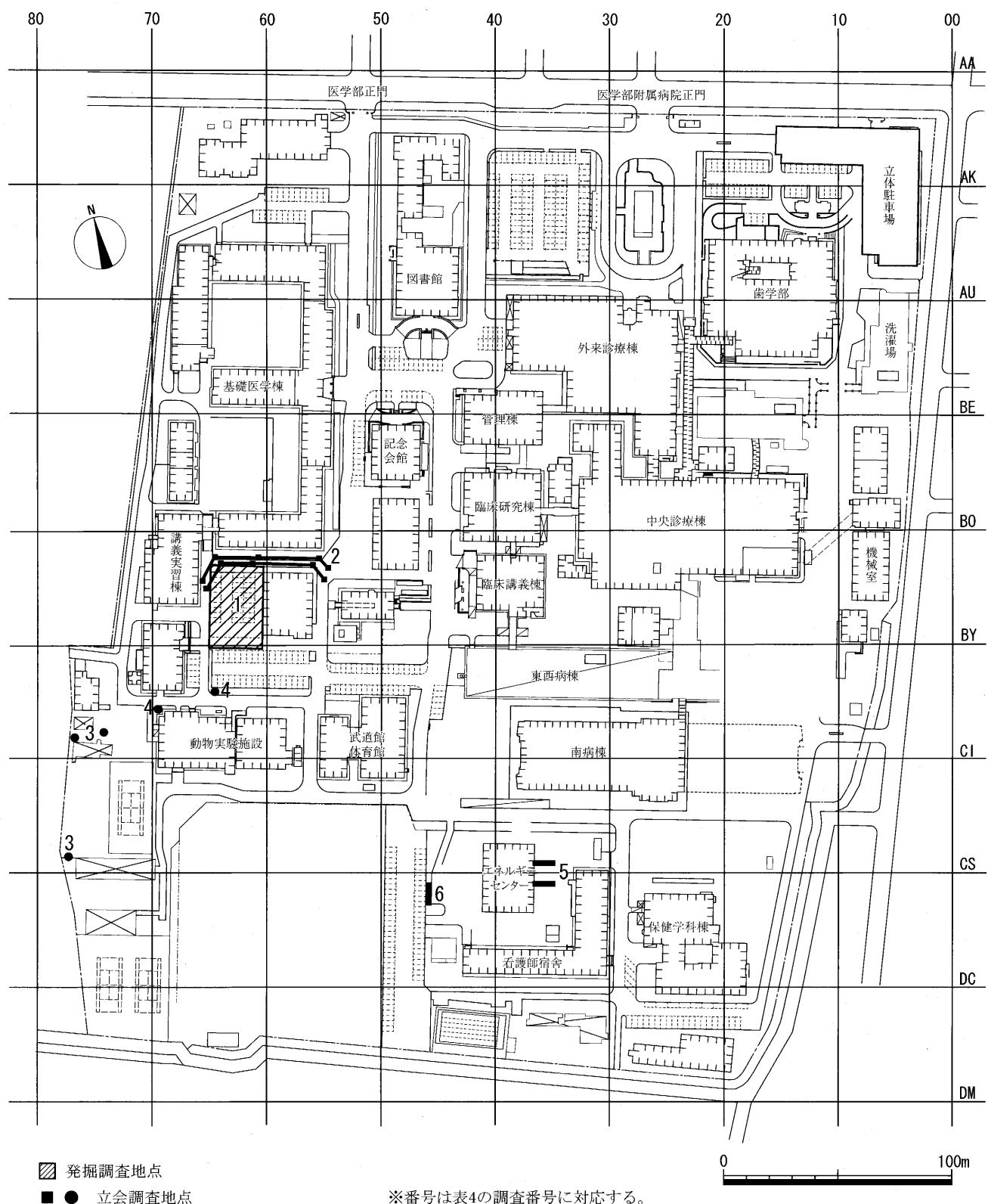


図27 2006年度の調査地点【2】—鹿田地区— (縮尺 1/2,500)

第3章 その他の地区の調査

第1節 試掘・確認調査の概要

1. 教育学部附属小学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査

a. 調査の経緯

岡山大学教育学部附属小学校は岡山市南部の旭川東岸、操山山塊の西に位置する東山地区に所在する。東山地区では、1983年の附属中学校新営に伴う立会調査を実施して以降、これまで小規模な工事による立会調査を数件実施したのみであり、遺跡は発見されていなかった。

2006年度に、附属小学校校舎の建て替えが計画されたため、試掘・確認調査を実施し、遺跡の有無を確認することとした。

試掘・確認調査は2007年3月26、27、29日に実施し、調査員1名が担当した。

b. 調査の成果

①位置（図28）

東山地区は、敷地の東に操山山塊が間近に迫り、西約1kmには旭川が南流する位置にある。東～南東に位置する操山山塊上には、操山109号墳や網浜茶臼山古墳など古墳時代前期の前方後円墳や、古墳時代後期の操山古墳群が点在しているが、操山山塊西側にあたる旭川東岸平野部のうち、東山地区周辺の地域では、これまでのところ遺跡の存在は知られていない。

試掘坑は校舎建て替え予定地の四隅にあたる位置で4カ所設定した。この地点は、東山地区のなかでは北西の区画にあたり、現在の附属小学校建物の南に位置する。試掘坑の規模は上端で3×3mとし、いずれもGL-3m前後まで掘り下げた。これらの試掘坑は掘削順に番号を付し、No.1（南東）、No.2（南西）、No.3（北東）、No.4（北西）とした。

②層序と地形（図29・30）

層序 設定した4カ所の試掘坑の層序は、I層：造成土、II層：近代の粘質土層、III層：近代以前のものとみられる茶褐色粘質土主体の耕作土、IV層：灰色粘土主体の水田層、V層：湿地状堆積物とみられる粘性の非常に強い粘土層に大別できる。これらの大別層は、色調や土質の差、鉄分やマンガンの沈着などにより細分が可能であった。

4カ所の試掘坑のうち、No.1～3の3カ所では、基本的な堆積は細分層についてもほぼ同一であった。北西に設定した試掘坑No.4については、I～V層に大別可能な点では一致しているが、対応する大別層の堆積が他の試掘坑の土層に比して厚い部分もあり、これらの大別層を細分した土層については、No.4の細分層が他の試掘坑のどの細分層に対応するかを特定することは難しい。そこでNo.4の細分層については、層名の表記を違え、土層註記も区別して報告する。

以下、大別層の特徴を記し、細分層の特徴については、図29・30の土層註記に記しておく。

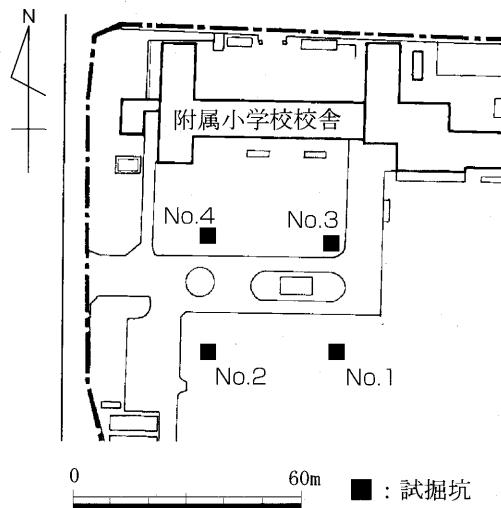


図28 試掘坑の位置（縮尺1/2,000）

I層：岡山県師範学校が当地に移転してきた1910（明治43）年以降の造成土と考えられる。上部を攪乱で破壊されていたNo.3をのぞくと、No.1・2では現地表面から約0.8m下位まで堆積しているが、No.4では厚さ0.3mで、造成土の厚みは薄い。現地表の標高は約2.8～2.9mである。

II層：岡山県師範学校移転以前の近代の土層と考えられる。グライ化により、暗青灰～明緑灰色を呈する粘質土層である。すべての試掘坑で2層の細分層に分層可能であった。

1895（明治28）年測図の地形図では、現在の東山地区の範囲は水田となっており、この層も当該期の水田層と考えられる。上面の標高は、No.1～3では約2.0～2.1m、No.4では2.6mである。

III層：茶褐色粘質土主体の層である。斑状のマンガンの集積が認められるものの、鉄分の沈着はあまり発達していないという特徴がある。層厚はNo.1～3では約0.7m前後、No.4では約1.1mであり、No.1～3では5層に、No.4では11層に細分可能であった。上面の標高はNo.1～3では約1.8～1.9m、No.4では2.35mである。

IV層：灰色粘土主体の層である。鉄分の沈着が顕著で、斑状のマンガンの集積層も形成されており、水田層と考えられる。層厚は下位のV層上面の地形の状態を反映しており、約0.5～0.75mの幅を有する。No.1～3では4層に、No.4では7層に細分可能であった。上面の標高はNo.1～3では約1.1m前後、No.4では約1.2mである。

V層：湿地状堆積物とみられる粘性の非常に強い粘土層である。この層では、鉄分の沈着がみられるものの、マンガンの集積層は形成されていないという特徴がある。掘削の到達深度にはばらつきがあるため、層厚は明らかにはしえないが、No.1～3では2ないし3層に、No.4では4層に細分可能であった。上面の標高は南西のNo.2が最も低く、約0.2m、南東のNo.1では約0.3mで、北側のNo.3・4が約0.4m前後であった。

地形 III層以下の各大別層上面での地形を下層からみてみると、V層上面では、南半（No.1・2）が低くなつておらず、No.1・2を通る窪地状の地形があつた可能性がある。IV層上面では、No.1～3では標高約1.1m前後、No.4では約1.2mであり、各地点の比高は小さくなっている。この段階ではほぼ平らな土地が形成されていたことがうかがえる。なお、先述の通り、No.1～3では、細分層も含めて、同様の堆積状況を示しているが、IV層では標高約0.8m付近に堆積するIV-c層（灰茶褐色砂質土）、IV-d層（明灰色粘土）が異なる堆積状況にある。IV-c層はNo.1に、IV-d層はNo.2・3にみられている。No.1試掘坑内の壁面では、IV-c層の立ち上がりは確認されなかつたため、溝状の遺構の埋土である可能性は低く、No.1の周辺は砂質土が堆積するたわみ状の地形が広がっていた可能性がある。III層上面では、試掘坑No.1～3は標高約1.8～1.9mと近似しているが、北西のNo.4では標高2.35mと、0.5m前後の比高を有しており、北西の地表の高さが際立つ。後述するよ

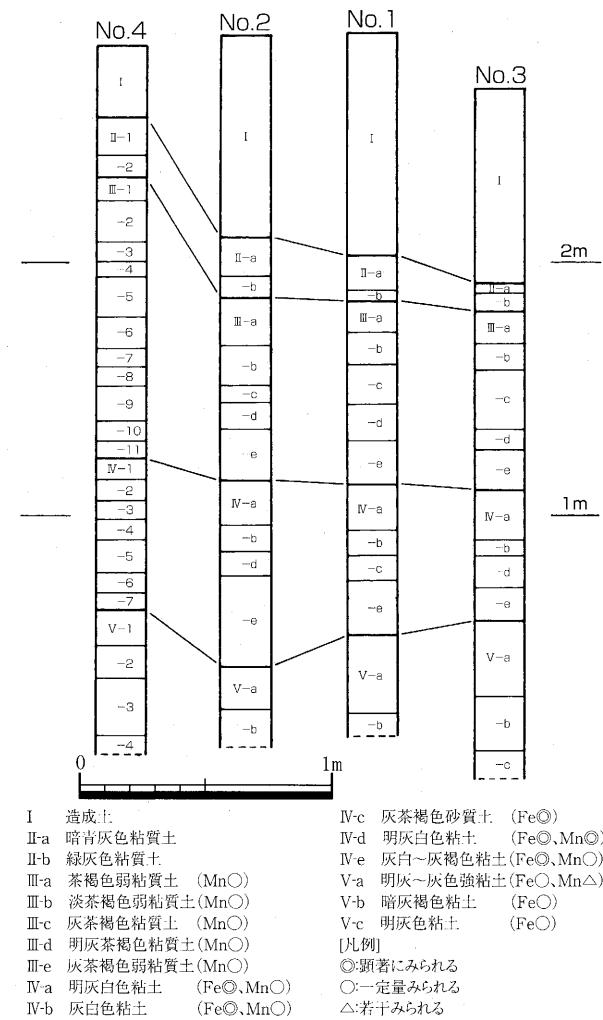


図29 土層柱状図（縮尺1/30）

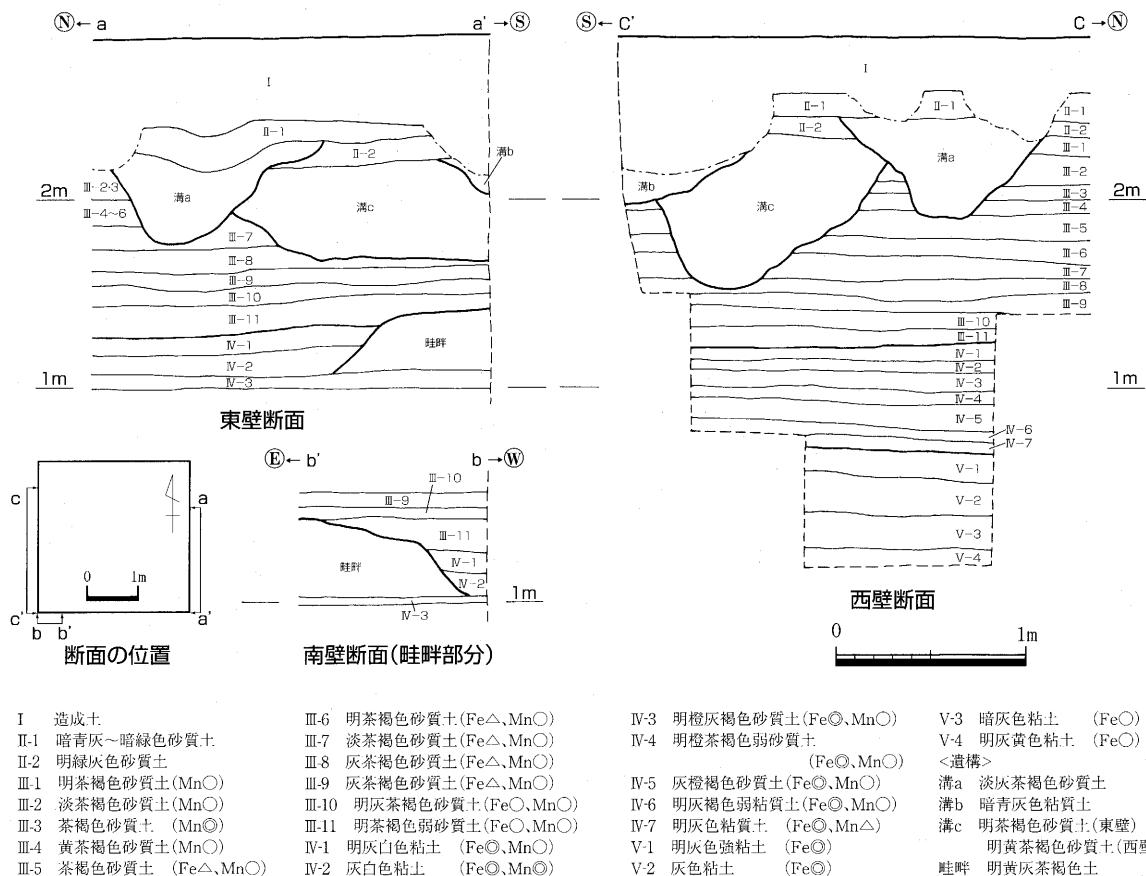


図30 試掘坑 No.4 土層断面図（縮尺 1/40）

うに、試掘坑 No.4ではⅢ層上面で東西方向の溝が確認されており、この溝の付近を境に段差を有する土地区画が存在し、周囲より高い段が作られていた可能性もある。

③遺構と遺物

遺構は No.4 試掘坑において確認されたが、そのほかの試掘坑では確認されなかった。また、遺物も希薄であり、No.4 試掘坑で近世・近代の溝の埋土から数片の土器小片を採取するにとどまった。

No.4 試掘坑で確認された遺構は、溝 3 条と畦畔 1 条である。

西壁断面・東壁断面の観察から、溝は向かい合う東西の壁面とともに 3 条が確認でき、いずれも II-2 層から 1 条、III-1 層から 2 条が切りあいながら掘削されていた。西壁断面・東壁断面で確認されたこれらの溝は、いずれも土質や掘り方の形状、底面高、位置関係、掘削開始面などが類似していることから、それぞれが対応しているものと考えられ、この地点では近世から近代にかけて、東西方向の溝 3 条が掘削されていたことが推定できる。これらの溝は近接した時期のものとみられるが、位置と方向をほぼ同じくする溝の掘削が繰り返されていることから、これらの溝の付近が東西方向に延びる土地の区画の境となっていた可能性もある。

IV 層では、IV-3 層上面から立ち上がる明黄灰茶褐色土の高まりが確認された。この高まりは南壁では西端の立ち上がりから調査区南東角まで、東壁では南側約 1 m の位置にある立ち上がりから調査区南東角までの範囲において確認されたものである。したがって、南壁・東壁で検出した立ち上がりは、東西方向に延びる高まりの北辺の立ち上がりを壁面で確認したものと考えられる。さらに、上位・下位の土層や、周辺の試掘坑の状況を合わせて考えれば、この高まりは水田畦畔であったことが考えられる。遺物が出土しなかつたため、土層や高まり

の時期は不明であるが、近世・近代のものと考えられる溝を確認したⅡ・Ⅲ層からの深度を考慮すれば、中世段階まで遡る可能性もある。

東山地区ではこれまで数件の立会調査を実施したのみであり、またそれらの多くは掘削深度の大きな工事ではなかったことから、遺跡の有無について判断する情報に欠けていた。今回の試掘・確認調査によって、東山地区北西部については現地表下約3mまでの土層の堆積状況が確認できた。その結果、湿地状の堆積物が広がっていた状態から水田等の耕作地へと移行した状況が推定できるようになった。ただし、各層の時期を判断する遺物の出土がなかったため、それぞれの土層については、明確な時期決定の材料に欠く。また、試掘坑の設定は東山地区の北西の一角に限られており、今回の調査は東山地区北西部の様相を推定する手がかりとなつたに過ぎない。地区全体の様相を明らかにするためには、今後もさまざまな機会をとらえてデータを積み上げていく必要がある。

(野崎)

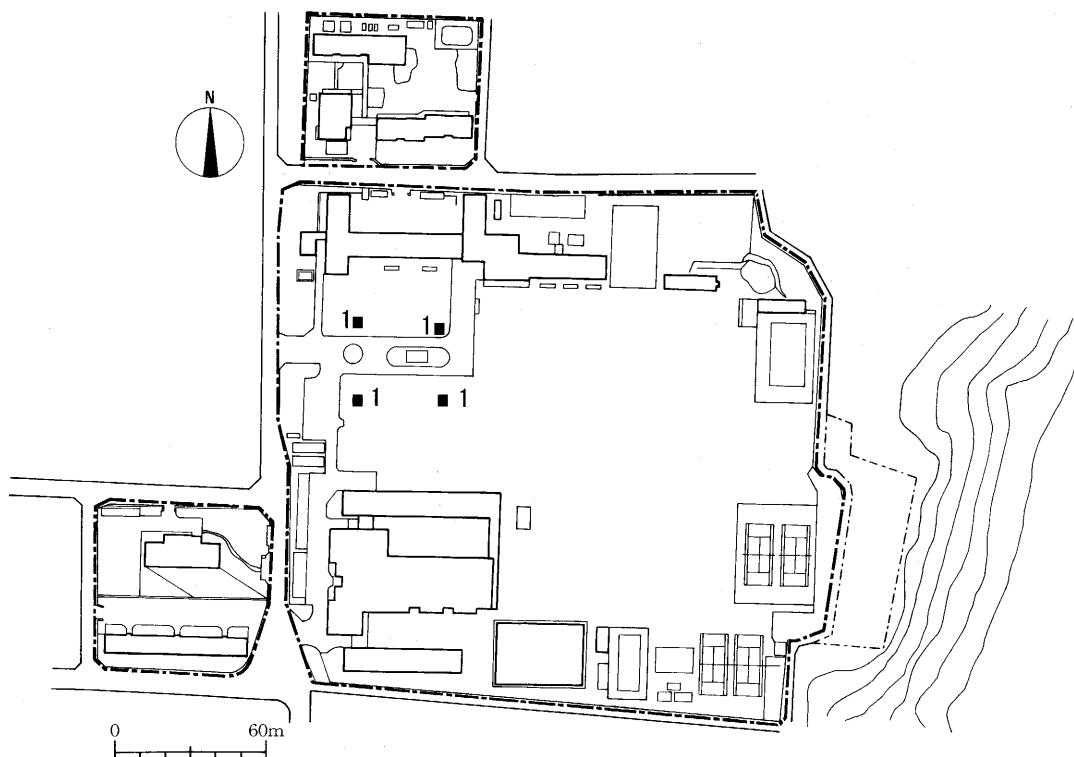


図31 2006年度の調査地点【3】—東山地区—（縮尺1/3,000）

表5 2006年度東山地区調査一覧

番号	種類	所属	調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内 容
1	試掘 確認	教育	附属小学校校舎建て替え	07.3.26, 27, 29	3.0m	試掘坑4カ所設定、近世・近代の溝3条、中世?の畦畔1条確認

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 調査資料の整理

2006年度の調査資料の整理は、鹿田遺跡第13次調査（総合教育研究棟）の古墳時代初頭土器の接合・復元作業を中心に行った。

また報告書の作成に関しては、『鹿田遺跡5』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊）を刊行した。『鹿田遺跡5』は、医学部基礎研究棟およびRI治療室新館に伴う鹿田遺跡第7・8次調査（1998年）の成果報告書である。古代末～中世前半の区画溝に囲まれた屋敷地や、古墳時代初頭の集落に関する調査成果等について報告がなされた。考察としては、古代末・中世に関する4本の論考を収載し、鹿田遺跡における土師質土器碗の編年、集落構造、中世の曲物、区画溝から出土した猿形木製品についてそれぞれ分析が進められた。

2. 調査資料の分析

自然化学分析では、『鹿田遺跡5』作成に関わるものとして、放射性炭素年代測定を行った。また、同報告書には、2006年度より前に分析を実施していた能城修一氏による木材の樹種調査、(株)吉田生物研究所による曲物に関する樹種調査と漆器に関する漆膜構造調査、(財)元興寺文化財研究所による猿形木製品に関する樹種調査と赤色顔料分析の結果を掲載した。その他、分析のために提供した試料としては、津島岡大遺跡の土壤サンプル、縄文土器（3次元計測）、雑草メロン・ウリの種子（DNA解析）がある。

a. 放射性炭素年代測定

2006度は、『鹿田遺跡5』の作成に伴い、2点の試料について放射性炭素年代測定を行った。いずれも古墳時代初頭の井戸出土の土師器甕であり、(株)古環境研究所に分析を依頼した。詳細は同報告書に掲載している。

表6 2006年度放射性炭素年代測定一覧

番号	出土地点	遺構	対象資料	分析法	分析機関	備考
1	鹿田第7次調査	井戸	土器付着炭化物	AMS	(株)古環境研究所	『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊にて報告
2	鹿田第7次調査	井戸	土器付着炭化物	AMS		

AMS (Accelerator Mass Spectrometry) : 加速器質量分析法

b. 土壤分析

宮崎大学農学部の宇田津徹朗氏によるプラント・オパール分析（文部科学省科学研究費補助金「縄文時代の稻作マップ作成にむけた実証的調査研究」（研究代表者：宇田津徹朗）に基づく研究）のため、津島岡大遺跡の弥生時代早期～前期の土層「黒色土」をはじめとする土壤サンプルを提供した。サンプル採取は2006年9月19日に津島岡大遺跡公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査において、宇多津氏によって実施された。その分析成果については、本書第3章第3節に掲載されている。

3. 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG保存処理作業

2006年度における調査資料の保存処理としては、木製品のPEG保存処理作業を実施した。これは、2005年11月に開始した第7期保存処理作業の継続で作業である。対象資料は津島岡大遺跡第23・24次調査から出土した、縄文時代後期の杭や弥生時代前期の堰を構成する木材等である。2006年3月末の時点では濃度は95%である。事前の記録作業は岡山大学の博物館実習に取り入れ、これらの準備作業の一部については岡山大学文学部等の博物館実習生の協力を得た。なお、本年度は外部委託による保存処理は実施していない。

(光本)

表7 第7期保存処理工程

期	年月日	作業内容
第7期	2005年11月25日	濃度40%、処理開始
	2006年2月28日	濃度50%へ
	2006年4月25日	濃度60%へ
	2006年6月27日	濃度70%へ
	2006年8月8日	濃度80%へ
	2006年11月21日	濃度90%へ
	2006年2月21日	濃度95%へ、蓋開け

表8 これまでの保存処理工程

期	期間	処理内容	処理期間
第1期	1992年2月～1993年11月	鹿田遺跡第1次（附属病院外来診療棟）・第2次（NMR-CT室）	1年9ヶ月
第2期	1994年6月～1996年8月	鹿田遺跡第3次（医学部短期大学部校舎本体）・第4次（医学部短期大学部校舎周辺配管）・第5次（附属病院管理棟）、津島岡大遺跡第3次（男子学生寮）・第5次（大学院自然科学研究科棟）・第6次（生物応用工学科棟）	2年2ヶ月
第3期	1996年12月～1999年6月	鹿田遺跡第3次・津島岡大遺跡第3次・第6次	2年7ヶ月
第4期	1999年7月～2000年12月	鹿田遺跡第3・4次、津島岡大遺跡第3次	1年5ヶ月
第5期	2001年1月～2002年3月	鹿田遺跡第3・4次、津島岡大遺跡第3次・第9次（生体機能応用工学科）・第10次（保健管理センター）・第12次（附属図書館）・第13次（福利厚生施設北棟）	1年2ヶ月
第6期	2002年11月～2004年8月	鹿田遺跡第7次（医学部基礎医学棟）、津島岡大遺跡第19次（コラボレーション・センター）・第22次（環境理工学部棟Ⅱ期）	1年10ヶ月
第7期	2005年11月～（継続中）	津島岡大遺跡第23・24次（文化科学系総合研究棟）	—

第2節 調査成果の公開・活用

2006年度は、津島キャンパスにおいて発掘成果展を開催した。また、大学生の博物館実習や中学生の職場体験受け入れのほか、総合学習時間を利用した小学生の見学に対する説明など、学校教育現場との連携も積極的に行なった。そのほか、地元の地区団体から、津島キャンパスにのこる戦跡見学についての依頼があり、職員が構内にのこる施設について説明しながら案内をするなど、地元市民に対する普及活動も行った。

1. 公開・展示

a. 第10回キャンパス発掘成果展

概要 2000年度以降、毎年秋季に津島キャンパスでの定期的な展示会を開催している。今年度は10回目の開催で、開催期間は11月15日～19日までの5日間である。

今回は「兵どもが夢の跡－岡山大学構内にのこる戦いの証－」と題して、岡山大学構内遺跡出土品および岡山大学構内にのこる陸軍関連施設を対象とした。岡山大学構内では弥生時代から江戸時代に至るまでの戦いに関する遺物が出土していること、岡山大学設置以前の津島地区は、旧日本陸軍第十七師団駐屯地として利用されており、現在も陸軍関連の施設がのこっていることが、このテーマを選定した主たる理由である。また、例年好評を博している体験コーナーにかわり、今回は岡山大学構内にのこる戦争関連施設をめぐる見学会を企画した。展示会見学者総数は244名、見学会参加者は39名（定員50名）である。なお、会場として近年移築された岡山大学旧事務局棟を使用した。この建物は旧陸軍第十七師団司令部として建設されたものであり、会場自体を展示の構成

の一部とした。

内容 テーマに則したコーナーとして、「戦いのはじまり」（弥生・古墳時代：津島岡大遺跡・鹿田遺跡から出土した木製短甲・木製盾などの防御具と大型化した石鎚の展示）、「争乱の時代」（中世：半田山城と福輪寺縄手に関係する可能性のある遺構のパネル展示）、「太平の世の砲術」（近世：津島岡大遺跡出土の棒火矢と関連遺物の展示）、「戦争の世紀へ」（近・現代：「第十七師団」大理石製プレート、刻印レンガと陸軍関連施設写真のパネル展示）を設けた。これに加え、埋蔵文化財調査研究センターの業務内容、会場である旧事務局棟周辺の発掘調査成果（縄文時代中期の土器、近世・近代の水門などを展示）を紹介するコーナーを設けた。また、昨年に引き続き、展示の理解の促進を目的とする映像解説を作成し、2ヶ所の映像コーナーを設けた。

見学者には入場に際してパンフレットとともにアンケートを配布した。アンケート用紙を配布した213名のうち、131名の方から回答をいただくことができた。回収率は61.5%である。

アンケートの集計結果は次のとおりである。

来場回数については、回答のあった122人のうち、初めての方が86人、2回以上の方が36人で、リピーターの割合は44%であった。過去3年のリピーターの比率は2003年：39%（19名）、2004年：45%（40名）、2005年：55%（31名）となっていて、その比率は漸増傾向にあった。今回は比率としては下がっているが、来場者実数は36名で、昨年・一昨年の数字と大きくかわらない。初めての来場者が多くなかった結果、リピーターの比率が下がることとなっている。

日別の来場者数をみると、平日は30名前後であったが、土曜日は63名、日曜日は56名で、平日の倍以上の来場者を得ることができた。なお、週末の二日間は雨天であったが、多くの来場者を得たことも注意しておきたい。

印象にのこったものとしては、旧陸軍にかかる展示品（司令部建物と建物内にのこる当時の階段の手すり、現存する陸軍諸施設や写真で記録された当時の施設についてのパネル展示）25、棒火矢14がとくに際立っており、陸軍関連施設に対する関心の高さ、希少な遺物の印象度の高さがうかがえる結果となった。これはどのコーナーがおもしろかったのかという質問項目にも顕著に現れており、棒火矢を中心に展示した「太平の世の砲術」41、陸軍関連施設を紹介した「戦争の世紀へ」40（複数回答）で、他のコーナーより関心が高いことが窺われた。

意見・感想などでは、身近なところの歴史を知ることができたことについての感想のほか、戦いや戦争の歴史をテーマとした展示内容であったため、「もっと多くの方に見てもらいたい、戦争を知らない若い世代にみてもらいたい」といった意見があった。そのほか、「もっとアピールをしてはどうか」と

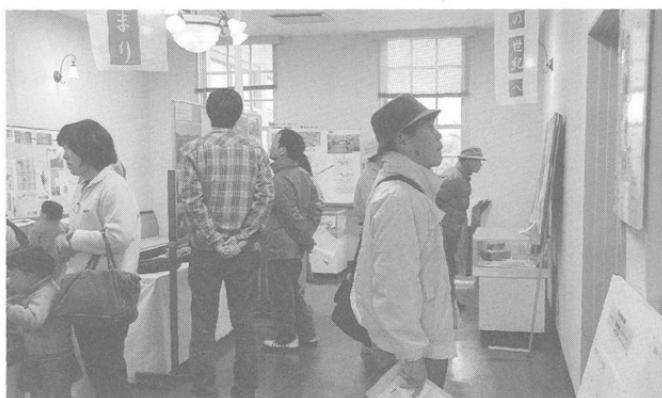


図32 展示会風景

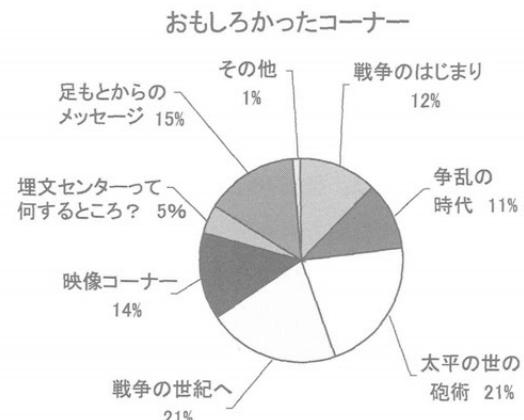
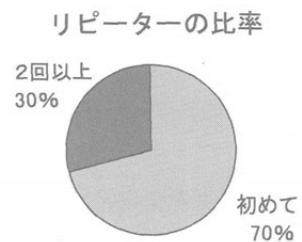
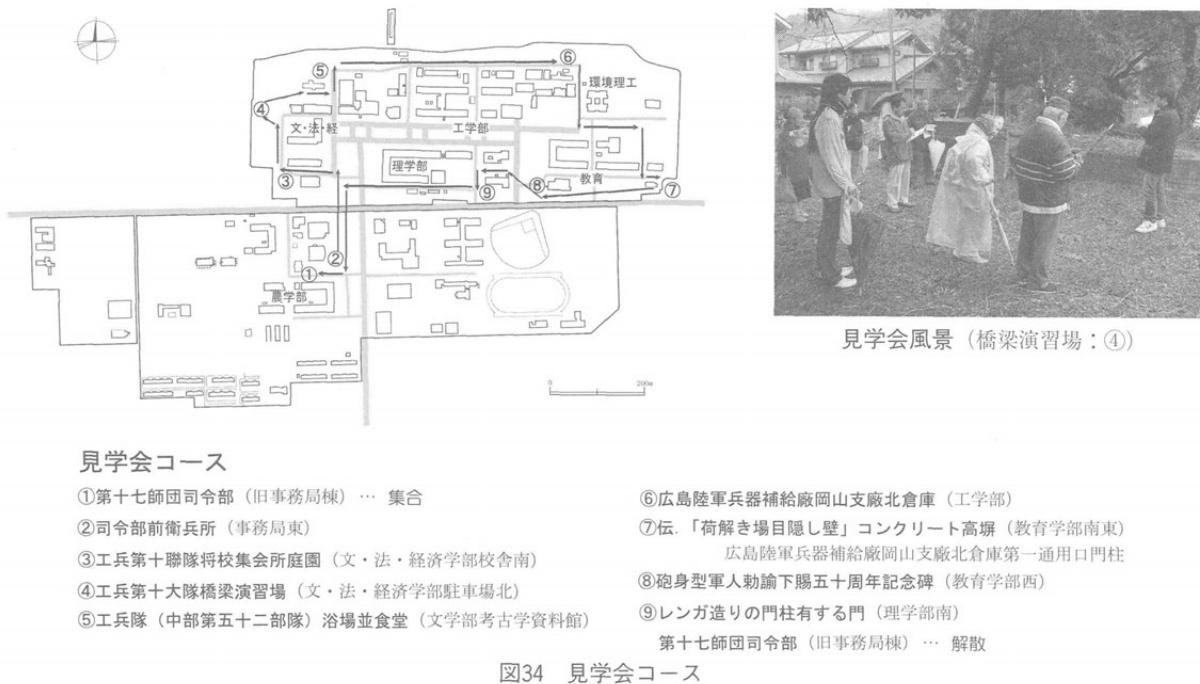


図33 アンケート結果



といった意見や、「本当の体験をしているから、当時を思い出して切ない」といった意見もあった。

今回は例年準備してきた体験コーナーに代わって見学会をあわせて開催し、週末にあたる11月18・19日に実施した。岡山大学津島地区構内には旧日本陸軍の岡山駐屯部隊がのこした施設がわずかながらも現存している。両日ともに雨の降るなかであったが、24名（18日）、15名（19日）の参加者があった。

見学会は展示会場である旧事務局棟（第十七師団司令部）建物を出発し、建物や構造物がのこされている津島キャンパス北地区を中心にまわるコースとした。参加者は小学生から岡山連隊区司令部での勤務経験者という高齢者まで幅広く、また、学生や教員といった学内者のほか、戦跡に関心をもつ一般の参加者も目立った。

現在、これらの施設は大学の景観のなかに埋もれているが、その歴史をたどりながら訪れてみれば、やはり周囲の景観とは異なり、異彩を放つものである。参加者からは「こんなところにこんなものがあったとは」、とか、「これが何なのかずっと不思議に思っていたが、陸軍の施設であるとは思わなかった」という感想があった。

最後に、今回の展示会の成果と課題について記しておく。まず、課題としては、見学者から寄せられた意見等を参考にすると、①映像のつくり方と工夫について、②展示解説文中のルビのつけ方について、③展示コーナーの配置と導線について、④PRの方法とその範囲について、の4項目が挙げられる。映像のつくり方については、昨年に引き続き2度目の実践であったということもあり、より洗練され、わかりやすく、丁寧なものをつくるようにさらに試行を重ねていく必要がある。また、①～③の項目は、いずれも展示の構成や内容に関するものであり、今後、これらの意見を反映した展示のあり方を検討していく必要があろう。

成果としては、戦いや戦争というテーマの展示であったため、考古学の成果だけでなく、戦跡の展示を加えたことで新たな見学者層を開拓できたことが挙げられよう。戦跡については、旧日本陸軍第十七師団の跡地を引き継いだ岡山大学の特性であるという側面もあるが、展示物やその内容を工夫することで、考古学に関心のある見学者のほか、それ以外の人々にも展示を見てもらうことができるということを実際に示すものとなったといえるのではないか。リピーターの比率が下がったことや、陸軍関係の展示物が一番印象に残ったとした参加者が最も多かったことは、これまでの見学者層以外に新たな見学者層が加わったことを示すものとみることもできよう。

2. 資料・施設等の利活用

a. 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

①博物館実習：8月3日～9日

例年通り、岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館学実習）の受け入れを行った。期間は8月3日～9日のなかで6日間である。全体を3グループに分けて、それぞれ2日間の受講日程を組んだ。

内容としては、この期間に発掘調査を実施していた鹿田遺跡第17次発掘調査における発掘体験のほか、埋蔵文化財の取り扱いに関する知識全般を体験するため、遺物の注記や接合作業などの通常の業務についても組み込んだものとした。さらに、学芸員資格取得を目指す大学生が専攻する講義でもあるため、実習生みずからが観察して記録に残すという、実践的な木器の記録作業などのとりくみも加えて実施した。

②中学生の職場体験：11月14日～16日（岡山市立竜操中学校）、11月20日～22日（岡山市立高松中学校）、生徒計5名

例年通り、岡山市内の中学校から、「中学生の職場体験」の受け入れ依頼が2件あった。中学生職場体験では、遺物の洗浄、注記や接合作業などの通常業務を行った。また、受け入れ期間が第10回キャンパス発掘成果展の開催期間とそれに前後する準備・片付け期間にあたっていたため、それらについても体験に組み込んだ。

③小学生総合学習：岡山市立津島小学校6年生

小学校の総合的学習の時間を利用して、身近な遺跡を調べるために津島小学校6年生が当センターを訪れた。津島岡大遺跡と、お塚様古墳をはじめとする津島キャンパス周辺の古墳について職員が説明を行い、児童からの質問に答えた。

④2007年度非常勤講師への委嘱依頼

岡山大学文学部長より、表9の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼を受け（2006年3月9日）、承諾した。
(野崎)

表9 2007年度非常勤講師への委嘱依頼内容

職名	氏名	担当科目	委嘱期間	備考
助教授	山本悦世	博物館実習	平成19年4月1日～ 平成20年3月31日	通年 水345
助手	岩崎志保	博物館実習	平成19年4月1日～ 平成20年3月31日	通年 水345
助手	野崎貴博	博物館実習	平成19年4月1日～ 平成20年3月31日	通年 水345
助手	光本順	博物館実習	平成19年4月1日～ 平成20年3月31日	通年 水345

b. 調査・研究への支援

①資料見学・視察

- ・縄文土器の3次元計測（津島岡大遺跡第17次）：1件
- ・雑草メロン・ウリの種子のDNA解析（鹿田遺跡第1・5次）：1件
- ・縄文土器（津島岡大遺跡第17次）：1件
- ・弥生土器（鹿田遺跡）：1件
- ・調査視察・土壤サンプル採取（津島岡大遺跡）：1件
- ・板碑（鹿田遺跡第6次）：1件
- ・河道調査記録（津島岡大遺跡第19次）：1件

②図書の外部貸し出し：16件（岡山大学文学部学生ほか）

c. 資料の貸し出し

①出版物の資料提供

- ・鹿田遺跡第7次調査出土猿形木製品の写真（1点）提供および掲載許可 加納克己氏『日本操り人形史』八

木書店

②他機関の展示・公開支援

- 明治大学博物館『掘り出された〈子ども〉の歴史』鹿田遺跡第1・3次調査、津島岡大遺跡第23次調査出土資料（9月6日～12月26日）および展示図録掲載写真提供

第3節 2006年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

山本悦世：基盤研究C「弥生時代～中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」：研究代表者

岩崎志保：基盤研究C「弥生時代～中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」（研究代表者：山本悦世）：研究分担者

光本 順：若手研究B「弥生時代から古墳時代における刀劍副葬に関する集成的研究」：研究代表者

中村大介：若手研究B「弥生時代開始期における日韓の玉類の比較研究」：研究代表者

2. 論文・資料報告

山本悦世：『鹿田遺跡5』（編集）

「鹿田遺跡における土師質土器椀の編年について」『鹿田遺跡5』

「中世の集落構造と推移—鹿田遺跡の場合—」『鹿田遺跡5』

「ガラス滓が出土する集落遺跡—弥生時代を中心に—」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』

岩崎志保：「鹿田遺跡出土猿形木製品について」『鹿田遺跡5』

野崎貴博：「津島地区とその周辺の陸軍関連施設について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』

光本 順：『身体表現の考古学』 青木書店

中村大介：「鹿田遺跡の古代・中世の井戸について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』

「縄文時代から弥生時代開始期における調理方法」『土器研究の新視点—弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理—』考古学リーダー9 六一書房

「方形周溝墓の系譜とその社会」『墓制から弥生社会を考える』考古学リーダー10 六一書房

「弥生時代開始期における副葬習俗の受容」『日本考古学』第21号 日本考古学協会

「遼寧式銅剣の成立と展開」『日本中国考古学会2006年度大会』発表要旨 日本中国考古学会

『弥生文化形成過程の研究』大阪大学大学院文学研究科 博士論文

3. 研究発表等

山本悦世：「岡山市鹿田遺跡」日本中世土器研究会 10月

中村大介：「遼寧式銅剣の成立と展開」日本中国考古学会2006年度大会

4. 資料収集・実態調査

山本悦世：土師器の資料調査（岡山県）、中世城館の景観調査：一乗谷朝倉氏遺跡・福井県立歴史博物館（福井県）

岩崎志保：中世城館および中世関連資料調査（福井県）、弥生集落遺跡の実態調査（佐賀県）

野崎貴博：古式土師器の資料調査（島根県）、中・後期古墳の踏査（愛知県）

光本 順：古式土師器の資料調査（島根県）、古墳の踏査（長野県・埼玉県・茨城県）

中村大介：碧玉製管玉の資料調査（釜山、大邱、大田）、碧玉原石の踏査（浦項～朝鮮半島南東海岸）、碧玉の理
化学的分析（徳島大学 庄・蔵本遺跡の資料）

第5章 2006年度における調査・研究のまとめ

調査 2006年度は、1件の発掘調査を鹿田地区において実施した（鹿田遺跡第17次調査・総合研究棟（医学系）新営）。2004年度に鹿田遺跡第16次調査（立体駐車場エレベーター設置）として小規模調査がなされたものの、まとまった面積を対象とする調査としては、2003年度の鹿田遺跡第14次調査（病棟Ⅱ期工事）以来のものである。この第17次調査では、中世の大形溝と屋敷地の構造や、古墳時代初頭の住居址や焼土遺構をはじめ、各時代の遺構の広がりと性格を追究するための有効なデータを得た。

また本年度は、津島地区にのこる旧陸軍関連施設の測量調査を2ヵ所で実施した。ひとつは、公共下水井設置工事に先立って行った教育学部南東側の通用門付近の土壘の測量と、もうひとつは旧陸軍第十七師団山砲兵第二大隊表門に関するものである。土壘と門の関係や門柱のつくりなど、新たな知見を得たとともに、こうした近代の文化財に関する記録化を、2005年度に引き続き進めることができた。

教育学部附属小学校校舎建て替えにともない、東山地区において実施した試掘・確認調査では、同地区北西部の様相が明らかとなった。本調査地点は、近世・近代段階の耕作地を示す遺構が確認されるのみで、遺構・遺物については非常に希薄な状況を再確認した。これまで調査機会の少なかった東山地区において、貴重なデータが得られた。

立会調査については、全体的傾向としては、縦件数および中世以前の包含層にまで掘削の及ぶ例が少なかつた。そうした中、津島地区においては掘削深度の深い工事が3件なされ、随時調査を進めた他、公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査では、宮崎大学農学部の宇田津徹朗教授にプラント・オパール分析用の土壤試料を提供した。その分析結果については、本紀要に掲載されている。

研究 2006年度の刊行物として、まず報告書としては『鹿田遺跡5』がある。これは、1998年に実施した鹿田遺跡第7次調査（医学部基礎研究棟新営）・第8次調査（RI治療室新営）の報告である。本報告書では、古代末～中世前半の区画溝に囲まれた屋敷地や、古墳時代初頭の集落に関する調査成果等に加え、古代末・中世に関する4本の考察を収載した。考察では、土師質土器椀の編年、集落構造、中世の曲物、猿形木製品について分析がなされた。前回の『鹿田遺跡4』の刊行が1997年であったので、本報告書は約10年ぶりの鹿田遺跡に関する報告であり、今後の調査研究や報告書作成の指針ともなる。『紀要2005』では、旧陸軍の橋梁演習施設に関する測量調査成果の他、津島地区および周辺の陸軍関連施設と鹿田遺跡の古代・中世の井戸に関する考察を収載した。

『センター報』は例年通り2冊を刊行した。第36号が2006年度の展示会の内容にあわせた戦いに関する特集号であり、第37号がこれまでの展示会の実績をまとめたものである。

他、『鹿田遺跡5』作成と関連して、古墳時代初頭の土器付着物に関する放射性炭素年代測定を実施した。また、前述のプラント・オパール分析等、いくつかの試料提供を行った。

展示・公開 展示会としては、第10回キャンパス発掘成果展「兵どもが夢の跡—岡山大学構内にのこる戦いの証—」を開催した（11月15日～19日）。今回は、岡山大学構内遺跡出土品および構内にのこる陸軍関連施設に焦点を当てたものである。会期中には、大学構内（津島地区）にのこる陸軍関連施設見学会も実施し、展示とともに好評を博した。また、鹿田遺跡第17次調査中には、現地説明会を実施した。他、教育機関への支援として、博物館実習や中学生職場体験の受け入れ、小学生総合学習への協力も行った。

以上のように、2006年度は、調査と研究、展示・公開のいずれにおいても充実した年度となった。発掘調査の実施と報告書の作成を活動の基盤としつつ、展示会をはじめとする公開活動によって成果を社会へ還元するあり方は、本センターのもっともスタンダードな姿ともいえる。こうした着実な活動の積み重ねとともに、さらなる発展をのぞむべく、学術面における個々人の研鑽と、円滑な組織運営に取り組んでいく必要があろう。

(光本)

付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日
岡大規程第93号〕

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

付 編

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

平成16年4月1日
学長裁定

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
- 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
- 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
- 五 センターの調査研究室長
- 六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

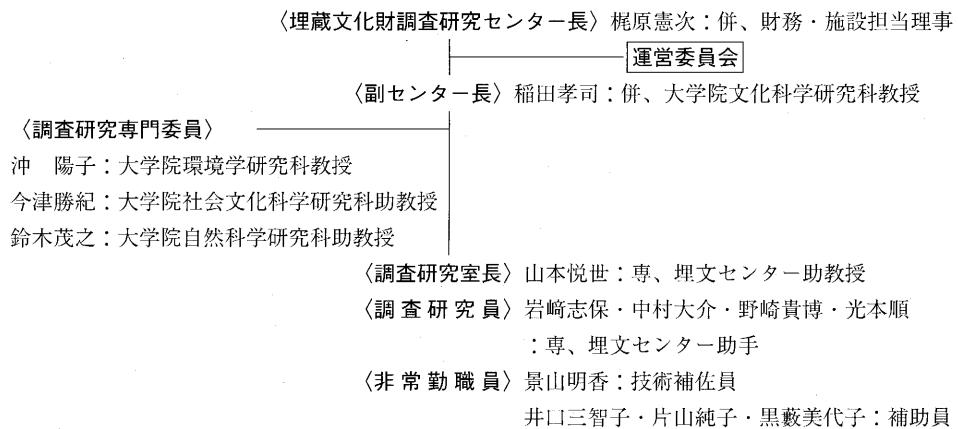
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2. 2006年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織一覧



(2) 運営委員会

【委員】

栗原憲次 財務・施設担当理事(センター長)	柴田次夫 大学院自然科学研究科教授
稲田孝司 大学院社会文化科学研究科教授(副センター長)	沖 陽子 大学院環境学研究科教授(調査研究専門委員)
新納 泉 大学院社会文化科学研究科教授	山本悦世 埋蔵文化財調査研究センター助教授(調査研究室長)
久野修義 大学院社会文化科学研究科教授	入江良広 施設企画部長
大塚愛二 大学院医歯薬学総合研究科教授	

【2006年度協議・決定事項】

- 第60回2006年9月29日
- 平成17年度決算について
 - 教員の職名変更に伴う審査基準策定について
 - 授業担当標準コマ数の策定について
 - 平成18年度予算について
 - 平成19年度予算(案)について
 - センター20周年記念事業について
 - 平成19年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について
 - 教員人事評価について
 - 人事について
- 第61回2007年3月7日

3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施 設 部 長

I. 請負業者が留意すべき事項

- 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
- 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

と。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2. 掘削

1) のり面の角度

造成土：通常の土壤の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業

- 1) 作業中には安全帯を使用する。
- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

- 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

5. 健康管理

- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)~3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(m ²)	文献	備考
1980	鹿田	立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
	津島南	BD26	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北		文法	合併処理施設	〃			
	津島北		文法経	合併処理施設	〃			
	津島南	BD09、BC09~11		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD~BE04~07		陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田		医病	高気圧浴室新営	〃			
	〃		〃	動物実験棟新営	岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃		医	運動場改修	〃			
	津島	AV06・10、AW05・14、AX08、BD07、BE10	試掘	排水基幹整備	〃			津島 AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第1次調査へ
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽（NP-1）埋設	岡山大学	24.0	3 小橋法目黒遺跡：津島岡大第1次調査
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3	
	津島北	AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0	
	鹿田		〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0	
	〃		医病	外来診療棟新営	岡山県教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医	動物実験施設閑連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会	1	
	鹿田	AE~AN22、AE22~26	〃	歯	電話ケーブル埋設	岡山県教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室		

文献

1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
 2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
 3. 吉留秀敏 1985 「岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2005年度以前の構内主要調査（1983～2005年度）

* 凡例	・総合番号：調査の地区別通し番号（立会調査は選択的に保存）
	津島岡大遺跡第1次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。
	発掘調査には番号に○を付している。
	試掘・確認調査のうち、その後の発掘調査範囲に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（ ）を付している。
	立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査
・番号	：年度別報告番号
・文献	：付表4・5の番号に対応する。

付表2-(1) 発掘調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(m ²)	概要	文献
* 1	1982	—	AW14	文	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第1次調査）：排水集中槽（NP-1）埋設	82.10.28~11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14・18、BF17・18、BG14 BH14・15	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：排水管埋設	84.1.9~3.5	265	弥生時代早~前期集落	4
②	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：合併処理槽埋設	11.14~11.22 84.1.9~3.5	276	弥生時代早~前期水田閑連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00、AW00・01	学	津島岡大遺跡第3次調査 ：男子学生寮	12.1~ 87.6.18、8.24 ~9.5	1550	縄文時代後期~弥生時代早期の貯蔵穴と河道および集落、弥生時代の前期~近代の水田・溝、古代の条里閑連溝	19

付 編

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(m ²)	概要	文献
⑯	1986	3	BF・BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 : 廊内運動場	87.1.19~1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
㉖	1988	1	AY06~08、 AZ06~07	大自	津島岡大遺跡第5次調査 : 自然科学研究科棟	6.27~89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道・弥生時代末~近世の水田関連遺構	27
㉗	1988 1989	2 1	AV・AW04~05	工	津島岡大遺跡第6次調査 : 生物応用工学科棟	9.20~89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里閑連溝、弥生時代前期~近世の水田・溝	35
㉘	1988	3	AV・AW05~06	工	津島岡大遺跡第7次調査 : 情報工学科棟	10.12~89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期~近世水田	35
㉙	1990	1	AY・AZ08	大自	津島岡大遺跡第5次調査 : 自然科学研究科棟	4.3~4.21	90	古墳時代後期の溝	27
㉚	1991	2	BD18~19	農・菜	津島岡大遺跡第8次調査 (A地点) : 遺伝子実験施設	7.23~12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代~近世の溝	32
㉛	1991	3	BH13	農・菜	津島岡大遺跡第8次調査 (B地点) : 合併処理槽	7.23~12.2	140	弥生時代溝、古代~近世水田	32
㉜	1992	1	AU~AW04	工	津島岡大遺跡第9次調査 : 生体機能応用工学科棟	7.1~93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代~近世の水田址	47
㉝	1992 1993	2 1	BB~BC10~11	保	津島岡大遺跡第10次調査 : 保健管理センター	93.2.1~3.31、 4.17~7.31	400	弥生時代後期~古墳時代集落、近世耕作閑連遺構	64
㉞	1993	2	AV~AW11~12	情	津島岡大遺跡第11次調査 : 総合情報処理センター	9.14~94.1.11	640	縄文後期遺構	36
㉟	1993 1994	3 1	AV~AW13~14	図	津島岡大遺跡第12次調査 : 図書館	94.2.9~3.31、 4.11~11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代中期~古墳時代溝、古代~近世溝 (条里閑連)	64
㉟	1994 1995	2 1	AW~AX11~12	事	津島岡大遺跡第13次調査 : 福利厚生施設北棟	10.6~11.30、 95.7.10~10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥生~古墳時代溝、近代耕作面	41
㉢	1995	2	BB~BC12~13	事	津島岡大遺跡第14次調査 : 福利厚生施設南棟	10.25~96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生~古墳時代の溝	46
㉔	1995 1996	3 1	AW00~01	サ	津島岡大遺跡第15次調査 : サテライトベンチャービジネスラボラトリ	96.1.16~4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期水田、古墳~中世水田・溝	38 72
㉕	1996	2	BD19~20	農業	津島岡大遺跡第16次調査 : 動物実験棟新営	96.5.7~15	30.3	A地点: 縄文時代と古墳時代の土坑、B地点: 中世の溝、古代の柱穴列、弥生時代の水田	44
㉖	1996	3	AW02~04	環	津島岡大遺跡第17次調査 : 環境理工部新営	96.5.21~1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水田、古代の水田	44
㉗	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査: 福利施設 (南) 新営に伴うボンプ槽取設	98.4.7~4.10	16	古代の溝状遺構	53
㉘	1998	3	AZ09~10	理	津島岡大遺跡第19次調査 : コラボレーションセンター	98.7.27~ 99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
㉙	1998	5	AY07	環	津島岡大第20次調査: 校舎 (I期) 新営に伴うボンプ槽取設	98.10.19~28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
㉚	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査 : エレベーター設置	98.11.6~24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期~前期溝、古代土坑・溝	65
㉛	1998 1999	8 2	AW02~03	環	津島岡大遺跡第22次調査 : 校舎 (II期)	1999.3.1~7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水田畦畔、古墳時代溝・古代~近世溝 (条里閑連)・水田畦畔	53
㉜	1999 2000	5 1	AZ15~BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査 : 総合研究棟	00.2.3~7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生前期河道・堰・溝、弥生中期~近世溝	56
㉝	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査 : 総合研究棟渡り廊下建設	00.12.5~14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	61
㉞	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査 : 散水施設設置	01.1.29~31	20.0	中世~近世の溝・杭	61
㉟	2000 2001	5 1	BC~BD14~15	事	津島岡大遺跡第26次調査 : 事務局	01.3.26~9.30	1550	縄文~弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・炉、近世の溝・堰	56 61
㉢	2001 2002	2 1	BB~BC14~15	—	津島岡大遺跡第27次調査 : 創立50周年記念会館	02.2.1~6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代の溝・中世の畦畔 (条里閑連)	66 68
㉔	2002	2	AW~AY06~08	大自	津島岡大遺跡第28次調査 : 自然科学系総合研究棟	4.30~9.20、 11.28~03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世~古代の畝・溝	71
㉕	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査 : 共同溝	02.9.18~10.3	62.6	弥生~古墳時代の溝・ピット	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(m ²)	概要	文献
①	1983 1984	9	AU~BD28~40	医病	鹿田遺跡第1次調査: 外来診療棟	7.27~11.22 84.1.9~8.31	2188	弥生時代中期後半~中世集落	7
②	1983	10	BG~BI18~21	医病	鹿田遺跡第2次調査: NMR-CT室	8.1~12.30	176	弥生時代後期~中世集落	7
⑩	1986	1	CN~CU27~28、 CT~CY19~27、 CX~DD16~25、 DD~DG22~23	医短	鹿田遺跡第3次調査: 校舎	6.2~11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10
⑫	1987	3	DD~DF25、 DG~DI27~28	医短	鹿田遺跡第4次調査 : 校舎周辺の配管	11.2~11.21	30	古代の河道	10

付表

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(m²)	概要	文献
⑬	1987	2	BB~BH35~42	医病	鹿田遺跡第5次調査：管理棟	10.6~88.3.2 88.3.23~3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24
⑭	1990 1991	2 1	BW~CC67~71	ア	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター	11.20~91.6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40
㉙	1997 1998	4 1	BR55~BX61、 BY56~57	医	鹿田遺跡第7次調査： 基礎医学棟	98.2.27~8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・溝	50 53
㉚	1998	4	BP~BS30~32	医病	鹿田遺跡第8次調査：RI治療室	98.7.28~9.1	165	古墳時代溝・中世溝	53
㉛	1998 1999	7 1	CD33~37、 CE・CF28~37、 CG~CJ20~37、 CK・CL25~37	医病	鹿田遺跡第9次調査 ：病棟	98.11.27~ 99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
㉜	1999	3	CD・CE10~12、 DD~DF16~22	医病	鹿田遺跡第10次調査 ：共同溝閑連	99.5.7~ 99.10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
㉝	1999	4	CD~CM19~42	医病	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟	99.8.19~12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状構造、中世～近世集落	56
㉞	2000 2001	2 —	CO~CV35~44、 CN・CM38~41、 CN28~38	医病	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター	00.10.2~ 01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
㉟	2002	3	BL~BR46~51	大医歯	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟	02.4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝、中世の集落、近世土坑群	71
㉟	2003	1	CD~CM12~20	医病	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟（Ⅱ期）	03.7.31~12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝・近世のため池・土坑	71
㉟	2003	2	BQ~BS45~46	大医歯	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構工事	03.10.16~ 10.29	30.4	古墳時代初期の井戸・溝、中世溝群	71
㉟	2004	1	AH~AI6~7 AF12~13、 AN~AO4	医病	鹿田遺跡第16次調査 ：立体駐車場新設工事（エレベーター	04.10.21~11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・畠・土坑、中世の土坑、弥生～古墳の河道	81

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総合番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積(m²)	概要	文献
①	1997	1・2	—	固	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究棟	97.5.10~ 20、7.28~31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	—	固	福呂遺跡第2次調査：実験研究棟新設に伴う工事スロープ部分	97.11.25~12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表2-(2) 試掘・確認調査

〈津島地区：津島岡大遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
(3)	1983	1	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	—	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	—	—	1
5	1983	3	BE~BG14、 BE・BH15、 BE18, BF16~18、 BC18	農	排水管埋設予定地	2.0	—	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22・23	農	農場畜舎新設予定地	2.0~3.0	0.6	2ヶ所、土器片（1987年度工事立会）	1
(7)	1983	5	BC・BD15	事	大学事務局新設予定地	2.0~3.0	0.9	2ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保	保健管理センター新設予定地	2.0~3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	事	津島宿舎新設予定地	0.9	0.9	土器片（1987年度工事立会）	1
10	1983	8	AW05	工	校舎新設予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認（1986年度工事立会）	5
13	1985	2	AX02	教育	研究棟予定地	2.6~3.4	1.2	3ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV・AW99~01	学	男子学生寮新設予定地	2.0~3.0	1	→津島岡大第3調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF・BG09	学	屋内運動場新設予定地	2.4, 1.2~1.7	1.1	→津島岡大第4次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新設予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（土生地区）	事	外国人宿舎建設予定地	2.2~2.8	—	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	情	総合情報処理センター新設予定地	2.0~3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0~3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田（継続して調査）	8
25	1987	7	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器（継続して調査）	8
29	1988	17	AX04・06、AW04	工	校舎建設予定地	2.0~3.5	—	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18・19	農・漿	動物実験飼育施設、遺伝子実験施設	2.3	1.1~1.2	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土（1988年度工事立会）	11
33	1989	2	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、縄文時代後期～中世土器片（継続して調査、面積38.5m²）	14
34	1989	3	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6~2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝（1989年度工事立会）	14

付 編

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
35	1989	4	BD02	学	学生合宿所予定地	2.0~3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔(1989年度工事立会)	14
(36)	1989	5	AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	1.4~1.6	→津島岡大第12次調査:1993年度	14
40	1990	3	BC02	学	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4~1.6	→津島岡大第13次調査:1994年度	18
56	1993	3	BE~BF22~23	農	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5		中~近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	農・業	動物実験施設	2.0	0.9	GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点出土(盛り土保存)	33
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1~2.4	1.6	明治~中世の土層確認、以下は湿地状態、遺構・遺物無し(明治戦のみ) (工事立会)	38
72	1995	5	AW02・03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査:1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生~古墳時代の溝2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う試掘調査	2.7~3.4	1.3	→津島岡大第19次調査:1998年度	53
(91)	1998	10	AW02・03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査:1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL-1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02・03・06、AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	5ヶ所、TP1・3・5:微高地状、TP2・4:低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生溝・ピット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文・法 経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.8 1.1	→津島岡大第23次調査:1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、AX00-02-03、AZ06、AW08	一	縄文~弥生時代における環境復元に伴う調査	2.6~3.2	1.7~0.9	6ヶ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	一	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査:2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1		黒色土の落ち検出	71

〈鹿田地区: 鹿田遺跡〉

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
(4)	1984	1	BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5~0.7	中世土器・包含層確認(盛土保存)	2
(5)	1984	2	CT・CU25、CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舍新営予定地	2.7	0.8~1.0	→鹿田第3次調査:1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2~3.0	0.9~1.4	弥生時代~中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2~1.3	→鹿田第6次調査:1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査:1997年度	50
29	1998	11	CF・CG43・44、CH25・26、CK35・36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0~2.4	1.0	→鹿田第9次調査:1998年度	53

〈倉敷地区〉

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
1	1990	4	—	資生研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	—	資生研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

〈三朝地区: 福呂遺跡〉

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
3	1997	5・6	—	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	2ヶ所→福呂第2次調査:1997年度	50
5	2004	1	—	固	三朝宿泊所増築工事に伴う試掘・確認調査	1.3	0.5~0.9	3ヶ所、遺構・遺物・遺物包含層確認されず	81
6	2004	2	—	固	高圧線・電話線切替工事	1.0	0.85	1ヶ所、河床疊、段丘疊層確認	81

付表2-(3) 立会調査

〈津島地区: 津島岡大遺跡〉

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
11	1984	20	BI15~17	事	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0~2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08・09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	大自	自然科学研究科棟新営:工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	工	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04~10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事I:電柱移設	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
43	1990	20	BC02~04、 BD03・04	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事 I : 学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	農・業	防火用消火栓撤去	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石礫出土	21
47	1991	17	BB16	事	津島地区基幹整備(電気) : ハンドホール・アース板	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治層~淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備(電気) : アース板	1.7	1.0	GL-1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL-1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	農・業	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75~1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本検出	25
53	1992	34	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB~BC10~12	保	保健管理センター新営に伴う外構工事ほか: 電気配線	1.8	0.6~0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、 黒褐色土はGL-1.15~1.7m、その直下に基盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟改修: 電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備: RI共同利用施設排水処理施設他設置	3.2	—	明治~中世層・暗褐色土層・古代溝?、縄文晚期?土器片	30
60	1993	28	BD~BE13	事	津島地区環境整備: 南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世~中世層を確認	30
61	1993	33	BB~BG12~13	事	津島地区環境整備: 水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	10ヶ所、近世~中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD~BE12~13	事	津島地区環境整備: 信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39~41	BB05~07、 BC05・41	学	野球場バックネット・防球ネット改修	2.0~3.2	1.0	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下は黄色砂・青灰色粘土	30
66	1994	9	BD・BE・BF04~07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーニング掘削(径80cm・深さ10m)、 GL-1.92~2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10、 AU11	情	総合情報処理センター新営電気工事	2.2	1.5	近世2面、中世(近世か?)1面、 GL-1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	農・業	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16~19	農・業	動物実験棟新営に伴うハンドホール設置工事	1.3	—	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリーエンジニアリング新営: 外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世層?1面・弥生層?1面	44
79	1996	13	AV03~AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリーエンジニアリング新営: 配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	—	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営: 雨水樹・外構工事	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質土・灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13~BH13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	—	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~BA13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	—	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代~近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	理	コラボレーションセンター支障配管布設替工事	1.4	1.0	GL-1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ桿撤去工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土層、GL-2.2mまで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03~AY07	環	実験排水管埋設工事	1.4	0.6~1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1~1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水樹設置工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管理設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01・03	施	構内外灯設置工事	1.15~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黒色土(GL-0.85~1m)確認	56
108	1999	12	AZ08・09	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うハンドホール	1.48~2.1	1.03~1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	調査面積25m ² 、黒色土下面まで調査、 近代土坑・古代溝・縄文後期ビット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水桿	1.0~1.2	0.8~1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事: 理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土	61

付 編

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
118	2000	28	AX10、AY10	理	校舎改修機械設備工事：電気	0.85~1.60	0.8~1.1	南側ハンドホールはGL-1.6mまで掘削、GL-1.52mで中世溝検出、南東から北西方向に向かって走行	61
119	2000	42	AW08、AX08	工	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6~2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土（中世？）	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5~1.7	1.0	GL-1.4mで中世層？、軍庭園の築山、土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0~1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB~BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5~2.1	1.2~1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで谷部か？	66
124	2001	27	BB・BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5~1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65~0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層（古代）を確認	66
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電室基礎解体工事	1.05	0.45~0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13~15	事	本部棟新設工事：排水桿・管路	1.2~2.5	0.7~1.2	突帯土器・石器がまとまって出土、近世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新設その他の工事：雨水排水桿・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13・BD14	事	本部棟新設その他の工事：外灯	0.95~1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL-1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07・09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0~1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB~BC14~15	事	創立五十周年記念館新築工事：汚水排水	1.0~2.3	0.85~1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13~15	五十	創立五十周年記念館新築に伴う掘削（雨水排水桿・管理設工事）	1.3	0.7~0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	工	総合研究棟新設機械設備工事（ガス配管埋設工事）	1.4	0.9	古代層？まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層確認	74
139	2003	7	BB、BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工事（仮設電力・電話引き込み建柱工事）	1.7	0.7	径0.5m、GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5~1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06~BA06	工	総合研究棟新設その他の工事（雨水排水）	1.7	0.7~0.8	標高3.3~3.4mで黒色土、弥生~古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔確認	74
141	2003	14	AW、AX06、07	工	総合研究棟新設電気設備工事（外灯）	1.4	—	中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW~AX06~07	工	総合研究棟新設その他の工事（排水）	0.5~2.5	1.6	桿で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝確認	74
143	2003	17	BC~BD15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事（外部給水・消火配管）	2.75	1.1	桿で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21-1	BG~BH13	事	公共下水桿接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	1.8	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21-2	BE~BG10	事	公共下水桿接続工事No.2区間 体育館東～武道場西	1.95~2.25	0.8~0.9	桿で縄文基盤層・管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑確認	74
146	2003	21-4	AZ16	事	公共下水桿接続工事No.4区間 文・法・経2号館西	2.45	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21-5	BA10	事	公共下水桿接続工事No.5区間 理学部	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	74
148	2003	21-6	BG22	事	公共下水桿接続工事No.6区間 農学部4号館東	1.5~1.9	0.9~1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ピット、近代畦畔状遺構確認	74
149	2003	21-7	BI16	事	公共下水桿接続工事No.7区間 津島宿泊所	1.15~1.3	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21-8	BI15	事	公共下水桿接続工事No.8区間 南宿舎	2.0~2.45	1.1	縄文基盤層まで掘削	74
151	2004	1	BB~BD26	事	公共下水桿接続工事 留学生等宿泊施設	1.22~1.68	1.0	中世層まで掘削	81
152	2004	6	BB9・10	事	津島キャンパス環境整備 留学生センター西	0.5~1.15	0.4~0.6	弥生後期包含層・遺構・礫層確認	81
153	2005	3	AV08	工	工学部総合研究棟改修工事（仮設電柱掘削取り付け）	1.5	0.9	GL-0.9mまで造成土、以下、青灰～白灰色の粘質土3層を確認、「黒色土層」は確認されず	83
154	2005	5	AW09	工	工学部総合研究棟改修電気設備工事（アース板設置）	1.8	—	基盤層～黒色土～明治の土層堆積確認	83
155	2005	9	BE02、BG07	事	キャンパス環境整備（門扉改修等）工事	1~1.3	0.7	東07地点：GL-0.7mで明治耕土と畦畔・溝、-1mで中世層確認、東08地点：近世畦畔、中世層確認	83
156	2005	13	BC~BE03、BB・BC02	事	プール改修（排水管改修）工事	0.75~2.4	0.8~1.3	縄文基盤層～近代層の堆積確認、「黒色土」確認、弥生～古墳の溝多数、近世土坑、近代大畦畔・溝を確認	83
157	2005	14	BB・BC04	事	サッカー場防球ネット設置工事	2.0~2.2	—	オーガーによる掘削、一部で「黒色土」確認	83

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
3	1983	23	AO~AW22	医病	外来診療棟蒸気配管設	1.3	—	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	AW~BH23、BH・BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管理設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5

総号 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
8	1985	12	AG31、AG24、AF23	医病	基幹環境整備工事：電気配線ハンドホール掘削	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BL~BN4	医病	記念館東側污水管改修工事	0.8~1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL~CR12、CR~CX13、CX~DA14	医短	護岸及び囲障工事	2	0.8~1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構確認	8
15	1989	46	CE30・37・44、CJ・CK45、CL28・29	医病	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	アイソトープセンターL形側溝・集水井	1.4~1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DH60~62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	BG・BI18	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	38
22	1995	14	CD07・08	医病	鹿田地区基幹整備：液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代の土器器出土	38
23	1995	17	CD08~CC11	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工事基礎などで区間全長の1/2程度は破壊	38
24	1995	23	DF56~67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器片・石器出土、調査区西寄りは、GL-2m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65~71	医	研究棟新営に伴う給排水桿・管路	1.2~1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2m ² 、近世溝・中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42・43、BI43・44	医病	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25~1.45	0.45~0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21~28、CF~CL28、CD~CF28~33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	—	面積18m ² 、鹿田11次調査3区南側部分で中世ピット確認	56
37	1999	46	CN46~DE49	医病	病棟新営に伴う污水桿・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝等	56
38	1999	47	CM・CN・CP・CR・CT58、CV・DA・DC・DD・DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0~2.3	—	11ヶ所、南側6ヶ所は河道、7~10ヶ所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う污水検水桿	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘削か。	56
41	2000	25	CD41~CN45	医病	病棟新営その他工事：管路・雨水桿	1.6~1.8	—	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15・21・27、CO31・42、CS45、DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	—	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	0.8~1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG~DJ28~67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1~2.3	1.3~1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道確認	61
45	2001	37	BR~CA43、CA43~55、CA44~CL45、BR~CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調査に伴う機械設置工事	1.65	0.7~0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土した地点あり。	66
47	2002	10	CH11~CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0~1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT・BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5~1.8	—	2ヶ所、GL-1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41~42	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：共同溝排水管	1.5	—	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外灯	1.47~1.66	—	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36~45	医病	エネルギーセンター棟新営その他工事：外溝	0.9~1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI~BS45~53	医病	総合教育研究棟新営その他工事	1.85~2.0	0.8~1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事：植栽移植	1.25	—	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	—	底面で弥生~古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS~BZ45、CA~CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事（屋外排水）	1.7	0.7~1.0	弥生中期？包含層まで掘削、近世土坑・中世ピット多數確認、低地部確認	74
56	2003	9	BL~BS45~53	医	総合教育研究棟外構工事（雨水・污水・実験排水）	0.8~1.75	0.7~0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認	74
57	2003	10	BR~BS50~54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16、AF~AJ17、AJ9~16	医病	医病構内支障ガス管配管替工事	1.0~1.9m	0.7~0.8	接続部で近世~近代の水田層、中世の畦畔を確認。弥生~古墳の河道と推定される砂層を確認。	81
61	2004	5	AE4~16、AF~AI16、AI9~15、AJ~AO09	医病	医病構内支障給水管配管替工事	0.9~1.9m	0.85	桿で中世？~近代の畦畔確認。弥生~古墳の河道と推定される砂層を確認。	81
62	2005	3	DH~DJ18、DJ19	医	医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事	1.1~2.5m	0.7~1.1	一部で弥生~近代層確認	83

〈東山地区〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1983	13	-	教育	附属中学校新設	4.0~5.0	-	シルト層中	1
2	1997	29	-	教育	附属小・中学校他開墾改修工事	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

〈三朝地区：福呂遺跡〉

総号番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
4	1997	18	-	固	実験研究棟新設に伴う電気埋設管路工事	1.0	-	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2006年度現在）

所属	種類	調査名・地区名	箱数（1箱：約30リットル）							備考 (主要時期・特殊遺物)	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
医	◆	鹿田第2次調査(NMRR-CT室)	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期～中世・田舟・木簡等	◆
医短	◆	鹿田第3次調査(校舎)	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世・石帶	10
医	◆	鹿田第4次調査(配管)	3.5	2	0.3			0.2	1	古代・鹿角製品	◆
医病	◆	鹿田第5次調査(管理棟)	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
ア	◆	鹿田第6次調査 (アイソトープ総合センター)	62	59	0.5	1	1.5			中世・青銅製椀	40
医	◆	鹿田第7次調査(基礎医学棟)	81	66		10		1	4	弥生～近世・猿形木製品	53
医	◆	鹿田第8次調査(RI治療棟)	8	8						弥生～中世	53
医病	◆	鹿田第9次調査(病棟Ⅰ期)	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世・木簡3点	56
医病	◆	鹿田第10次調査(共同溝)	2	2						古代～近世	56
医病	◆	鹿田第11次調査(病棟Ⅰ期)	74	66		4		2	2	弥生～近世・木簡1点	56
医	◆	鹿田第12次調査(エネルギーセンター)	147	77	1	54			15	弥生～近世・櫛	61
医病	◆	鹿田第13次調査(総合教育研究棟)	254	211	5	10			28	弥生～近世	71
医病	◆	鹿田第14次調査(病棟Ⅱ期)	66	54		3			9	中世～近世	74
医	◆	鹿田第15次調査 (総合教育研究棟関連)	4	4						古墳初頭・中世	74
大医	◆	鹿田第16次調査 (立体駐車場エレベーター他)	1	1						弥生～近世	81
医	◆	鹿田第17次調査 (総合研究棟(医学系))	111	68	4	8		1	30	弥生～近世	本紀要
全	◆	津島岡大第1次調査(NP-1)	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
農	◆	津島岡大第2次調査 (農学部合併処理槽・配管)	17.5	12	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	◆	津島岡大第3次調査(男子学生寮)	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭・古代～近世・石製指輪・蛇頭状土器片	19
◆	◆	津島岡大第4次調査(屋内運動場)	1	1						弥生早期～弥生前期(試掘調査遺物を含む)	6
大自	◆	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	82	68	3	1	8		2	縄文後期～古墳・古代～近世・耳栓・木製櫛(縄文)・堅果類	27
工	◆	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	49	33	1	9	6			縄文後期～近世・人形木器・アンペラ・人形土製品	35
工	発掘	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
全	◆	津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)	11.5	10	0.5				1	縄文後期～近世	32
工	◆	津島岡大第9次調査 (生体機能応用工学科)	50.5	30	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
全	◆	津島岡大第10次調査 (保健管理センター)	87	78		7			2	弥生前期～近世	65
◆	◆	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
◆	◆	津島岡大第12次調査(図書館)	55	24	1	20			10	縄文後期～近世	65
◆	◆	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北)	12.5	12	0.5					縄文後期～古墳前期・中世	41
◆	◆	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設南)	13	12					1	弥生～古墳	46
◆	◆	津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリ)	68	14	10	20			24	縄文後期～中世・縄文後期・弥生早期遺物・アンペラ・堅果類	72
農業	◆	津島岡大第16次調査(動物実験棟)	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
環	◆	津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎Ⅰ期)	85	62	11				12	縄文後期～近世	77
全	◆	津島岡大第18次調査 (南福利ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
理	◆	津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター)	31	21	1	4		2	3	縄文後期～近世	64

所属	種類	調査名・地区名	箱数(1箱:約30リットル)						備考 (主要時期・特殊遺物)	文献	
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
環	〃	津島岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
工	〃	津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター)	7	5	2					縄文中期～近世	64
環	〃	津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎II期)	37	26	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代壠部材、曲げ物	77
文法経	〃	津島岡大第23次調査(総合研究棟)	90.5	20	0.5	60	2		8	縄文後期～近世、杭(縄文)、石棒	80
文法経	〃	津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下)	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世、杭(縄文)	80
農	〃	津島岡大第25次調査 (農学部散水施設)	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟)	33	17		5		1	10	縄文後期～近世	76
事	〃	津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館)	15	14	1					縄文中期～近世	68
工	〃	津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟)	17	15	2					縄文後期～近世	71
農	〃	津島岡大遺跡第29次調査 (農学部共同溝)	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
固	〃	福呂遺跡第1次調査(実験研究棟)	9	8					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
固	〃	福呂遺跡第2次調査 (実験研究棟スロープ)	2.1	2				0.1		中世～近世	55
医病	試掘 確認	鹿田(駐車場)	1	1						弥生～中世	5
学生	〃	津島北(男子学生寮)	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
大自	〃	(自然科学研究科棟)	1	1						縄文後期～弥生前期	6
事	〃	津島土生(外国人宿舎)	1	1						縄文～中世	8
理	〃	津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3						中・近世	〃
教養	〃	津島南()	0.7	0.7						縄文・中世	〃
工	〃	津島北(校舎)	1	1						縄文～近世	11
農業	〃	津島南(動物・遺伝子実験施設)	0.7	0.7						縄文～弥生・中・近世	〃
事	〃	津島南(国際交流会館)	0.3	0.3						中世	〃
大自	〃	津島北(合併処理槽)	0.2	0.2						中・近世	14
学生	〃	津島南(学生合宿所)	0.4	0.2				0.2		中世	〃
教育	〃	津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3						縄文	〃
図	〃	(図書館)	0.8	0.8						古墳～中世	〃
学生	〃	津島南(学生合宿所ボンブ槽)	0.4	0.4						縄文～中世	18
資生	〃	倉敷(資源生物科学研究所)	0.1	0.1						近世	〃
ア	〃	鹿田(アイソトープ総合センター)	1	1						中世～近世	〃
事	〃	津島北(福利厚生施設)	0.5	0.5						弥生～中世	〃
農	〃	津島南(動物実験施設)	0.1	0.1						縄文～近世	33
環	〃	津島北(環境理工II期)	0.1	0.1						—	53
工	〃	津島北(システム工学科棟)	0.1	0.1						—	53
教育	〃	東山(附属小学校校舎)	1.1	0.1				1		本紀要	
全	立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	〃	84年度	1	1						—	2
〃	〃	85年度	1	1						—	3
〃	〃	86年度	0.5	0.5						—	6
〃	〃	87年度	0.5	0.5						—	8
分布	89年度	三朝・本島	0.3	0.3						—	14
全	立会	91年度 92年度	0.3	0.3						—	21・25
〃	〃	93年度～99年度	0.8	0.8						—	30・33・ 38・44・ 50・53・ 56
〃	〃	00年度	3	3						—	61
〃	〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
〃	〃	03年度	2	2						—	74
〃	〃	04年度	1	1						—	81
〃	〃	05年度	1.1	0.1				1		—	83
〃	〃	06年度	1.1	0.1				1		本紀要	
総 箱 数			2836.7	2001.6	80.6	433.2	25	18.1	278.2		

* 木器・種子・サンプルの箱数は、資料整理が進むにつれて収蔵形態が変化するため、特に箱数の変動が大きい。
文献は付表4・5の番号に対応する。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集		1985年5月

番号	名 称	発行年月日
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告II（農学部構内 BH13区他） 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度	1987年10月

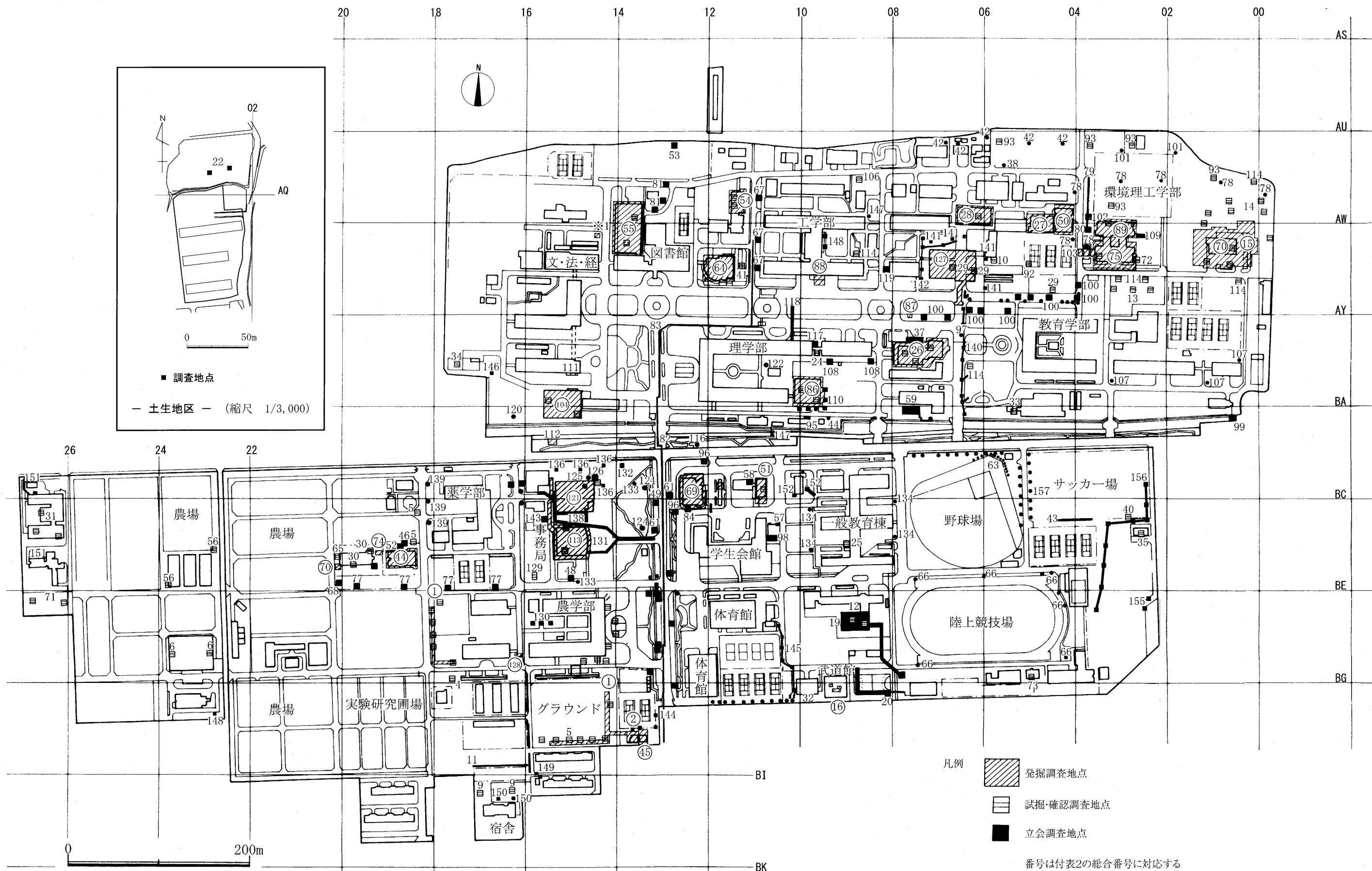
* 太字：発掘調査報告書

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2007年3月まで)

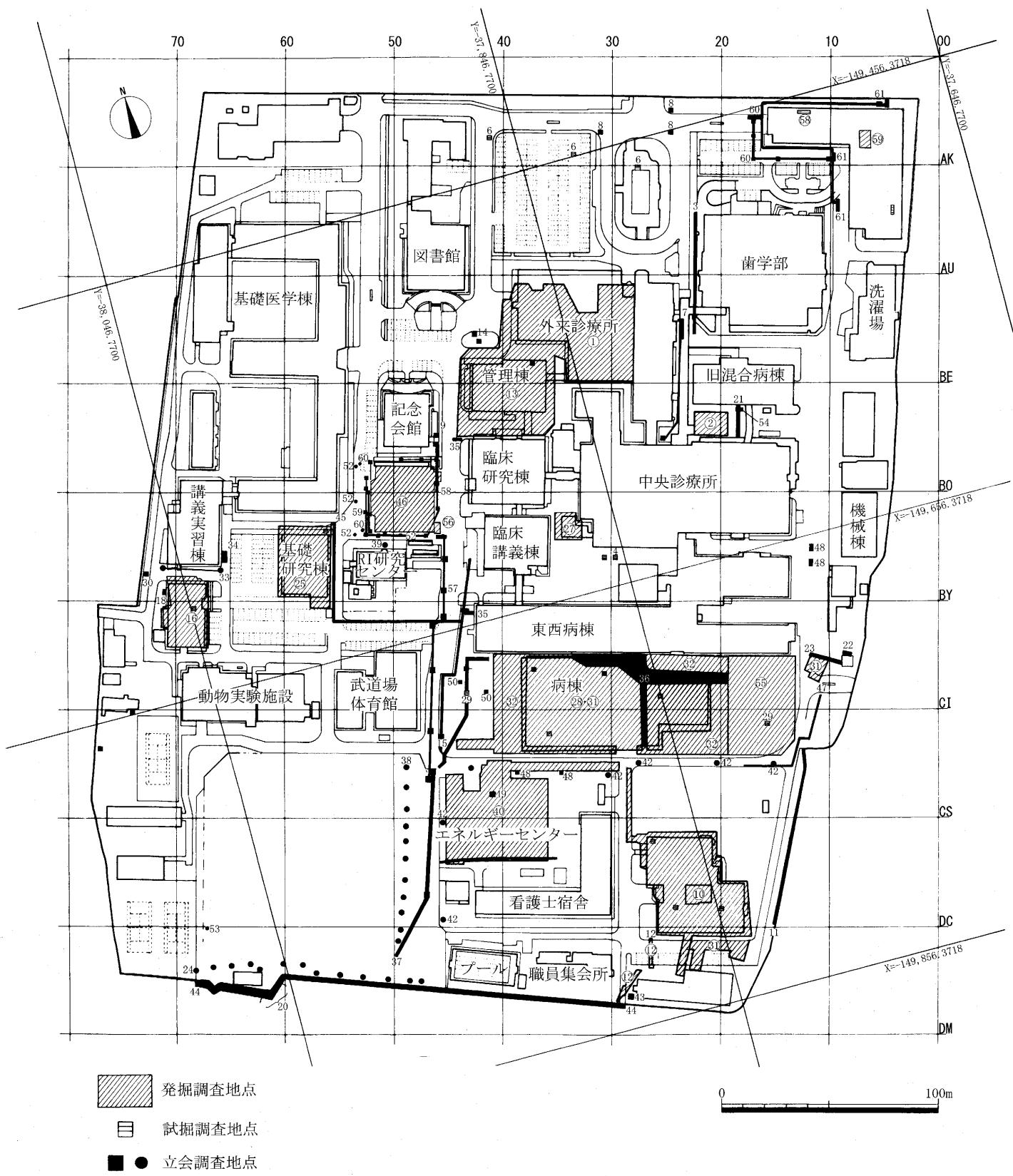
番号	名 称	発行年月日
7	鹿田遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡 II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報 11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月

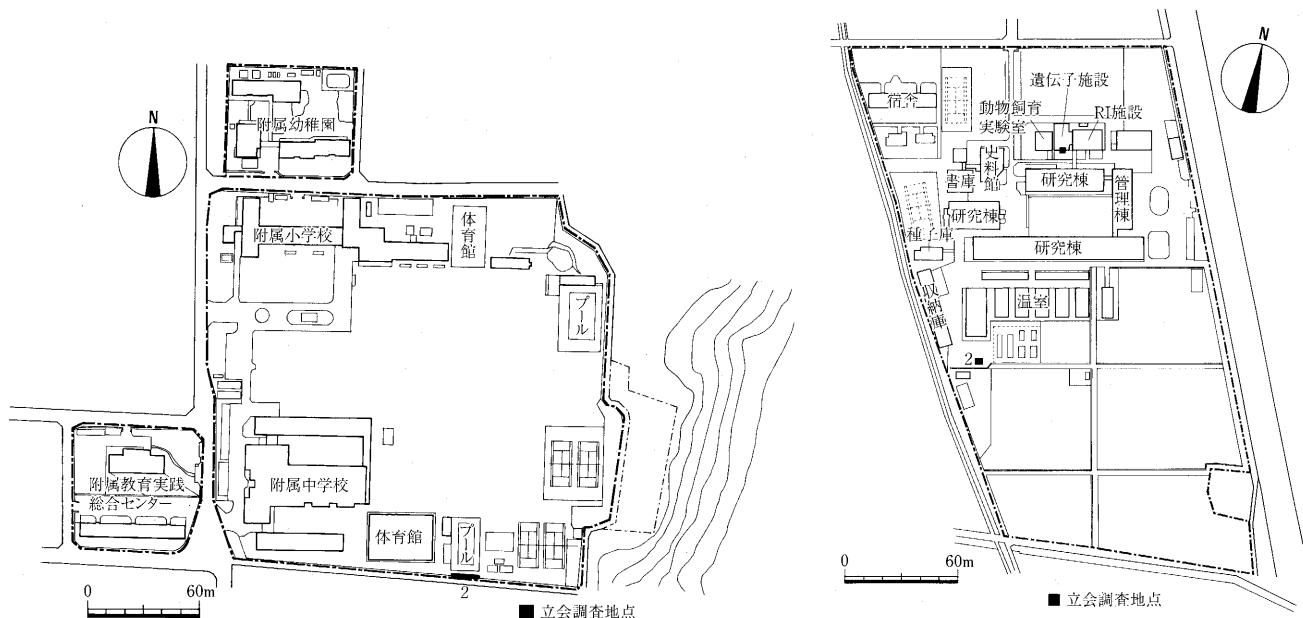
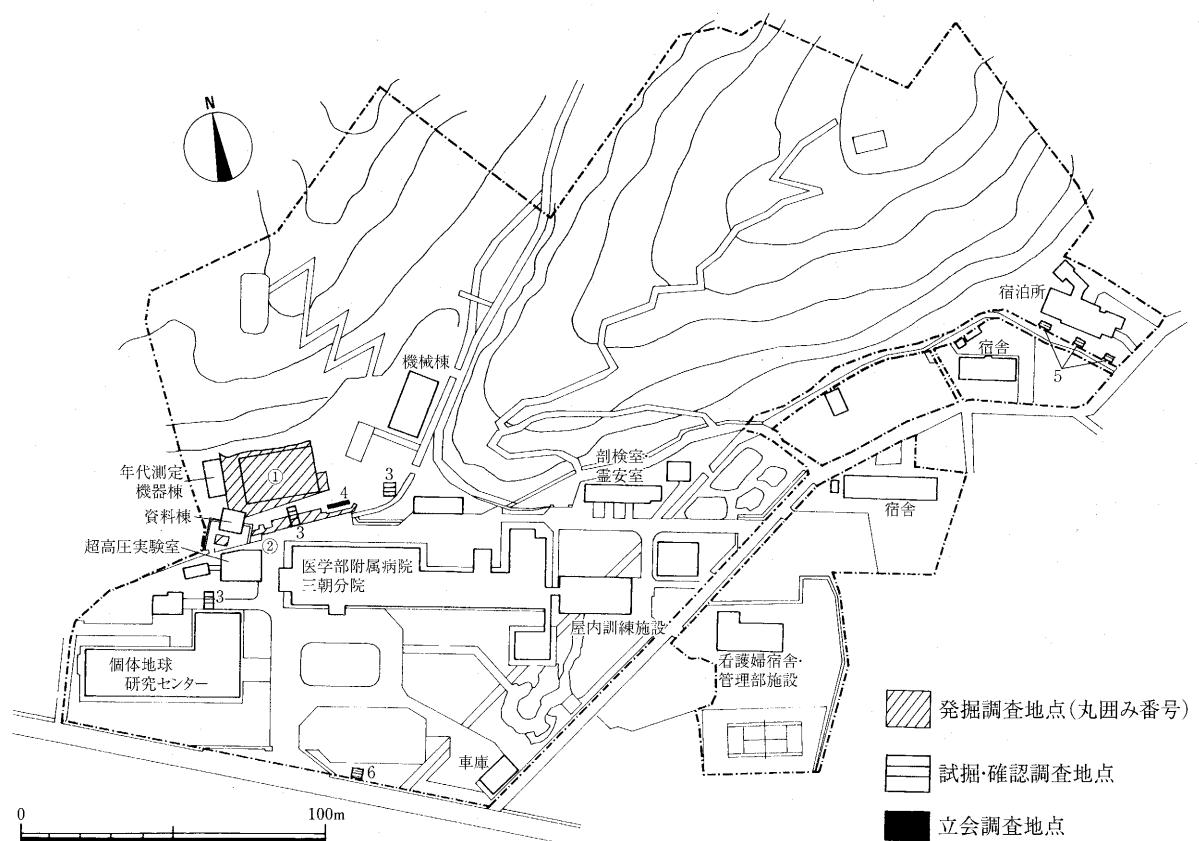
番号	名 称	発行年月日
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊	2007年3月

* 太字：発掘調査報告書



付図1 2005年度までの調査地点【1】一津島地区ー（縮尺 1/4,000）





Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2008年3月21日 印刷
2008年3月21日 発行

**岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2006**

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中三丁目1番1号
(086) 251-7290
印刷 友野印刷株式会社



BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2006

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>